

2018(平成30)年度

兵庫県

NIE 実践報告書

「教育に新聞を」実践 高等学校編

◇未来を創造する力を育むNIE活動

(兵庫県立兵庫高等学校)

◇NIE活動を授業改善、授業力向上に生かす

(兵庫県立湊川高等学校)

◇NIE新聞を活用した、生徒が自ら学べる授業づくり

(兵庫県立北須磨高等学校)

◇学びの質を深めるNIE活動

(兵庫県立加古川北高等学校)

◇新聞を活用した国語科の授業実践例(2)

(兵庫県立姫路東高等学校)

◇新聞を通して社会への関心を高め、
社会の一員としての自覚を高める

(兵庫県立武庫荘総合高等学校)

◇社会とつながるNIE実践

(兵庫県立津名高等学校)

「教育に新聞を」実践 中学校高等学校編

◇「新聞で教室は社会とつながったのか？」

(神戸山手女子中学校高等学校)

兵庫県NIE推進協議会

兵庫のN I E～次なる深化と広がりにもむかって～

会長 秋 田 久 子

2018年度、兵庫県のN I E活動は20周年を迎えました。兵庫のN I E活動を推進してくださったすべての皆様に深い敬意と感謝をささげます。ありがとうございました。

これからも、現場の先生方が工夫されたN I E活用方法の共有をすすめ、推進協議会からの発信も加えて、皆様とご一緒に兵庫の子どもたちの学びを支援していきたいと願っています。

さて、平成30年度の新しい取り組みを三つ、お伝えします。

一つ目は、推進協議会が発案し、養父市立建屋小学校と協働した「イングリッシュ・マラソン」です。複数の英語課題ブースを攻略するスタンプラリーです。建屋小学校では校内8カ所のブースを1～6年の縦割り班で攻略しました。大小の頭を寄せての作戦会議、6年生の「Let's go!」で必死に取り組みます。改めて、言葉は状況の中にある見様見真似で修得していくものだと思います。PTAさんも課題作りやブース運営に関わって盛り上げてくださいました。

二つ目は、県立神戸聴覚特別支援学校のN I Eです。特別支援学校の実践は兵庫では初めてです。生徒の皆さんの意欲と文章表現力の向上に驚きました。

皆さんは手話をなさいますか。手話の中心は自立語です。唇の動きなどで助詞助動詞などの付属語を補うこともあります。しかし、やはり、正確な読解と伝達には助詞が必要です。神戸聴覚の児童生徒はN I Eで正確に適切に助詞が使えるようになりました。

新聞づくりを学び、自分のテーマで新聞を作りました。それを先生方が廊下に全部掲示してくださいました。友人の新聞を読み、また、読んだ先生や友人に褒められて、そのうちに、毎日のように「自分の新聞」が発行されて、昨日の自分新聞に重ねて掲示されていきました。廊下にとりどりの新聞がはためています。いつしか正確に助詞が使えるようになり、さらには「見出し」では助詞を抜いて端的に強調することができるようになりました。「助詞を抜いた見出しが出てきた」と見せてくださった斎藤先生の笑顔を思い出すと、いまでも胸が熱くなります。

事実を端的に伝える無駄のない文章…それが新聞です。新聞を活用してinputとoutput両方をうまく組み合わせると、意欲と文章表現力が顕著に向上することを教わりました。

修学旅行先で、N I E実践中の他県の特別支援学校と交流を深めるなど、outputの喜びをさらなる学びにつないでいかれた神戸聴覚特別支援学校の先生方に大きな拍手を送りたいと思います。

三つ目は、生徒自身の言葉でN I E体験を発表してもらったことです。

実践発表会では県立兵庫、北須磨、加古川北高校と神戸山手女子高校の4人の高校生

によるシンポジウムを開きました。「女性の性認識で男性の身体を持つ人を、あなたは女子大に入学させるか」という目が覚めるような問題提起でのNIE活動が紹介されました。また、進路選択や起業のための情報収集について、あるいは主権者教育の提案など、NIEを存分に活用した高校生の発言に、会場から歓声が漏れました。彼らのしっかりしていること、カッコいいこと、日本の未来は明るいと思いました。きっと会場の皆様も同じ気持ちだったに違いありません。

三つの活動に通底しているのは、「新聞を資料として用い、児童・生徒自身の活動にし、成果を自身の行動や言葉で表現させる」という先生方の工夫です。学習にNIEを沿わせることで、児童・生徒の意欲が大きく促されて主体的な活動に変化していました。

この実践資料集で、上記も含めてのさまざまな工夫を共有いたしましょう。

さらに、この実践資料集が、先生方の貴重な取り組みを保護者はじめ子どもたちの周囲の方々にも知らせる契機になることを願っています。それがひいては、「新聞に触れる環境」になって広がり、子どもたちの将来を切り拓く意欲と学力を育てていくでしょう。

どうぞこれからもご一緒に、よろしく願いいたします。

<目次>

巻頭言 「兵庫のN I E～次なる深化と広がりについて～」

兵庫県N I E推進協議会会長 秋田 久子 …………… 1

【小学校】

新聞を見てみよう！ 応募してみよう！

西宮市立春風小学校…………… 8

主体的に生き生きと学び合う子どもの育成

伊丹市立池尻小学校……………12

新聞に親しもうⅡ～論理的思考力の育成のために～

三木市立豊地小学校……………16

わたしたちの生きる社会に学ぼう

～子どもの学びと社会をつなげるN I E～

たつの市立揖西東小学校……………20

新聞を読み、内容や感想をまとめる活動を通して、書く力を高める

神戸市立向洋小学校……………24

新聞をつかった表現力の育成について

～相手を意識して読む・書く・話す～

加古川市立川西小学校……………28

Let's do it together! Let's start!

～全校で取り組んだEnglish Marathon～

養父市立建屋小学校……………32

【中学校】

“今”を知って伝えよう！

猪名川町立猪名川中学校……………38

新聞活用を通じた生徒の言葉の育成

神戸市立山田中学校……………42

新聞に親しみ、「学力」向上を目指す

尼崎市立大庄北中学校……………46

N I Eノートから世界を考える。

西宮市立平木中学校……………50

【中学校高等学校】

「新聞で教室は社会とつながったのか？」

神戸山手女子中学校高等学校……………56

【高等学校】

未来を創造する力を育むN I E活動

兵庫県立兵庫高等学校……………62

N I E活動を授業改善、授業力向上に生かす

兵庫県立湊川高等学校……………66

N I E新聞を活用した、生徒が自ら学べる授業づくり

兵庫県立北須磨高等学校……………70

学びの質を深めるN I E活動

兵庫県立加古川北高等学校……………74

新聞を活用した国語科の授業実践例（2）

兵庫県立姫路東高等学校……………78

新聞を通して社会への関心を高め、
社会の一員としての自覚を高める

兵庫県立武庫荘総合高等学校……………82

社会とつながるN I E実践

兵庫県立津名高等学校……………86

【特別支援学校】

神戸聴覚N I E 希望の風にのって

～主体的、対話的に考え、そして深い学びへ～

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校……………92

2018年度兵庫県N I E実践指定校

……………96

【 小 学 校 】

新聞を見てみよう！応募してみよう！

西宮市立春風小学校 校長 宮脇 直代
教諭 田村 修史

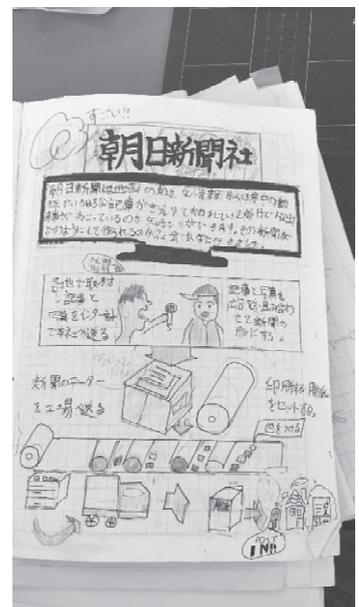
1. はじめに

本校は全児童数が 800 人を超え、市内でも比較的大きな学校である。校区は国道 2 号線より南、阪神電車甲子園駅より北となっており、住宅地が密集している地域である。甲子園球場には、徒歩でも行ける地域である。学校北側に隣接する瓦林公園をはじめ、春風公園など子供たちが遊びやすい環境が整えられている。集団登校では、各地域の保護者が当番制で、保護者も来校する機会も多く、参観日だけではなく普段から子供たちの様子を見守ってくれている。

また、2017 年より校舎改築事業新校舎改築が始まり、2019 年の 7 月からは本格的に改築工事が始まる。そのため、例年 9 月末～10 月上旬にかけて行われている体育会は、工事の影響により 2019 年度は 5 月開催になる。さまざまな行事も例年通りの日程や場所の確保等も難しくなってくる。そういった工事が始まり、運動場が半分以上狭くなる環境の中で、児童が意欲的・自発的に学習できる環境づくりが必要だと考えている。

そんな環境の中、N I E 実践校としての取り組みを始めた。1 年目の昨年度は、新聞購読を生活の中に浸透させていく工夫を行った。N I E 実践校の 2 年目となった今年度は、児童が調べたくなる・見たくなるような発問を意識して取り組みを行ってきた。

2. 興味・関心・意欲を高める取り組み その 1 (朝日新聞社への社会見学)



5 年生は、朝日新聞阪神工場へ社会見学に行った。新聞の作り方や、運送方法はもちろんのこと、上の 2 枚の写真のように新聞紙の有効活用についても学ぶ機会となった。右の写真のように、2 人が座ってもくずれることのない新聞いすに、児童は大喜び。

新聞は、大人が読むものという考えから、いろいろなものに使えることも分かったようで、新聞との距離が一気に近づいたように感じた。また、まとめを行うことで、新聞への興



味を持つことができた。新聞を身近に感じることで、教職員にとっても大変有意義な社会見学となった。

3. 興味・関心・意欲を高める工夫 その2(全学年が見ることのできる掲示物作り)



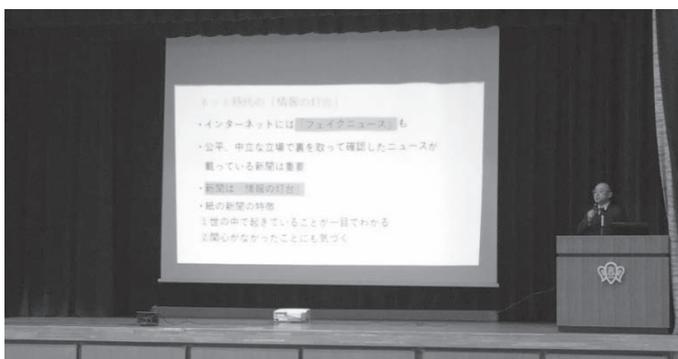
右上の写真は職員室前の掲示板である。たくさんの児童が通る場所に、意図的に新聞を掲示することで、どの学年も足を止めて見てくれることができた。

また、新聞紙で作られたエコバッグは大人気だった。表の記事を変えるだけで、オリジナルのエコバッグができるのも大変魅力的である。このエコバッグも朝日新聞阪神工場で各クラスに配られたものであり、表が高校野球の記事であることも児童にとっては、嬉しかったようだ。どうやって作っているのか、補強はどうしているのかなど、自分たちで作りたいという意欲も見られた。

実際に作る時間はなかったが、きっと興味を持った児童は、自発的に新聞で作ることができるものを、調べたり、作ったり、まとめたりすることだろう。

オリジナルの新聞も作ってもらうことができたが、新聞社の作る新聞は、教材にもなる。タイトル・見出し・リード・本文・写真やグラフ・資料など、新聞を読むうえで必要な要素がすべて入っており、児童も新聞作りの参考にしていた。また、他の新聞を見てみたいという興味にもつながっていった。

4. 興味・関心・意欲を高める工夫 その3(出前授業を聞こう！)



時事通信社神戸総局長の島内真人さんにお越しいただき、出前授業を行っていただきました。

島内さんは出前授業を行うまで、何度も連絡をくださり、児童の様子や、児童が求めている内容、さらには教師側の意見も取り入れてくれるなど、丁寧な対応を取っていただき、感激しました。

新聞に興味を持ち始めた児童にとって、新聞記者からの授業は充実したと感想文でも書いてあった。出前授業の中でも、特に新聞記者の人数、最新の情報を各新聞社へどのように提供するのか、たくさんの人が読む新聞記事には正確な情報や記事の責任などが伴うなどが興味深かったようだった。

新聞の見えない裏側の部分を知ったことで、新聞記事の一つ一つには見えない努力があることを児童は気

付いてくれた。

5. 興味・関心・意欲を高める工夫 その4(年賀状をゆるキャラに書いてみよう！)



児童は、新聞記事に興味を持つ中で、大変面白いことに興味を持ち始めた。

それはゆるキャラの存在である。世の中にはたくさんのゆるキャラが存在し、さまざまなイベントでも活躍している。

2017年の年末には、東京オリンピック・パラリンピックのマスコットを小学生が選ぶという大変貴重な体験をしてきた児童にとっては、なじみ深いものになっていると思う。マスコットが決定した後も、関連記事はたびたび目にしてきた児童も多かったようだ。

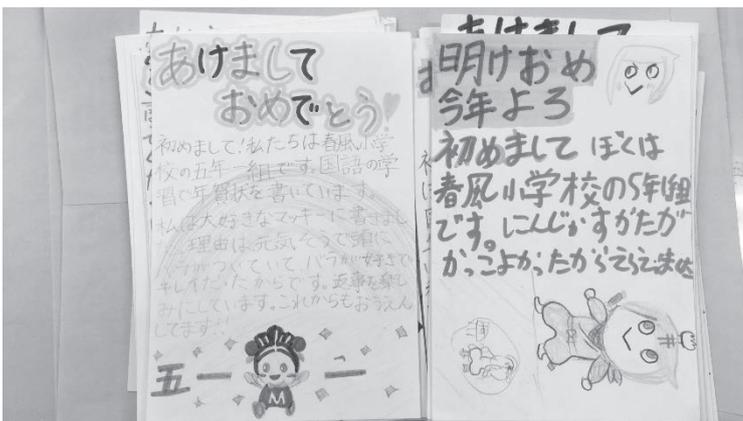
2018年7月には、「ミライトワ」や「ソメイティ」という名前も決まり、2020年に行われる大会を児童は楽しみにしている。

また、西宮市にもたくさんのゆるキャラが存在し、中でも「みやたん」は児童にとってもなじみ深いようだ。

12月には、5年生が興味のあるゆるキャラに年賀状を書いてみた。自分たちの学校のことや、年賀状を出した理由などを児童は一生懸命考えて書いた。

住所は学校あてにしていたので、届くのを楽しみにしていた。1月になると続々と学校へ年賀状が届いた。

左の写真はごく一部だが、約70%の年賀状が2月までに届いた。返信があった児童はもちろんだが、今まで以上に新聞やニュースで、ゆるキャラに興味を持った児童も多く、新聞記事から



ら探している児童もいた。

応募することの楽しさ、返信があることの嬉しさ、そして年賀状を通して繋がることの感動を感じたようだ。こういった取り組みを行っていく中で、「先生! 新聞にも応募することができるらしい!」と気づいた児童がいた。児童が手にしている新聞を見てみると、俳句や書道の応募作品が新聞にたくさん掲載されていた。

児童に「応募してみたい?」と聞くと、少し照れながら、「選ばれるのかな? 選ばれたいです」と言っていた。春風小学校では、本年度、俳句・川柳をテーマに校内にオリジナルポストを置いて、学期に一度ずつ、皆で作品を応募するといったユニークな取り組みを行った。応募した作品を、教職員が一つずつ吟味し、最優秀作品や優秀作品、佳作などを掲示板に貼り、校内放送で紹介するなど、楽しい取り組みが根付いた。

選ばれる喜びを今度は、新聞を使って実践してみたいと感じる場面でもあった。応募に来年度の課題として、児童がやってみたいと思うのであれば、協力していきたいと考えている。それは、児童だけではなく、教職員も一緒に応募できると嬉しい取り組みになると思う。

6. 興味・関心・意欲を高める工夫 その5(雪だるまを作ろう！)



左の写真は、2016年12月23日の神戸新聞の記事である。1年間頑張った児童に何かできないかと教職員で考え、終業式に雪だるまを作って学校に飾った。児童は大喜びで、神戸新聞からも記者が取材にきてくれました。それから今年度で3年目となるが、毎年児童の喜ぶ姿を思い浮かべて、教職員でオリジナルの雪だるま作りに挑戦している。雪だるまの材料は、西宮市鳴尾浜にある「ひょうご西宮アイスアリーナ」のスケートリンクを削った氷をご厚意で毎年いただいている。

作成するのは大変で、準備にも時間がかかるが、児童も年に一度のイベントを楽しみにしている。ある児童はなかなか登校できない日が続いている。しかし、この雪だるまがあるおかげで、この日だけは楽しみに登校できた児童もいる。お金をかけずに、教職員でアイデアを出し合って、3年間続けることができている。

新聞に掲載されたことで、学校の様子が地域にも伝わり、地域の方も楽しみにしているようだ。何十年も母校と疎遠になっている卒業生がこの記事を見た時に、きっと嬉しかったはずである。母校が新聞に掲載された時の嬉しさは、新聞が持つ、大きな魅力であるといえよう。

これからも、ステキな記事を提供できる春風小学校であり続けていきたい。

忙しい中、笑顔で協力をしてもらい、いつも感謝の気持ちでいっぱいである。

7. 成果と課題

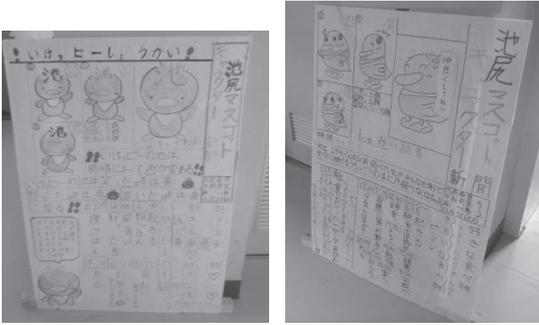
NIE実践校として2年の月日が流れた。この2年間で私だけでなく、たくさんの教職員も新聞の読み比べに興味を持っていただけた。参観日の時には、保護者が普段取っていない新聞を手に取り、それを自分の子供に見せている。すてきな光景だと思う。

クラスでも、1年を通してたくさんの新聞記事を紹介することができた。全教科・全領域に関係する記事が存在する。難しく考えるのではなく、興味をもった記事を今後も追いかけていくことで、児童の夢は広がるかもしれない。何気なく目にとび込んできた記事に興味を持つ児童がいるかもしれない。そこに新聞があるだけで、児童の人生が変わるかもしれない。それが新聞の大きな魅力だと感じた。

毎年3カ月間に大量な新聞をたくさんの児童に届けることができた。このご時世、インターネットの普及により、新聞を購読していない家庭が増えたのも事実である。そんな家庭環境がある中、NIEが学校現場に直接かかわることの重要度は今後ますます増えると思うし、活用方法も広がると考えている。

NIE実践校としての役割を終えるが、今度は教職員がどんなアイデアを持ち込み、新聞をどう有効活用していくのかとても楽しみである。そんな時に、再びNIE実践校としてもう一度取り組みたいという声が増えた時には、レベルアップした実践ができると考えている。

たくさんの実践報告会に参加させてもらい、私自身も活用の幅が大きく広がった。今後も引き続き、NIEの動向を追いかけていきたい。



(3) 廊下や階段の掲示

各学年の子どもたちの興味に合う記事や、世界的なイベントの記事を廊下や階段の踊り場などに掲示した。また、学習内容に合う記事を掲示することで、実社会との結びつきを意識できるようにした。



3 実践

(1) 各学年の取り組み

① 2年生の取り組み

図工で、新聞紙を丸めたり、くしゃくしゃにしたりして、かばんや服、大きな紙飛行機など好きなものを作った。大きな紙なので実際に着ることが出来る服にしたり、折り紙ではできない大きな紙飛行機を作ったりすることができた。



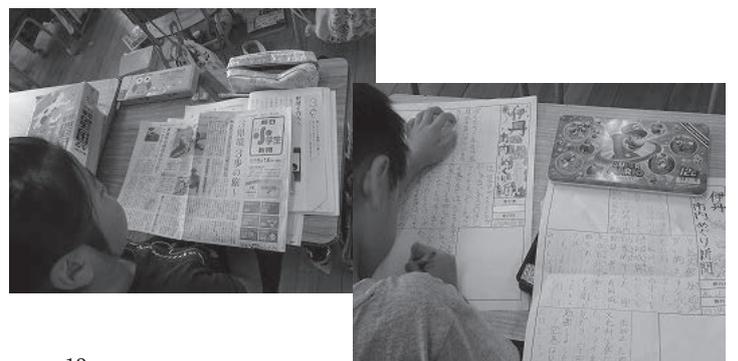
② 3年生の取り組み

市内めぐりで学んだことを新聞にまとめる学習。書く時の参考にするために、小学生新聞を1日分じっくり読んだ。「マンガがおもしろかった。」「写真があってわかりやすい。」と気づいた。新聞の題字の書き方、事実と意見の書き方、見だしのつけ方等々、新聞を書く学習を通して、市内めぐりで学びを整理し、読み手にとってわかりやすく表現する力も高めた。



③ 4年生の取り組み

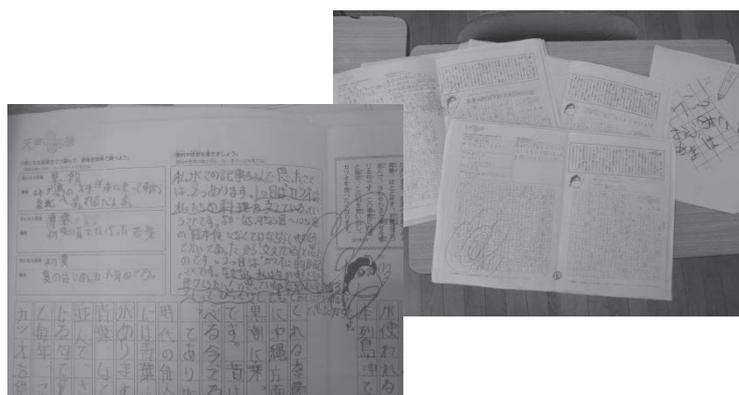
⑦ 国語『新聞を作ろう』の学習。全員同じ小学生新聞を見ながら、見だしの書き方や新聞の構成について学んだ後、体験してきた宿泊学習について新聞にまとめた。



④ 図工では、新聞に載っている写真を使い、写実的な人間を描く練習をした。新聞の写真なので気兼ねなく線を引くことができ、目と耳のところに線を入れて顔のバランスを学習することができた。知っている有名人が載っていることで子どもたちも興味をもって取り組んでいた。

④ 5年生の取り組み

朝の学習で、朝日小学生新聞の「天声こども語」の視写を年間10回程度取り組んだ。語彙の習得を目標にして、短い時間の中でていねいな字で書き写した。書き写した後、気になる言葉を辞書で調べ、タイトルを考えたり、要約や感想を書いたりした。普段の生活では使わない言葉や表現に触れ、作文や新聞を書く時に使う表現の広がりが見えた。



⑤ 6年生の取り組み

国語と総合学習の教科横断的な学習の「世界を幸せにするアイデアを発信しよう」で、市の担当者に向けてのプレゼンを作り発表した。まず、学校に届く新聞の中から、アイデアにつながる記事を見つけスクラップブックを作った。そして、持続可能な開発目標 (SDGs) について学び、集めた新聞記事からヒントを得て自治体や国などのレベルで取り組むべき方策等について、自分たちの



考えをまとめることができた。

(2) 「ことまど」を使った取り組み

① 6年生は、修学旅行での学びを新聞にまとめた。よりよい見だしや記事を書くために、学級で本物の新聞を見ながら読み手を引きつける見だしや記事の書き方を考え、友だちどうし自分の書いた新聞を見比べて推敲した。パソコンルームで新聞作成アプリ「ことまど」を使って、自分の伝えたいことが読み手に伝わるように、写真や見だし、リード文等を工夫して打ち込んだ。神戸新聞社からその学習の様子を取材に来られた際、子どもたちは「見だしを書く時にはどんなことに気をつけていますか。」等、自分たちの新聞に生かせるようにと活発に質問もして、たくさんのアドバイスをいただいた。

② 5年生は、国語と総合、社会の教科横断的な学習で、「池小新聞記者への道」というテーマで、年間を通して取り組んだ。「事実と意見」「見出し」「推敲」「写真」と新聞づくりのめあてを分け、年間4回「ことまど」アプリで新聞を作成した。本物そっくりの新聞ができあがるので、子どもたちは意欲的に新聞づくりに取り組んだ。見出しコンテストやお互いの記事を推敲するなど、友達の作品を読むことで、表現の工夫や良さを自分の新聞に生かすことができた。



③ 4年生は、二分の一成人式に向けて、自分の生まれた時のことや小さい頃のことなどを家の人へインタビューし、「ことまど」で新聞を作成した。文字の入力には苦労していた子どもたちだったが、完成した新聞

が印刷されて出てきたときには満足そうな顔が見られた。

④ ことまど新聞コンクール

5、6年生はことまど新聞コンクールにも応募した。新聞を書いて学校内での発表や掲示に終わるのではなく、コンクールに応募するという目標もあることで、子どもたちの学習意欲が高まった。

(3) 記者派遣事業

神戸新聞社から新聞記者の方に来ていただき、新聞作りや文章の書き方について教えてもらった。5年生は「記事と写真と見だしの関係や記者の思いの書き方」、6年生は「卒業文集に向けた思いをこめた文章の書き方」を学んだ。記事の書き方は、「わかりやすく、簡単に、短く」、5W1Hを入れて1文目だけで伝えたいことが伝わるように書くことなどを教わった。見出しは、一目で記事の内容を伝え、読者に「読みたい」と思わせるように、具体的に書くことを教えてもらった。



(4) スキルアップ研修（教師の授業力向上）

夏休み中のスキルアップ講座には、神戸新聞社の梶岡さん、徳永さん、武藤さんを講師に迎え、職員が新聞アプリ「ことまど」の使い方を学んだ。順番に設定をしていくことで、簡単に本物のような新聞ができることがわかった。作成した新聞は、廊



下に掲示し、子どもたちに披露した。

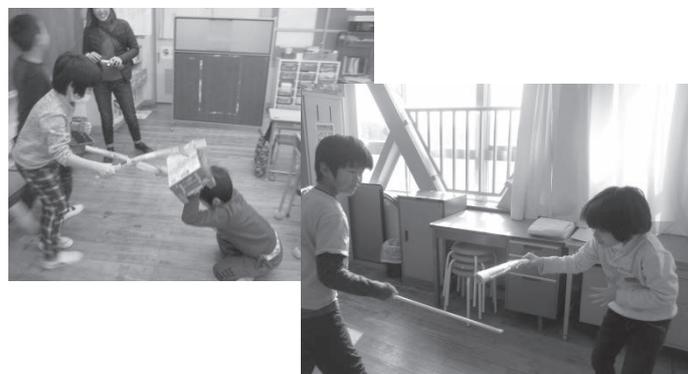


(5) 教科外での取り組み

① サッカーワールドカップ期間中に自然学校があった5年生。テレビの無い生活の中で、日本対コロンビアの試合結果を知るために新聞を見ていた。社会とつながる情報を得るためには新聞が頼りであった。何人もの子どもたちが一つの新聞を取り囲んでいた。



② 特別支援学級では、新聞紙を棒状にして新聞刀を作った。細く丸めていくことで、手先の訓練になった。その後は、チャンバラごっこをして、体を動かしながら友達との仲を深めた。



4 おわりに

NIE 実践指定校2年目は、低学年や特別支援学級では新聞に触れ興味をもつ学習、高学年では新聞を使いながら自分の発表につなげる学習と、学年の発達段階に合わせて取り組んだ。1年目よりも幅広く新聞を活用することができた。

2年間を通し、新聞の活用は文章力や語彙力、表現力の向上、学習意欲の向上などの効果があることがわかった。これからもNIEの実践を通し、より効果的な新聞の活用方法を探っていきたい。

新聞に親しもうⅡ ～論理的思考力の育成のために～

三木市立豊地小学校 校長 大江 実代子
主幹教諭 揚田 祥子

1. はじめに

本校は、全校児童 54 名、学級数 6（内、複式学級 1、特別支援学級 1）の小規模校である。学校教育目標「こころ豊かに 逞しく学び続ける子の育成 ～やさしく かしこくたくましく～」を掲げ、日々の教育活動にあたっている。本年度の研究テーマを「論理的思考力を育成する授業の創造」とし、その具体的取り組みのひとつとして N I E を推進することとした。実践指定 2 年目となる。

図書室に新聞があり、各学年の教室に N I E コーナーがある環境が当たり前の日常になり、児童の「新聞に親しむ」という課題はクリアされた。そこで、本年度はさらに各学年の児童の実態を鑑み、学校のあらゆる教育活動において「新聞を読む・記事をつくる」「新聞を活用する」活動を仕組み、論理的思考力を育成することを目標に取り組むこととした。以下に、その取り組みの一端を紹介する。

2. 学校として

(1) 実践についての共通理解

N I E 実践指定 2 年目の充実のために研究推進委員会及び職員会議において共通理解を図った。

(2) N I E 推進計画作成

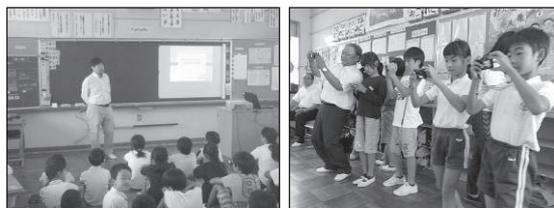
昨年度の成果と課題、児童の実態を踏まえ、各学年及び各教科・領域において推進計画を見直し、作成した。

(3) 環境整備

新聞係（1 年生）の活動、自由閲覧コーナーの充実、N I E 掲示板の活用。

(4) 記者派遣事業（4・5・6 年生対象）

9 月 1 8 日（火）、産経新聞大阪本社編集局神戸総局次長の藤原直樹さんをお迎えして、「みんながわかりやすい新聞づくりの極意」というテーマで新聞づくりについて学んだ。はじめに、「新聞ができるまで」の動画を視聴。児童らは、新聞記事の取材・執筆から編集、印刷、輸送・配達までの一連の工程が正確かつ迅速に行われ、自分たちの手元に届けられているのだということを改めて認識するとともに、藤原さんのお話に興味津々で聞き入っていた。続いて、5 年生が実際に体験してきた「自然学校」を題材に新聞を作るとすると、まず何を考えどうしていくのが良いか、具体的に方法を指導していただいた。あわせて、本事業について藤原さんが記事にされるのに使われる写真を撮る体験もさせていただき、カメラ係になった児童は嬉々として取り組んだ。届けていただいた翌日の産経新聞には、この特別授業の様子がニュースとして写真入りで掲載されており、児童らは更に新聞を身近に感じることができ、大喜びだった。



詳細 (<http://www.miki.ed.jp/el/toyoti/index.cfm/1.2027.35.html>)

(5) その他

- ・新聞感想コンクール等への応募
- ・授業など積極的な新聞活用

3. 各学年の取り組み

(1) 1年生

学校としてNIE指定2年目とはいえ、1年生にとっては初めてふれる新聞である。登校後、朝の準備が整うと、校門のNIEポストへ駆けていき新聞係の仕事をする。これが小学校での1日の始まりである。当初は、新聞と広告チラシの区別もつかない児童も多かったが、今では新聞の銘柄も分かるし、1面の写真を見れば「これ、知っている。テレビのニュースでやっていた。」と話題にできるようにもなった。



(新聞係の毎朝の活動は、1年生が担当)

読める文字が少ない1年生なので、子ども新聞を読み聞かせたり、新聞の写真に目を向かせたりしていると、写真から色々なことを読み取ったり考えたりできる児童が増えてきた。

そこで、新聞の写真を活用した学習活動を多く取り入れた。たとえば、「ぼく・わたしだけのお気に入り写真アルバム」づくり、新聞スクラップコンクールへの取り組み、自主学習ノートでの「新聞スクラップ」、算数科単元「おおきなかず」での「100人あつめ」など、楽しく学習に取り組むことができた。



(自学「新聞スクラップ」 算数「100人あつめ」)

また、全校で新聞づくりにも取り組むということで、生活科での学習活動を伝える「はがき新聞」づくりにも挑戦した。作成した新聞に上級生から温かいコメントをもらい、新

聞を自分でつくって読んでもらう喜びを発見した。

これから成長し世界を広げていく児童にとって、学校でも家庭でも新聞を身近なものとして感じられるようになったことは大きな成果である。

(2) 2年生

国語科「今週のニュース」で、身近なできごとを新聞の形式でまとめて知らせる学習をきっかけとして、身近なニュースを、はがき新聞（はがきサイズ大の新聞の形式）にまとめて、定期的に知らせる活動を行った。クラスだけでなく、全校生に見てもらうことが前提であるため、オリジナルの新聞名をつけたり、見出しや写真代わりにイラストを工夫したりして、読んでもらう人のことを意識した表現活動ができた。

また、「気になるニュースや記事を紹介しよう」というテーマでスピーチを行った。各々が気になった新聞記事について、なぜ気になったのかということや感想をスピーチした。この取り組みをきっかけとして、ニュースや新聞に関心があまりなかった児童が興味・関心をもつことにつながった。



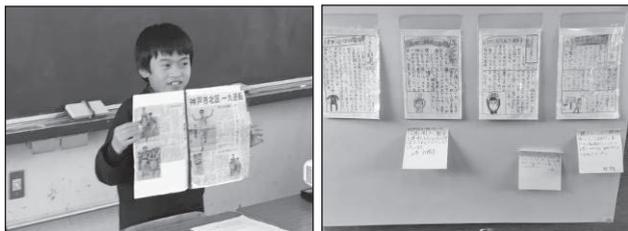
(「はがき新聞」交流 スピーチ「気になるニュース」)

(3) 3年生

「気になる記事について話そう」というテーマで、自分が興味・関心をもった記事を取り上げ、自分の意見や感想を話すスピーチを行った。各々が気になった新聞記事についての感想や意見を話した。学習を通して、その後も気になった新聞記事について取り上げて自主学習ノートに意見や感想を述べるように

なるなど、世の中の出来事への関心に高まりが見られた。

また、昨年に引き続き、身近なできごとや知らせたいこととはがき新聞の形式で知らせる活動を行った。児童は、読む人に分かりやすくするために、見出しや構成、どんな絵や図がいいかなど、見てもらう人を意識して、取り組む姿が見られた。活動を通して、表現力を高めることができた。



「気になる記事について話そう」「はがき新聞」交流

(4) 4年生

国語科「新聞記事からリーフレットでしようかしよう」の学習で、気になる新聞記事について調べ学習をし、リーフレット作りをする際に活用した。



子どもたちは自主学習の中で、興味をもった新聞記事をスクラップし、それについてわかったこと、感じたこと、自分の意見を書く活動を繰り返し行ってきた。また、ある月のスピーチでも、自分の興味のあるニュースについて新聞記事を使って発表をする活動をしてきている。そんな子どもたちにとって、新聞記事を読むことはさほど抵抗がない。今回は、さらにくわしく読んだり、詳しく調べたりして、わかりやすく書くことに重点を置いて取り組んだ。

て取り組んだ。

子どもたちはたくさんの記事を読み比べ、時には友達と記事の内容について楽しく話をしながら、リーフレット作りの記事を選んで行った。

この学習を通して、限られた紙面の中で、わかりやすく伝えるために、要点をまとめる力がついた。また、新聞記事を参考に文章を書いたことで、論理的に書くことにもつながった。

(5) 5年生

国語科「新聞を読もう」や記者派遣事業より、新聞には題名、見出し、リード文、本文があることを学習した。また、図や写真を自分の思いに合わせて選ぶことで、より記事の内容が伝わりやすくなることを学んできた。さらに、産経新聞社の藤原さんに教わったことを基に自然学校新聞を作成した。

今回は、自然学校での活動の様子を伝える新聞を、エクセルを活用して行った。写真を見童自ら選択し、配置も考えた。



また、見出し文も読み手が興味を引くように考えさせた。色を使ってキーワードを強調させたり、字の大きさを変えたりと、ユーモアある新聞を完成させることができた。完成した新聞は、教室に掲示し、作品の良いところを、付箋を使って交流し、他の新聞づくりにつなげるようにした。

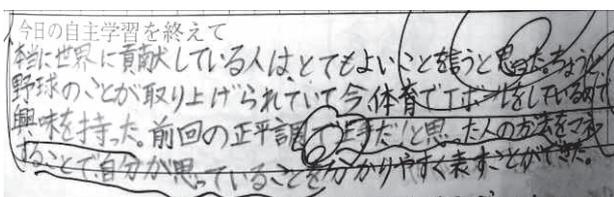


(作成した「自然学校新聞」)

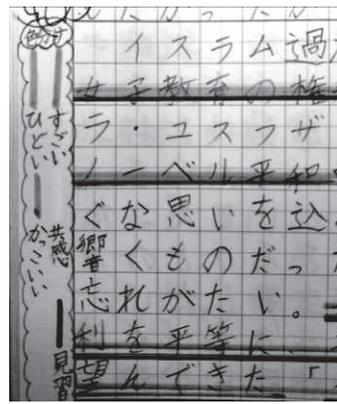
(6) 6年生

新聞を自主的な学びの材料や新聞作りの参考資料として活用した。

自主的な学びの材料としては、授業に関連のある記事を、教師がその都度、積極的に紹介した。児童は家庭学習で、視写をしたり記事から気になる言葉の意味調べをしたり記事を読んで考えをまとめたりするなど、学びを深めることができた。

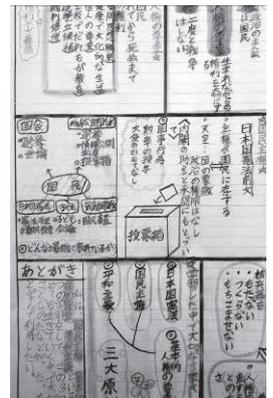


(自主学習後のコメント)



視写だけではなく、「共感」、「見習いたい」など感じたことに色線を引いたり、考えを振り返りにまとめたりしている。友達の新報活用の仕方を参考に、自分の学びに生かしている様子も見られる。

また、社会科で単元ごとにまとめ新聞を作ってきた。数回製作した後に、見出しや図の配置、あとがきの書き方などを新聞で学んだ。自分の記事と新聞記事を比較し、改善点を意見交流し、次回の新聞作りに生かした。また、友だちの新聞を毎回読む時間を確保した。1学期と3学期の新聞を比較すると、特に割り付けとキーワードを取り出してまとめることにおいて、論理的な力がついてきたことが分かる。



4. おわりに

2年間の NIE 実践校の指定をいただき、改めて新聞が教育に及ぼす力の大きさに驚く。新聞を学習や生活の中に取り入れることで、児童の思考力や表現力が飛躍的に伸びたと感じる。また、10月の読書月間の記録の「新聞のページ」を見ると「心に残った新聞記事」として、1人あたり平均7つの記事が挙げられていた。児童の目が、社会や世界に向くようになってきたということである。

今後も私たちは、児童の成長を促すひとつのアイテムとして新聞を活用していきたいと考えている。

わたしたちの生きる社会に学ぼう

～子どもの学びと社会をつなげる NIE～

たつの市立揖西東小学校 校長 伊藤 忠司
教諭 石原 崇史

1. はじめに

本校は、全校児童 274 人で、たつの市内では中規模校にあたる。NIE 実践指定校として 2 年目を迎え、1 年目の成果と課題を踏まえつつ、新聞のさらなる効果的な活用の研究を進めてきた。昨年度は高学年（5 年生）での実践が中心であったが、今年度はその実践を残しつつ研究の幅を広げ、中学年（主に 4 年生）を中心に実践を行った。

実践に先立って、4 年生 59 人にアンケートを実施した。

・家で新聞を購読していますか？

購読している 33 人（56%）

購読していない 26 人（44%）

・（購読している子で）

日常生活で新聞をどのくらい読みますか？

毎日読む 6 人 時々読む 19 人

あまり 3 人 全く読まない 5 人

購読していない 26 人と、購読はしているがあまり読まない・全く読まない児童を合計すると 34 人となる。つまり、

新聞に親しんでいる 25 人（42%）

新聞に親しんでいない 34 人（58%）

となり、子どもたちの日常に新聞があまり入り込んでいない現状がうかがえた。そこで、できるだけ多くの場面で新聞を取り入れた実践に取り組んだ。

2. 主な実践

（1）朝学習での取り組み

本校では、朝の 15 分間を朝学習として取り組んでいる。そこで、新聞を使ったワークシート等を作成し、新聞を教材として活用した。作成するにあたっては、ねらいを主に

①読解力、②知識、③表現力の 3 つに分け、15 分間で完結するボリュームにした。また、

新聞活用の時には、必ず国語辞典と地図帳を手元に準備しておくことにした。

〔②知識の実践例〕



米朝首脳会談が新聞の 1 面に取り上げられた。しかし 4 年生の児童は、「米」＝アメリカなどの世界各国を漢字 1 字で表記することを知らない。そこで日本では、世界の国々を漢字表記することがあることを学んだ。すると、子どもたちは、米、朝、中、仏、独、英などの表記を新聞から発見した。さらに「エジプトは？」「ブラジルは？」など、大人でも難しい質問が次々に飛び出した。15 分という朝学習の中であるため、「新たな疑問は自分で調べてみよう」とした。すると、週末の自主学習では、複数の児童が各国の漢字表記を調べてきた。新聞をきっかけにして、自ら学びに向かう姿勢が見られた。また、国語辞典と地図帳をいつでも使えるようにしたため、新聞の中で疑問に思った語句や、国の場所などをすぐ調べる姿があった。結果的に、辞書引きのスピードが上がり、地図帳を索引で調べることができる児童が多くなった。

（2）授業での取り組み

○図画工作科での取り組み（2 年生）

〈単元〉造形遊び『しんぶんしとなかよし』

〈目標〉新聞紙をつかって、どんどん試しなが

ら、身体全体で楽しむ。



はじめ、児童の活動は大きく3つに分かれた。1つ目は、兜・剣・紙鉄砲などを具体的なものを決めて作り始めた子。そのうち、剣(棒)は長くなり、紙鉄砲はいくつも作られていた。2つ目は、何か新しい方法を見つけようとする子。やぶったり、ねじったりしながら個人で仮装やアイテム作りを楽しむ子と数名で協力して窓を覆う活動をし始める子に分かれた。3つ目は、周囲の様子を見る子。窓を新聞で覆う活動に協力したり、新聞を丸めて野球ごっこやチャンバラごっこを始めたりした。

活動を観察して意外なことが2つあった。1つ目は、紙の持つ可塑性だけでなく、写真の色にも注目して活動していたことだ。2つ目は、すでに児童が様々な活動を思いついていたことだ。また、友達に刺激を受け、「上から吊るしたい」「もっと作って並べよう」と空間を活用する発想も広がっていた。

○外国語活動での取り組み(4年生)



4年生の外国語活動(Unit6)では、アルファベットを学ぶ。そこで、英字新聞を活用し、「アルファベ

ット探し」を行った。めあては“小文字”で

あるが、子どもたちは大文字にも反応し、自ら学ぶ姿勢を引き出すことができた。また、新聞には必ず日付が載っている。子どもたちは、月・曜日などにも関心を示し、「Days of the week」や「Months of the year」などの学習にもつながった。

○人権・体育(保健領域)での取り組み(4年生)

保健領域では、心と体の成長を扱う。心の成長(異性が気になる等)の学習をし、体の成長(具体的な体の変化)について学習した後、発展的な学習としてLGBTを取り上げた。

近年、世界では「同性婚」が認められる国が増加しており、日本においては「パートナーシップ制度」を認めている自治体が増えている。そこで、新聞記事と本「セクシャルマイノリティって何?」を組み合わせ、LGBTに対する理解を深める実践をした。

はじめは本を使って、体の性と心の性が必ずしも一致しないことがあることを学んだ。子どもたちにとっては不思議な感覚であるようだった。そこで、実際の新聞記事を見せ、LGBTの人に対する周囲の理解が必要なこと、残念ながら差別的な目で見られる現実があることなどを知った。実際の新聞記事には説得力があり、子どもたちは現実の出来事として受け止めている様子であった。そして、道徳(人権)の授業へとつなげていった。



○社会科・総合的な学習の時間での取り組み
(4年生)

毎年、夏休み前に全学級で平和学習に取り組む。戦争に関するDVDや道徳資料を教材に進めることが多かった。しかし、戦争を知らない子どもたちにとって、ましてまだ歴史



を学習していない学年にとって、あまり自分事として受け止められないのが現実である。

そこで今回は、NIE事務局に依頼し、終戦当時の新聞記事をいただき、全教員に配布することから始めた。新聞記事の一面には、玉音放送を聞く国民の写像があり、教員も子どもも興味を持って記事を読んだ。



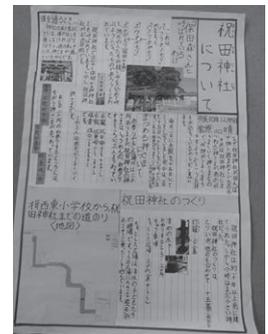
4年生社会科では、「地域の先人に学ぶ」単元がある。本校の先人に、田中静壺氏がいる。終戦当時の東部軍管区司令官であり、東京周辺の防衛を任せられていた人である。昭和20年8月14日から15日に起きた、陸軍青年将校が起こしたクーデターを鎮めたとされる人物である。日本の未来を考



え、自らの命の危険も顧みず勇気ある行動を起こし、終戦へと導いた功績をたたえ、龍野公園の高台に記功碑が建てられている。授業では、田中静壺氏の人生や考え方を学んだ後、フィールドワークに出て記功碑を見に行った。子どもたちは予想以上の石碑の大きさに驚き、同時に戦争の愚かさや田中氏の功績を後世に伝えるメッセージを前に、平和の大切さを地域の先人から学ぶことができた。

○総合的な学習の時間・書写での取り組み(4年生)

本年度の本校教育目標は、「ふるさとに誇りを持ち、心豊かでたくましい児童の育成」である。「ふるさとに誇りを持つ」ためには、校区のことを知ることから始めなければならないと考え、総合的な学習の時間において『校区の果てまでイッテQ』という単元を組んで、探究活動を行った。活動の成果を新聞形式でまとめ、ポスターセッション形式で発表した。

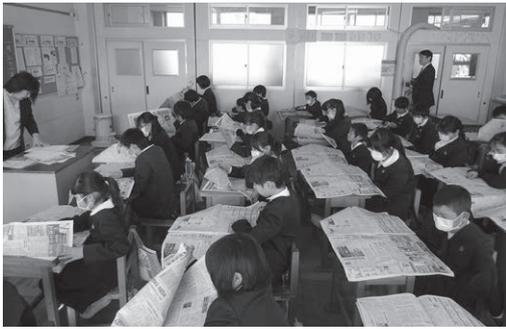


まとめ新聞を作成するにあたって、書写の教科書に「新聞を作ろう」の単元がある。本物の新聞を提示・利用しながら、学習を進めることによって、より分かり易く新聞の作り方を学ぶことができた。

○社会科での取り組み(5年生)

記者派遣事業

本年度もNIE事務局から新聞記者に来ていただき、新聞を作る工夫や取材時の苦勞、生の声をうかがうことができた。



教科書に新聞作りの工程や工夫などが載っているが、やはり本物の記者から実際にお話を聞くことで興味関心がわき、より理解が深まると感じた。

(3) 授業以外での取り組み

○学級懇談会での取り組み

本校は2月末に学級懇談会を開き、子どもたちの1年間の成長や今後の課題、家庭の様子などを意見交流する機会としている。近年、世間では急速にスマホが普及し、ネットゲームやSNSによるトラブルが増している。道徳の時間では、ネットモラルの教材を取り上げ、利用する上での心構えなどについて学習している。しかし、SNS利用やネット使用は個人差が非常に大きい。そのため、同じ教材を扱っても、SNS・ネット利用頻度が高い子にとっては内容が浅く、SNS・ネット利用したことがない子にとっては、何のことか分か



らない授業になっている場合がある。

そこで、学級懇談会を利用し、SNS・ネット利用について各家庭に呼びかけた。その時の具体的な話題資料として新聞記事を利用した。「親が把握している子どもの様子と、子どもの実態との間には、大きな乖離がある」こ

とを伝えることに非常に有効であった。これを機会に、家庭のネット利用の決まりを見直すという意見も聞かれた。

3. 成果◎と課題△

◎国語に限らず、新聞を活用することであらゆる授業において子どもの興味関心を引き出すことができ、よい教材となった。

◎新聞に掲載される、写真やブラフ、図などの活用でも、思考を促すのに有効であることが分かった。

◎記者派遣授業など、講師招聘により本物に触れる機会を設定することができ、体験的な学習の場となった。

◎学級懇談会での話題資料など、授業以外の場でも活用する視点を見出すことができた。

◎外国語及び外国語活動において、英字新聞の有効活用を進めることができた。

△児童の発達段階からして、高学年よりも中・低学年の方が新聞活用は難しいと感じた。低・中学年の新聞活用方法のさらなる研究が必要である。

△限られた授業時間の中で、授業のどの場面で新聞を提示するか、どの程度深く扱うかなどさらに研究が必要である。

4. おわりに

本年度をもって、NIE 実践指定校は終了である。この2年間、ほぼ毎日新聞をめくり教材になりそうな記事を探した。そして、子どもたちに新聞記事を提示すると、いつもいい反応が返ってきた。世の中のニュースに興味を持つ児童が増えたと感じる。やはり「新聞の持つ力は強い」と実感した2年間であった。

新聞活用の可能性は無限にあり、教科横断的な視点で扱えば、NIEの可能性は限りなく広いと感じる。子どもに付けたい力を明確にし、今後も学校と実社会をつなぐ生きた教材である新聞活用を進めていきたい。

新聞を読み、内容や感想をまとめる活動を通して、書く力を高める

神戸市立向洋小学校 校長 三善公文
教諭 中村 力

1. はじめに

本校は、神戸市全体の中では教育への関心が高いエリアに該当する学校ではあるが、新聞を購読している家庭は全体の3分の1程度である。(子ども新聞を購読している児童は学級に2~3名程度) また、購読している家庭の児童でも、新聞を定期的には読んでいたと答えた児童は、ほとんどいなかった。

つまり、多くの児童が、テレビやインターネットから情報を得ているというのが、本校の実態である。児童の生活の中に新聞はほとんど浸透していないと言える。読書が好きな児童は多いという実態と合わせて考えると、生活の中で活字に触れてはいるが、活字から生活に必要な情報を得たり、世の中の動きを知り、自分の考えをもったりする経験に乏しいことが考えられる。また、テレビやインターネットの情報を受身的に得るということに慣れていることも課題として挙げられるだろう。

そこで、NIEの学習を通して、新聞に興味をもち、定期的に新聞を読む習慣を身に付けていきたい。そして、新聞から必要な情報を読み取り、記事に対する自分の考えをもつ力も養っていきたい。

2. 本校の「かくかくタイム」について

本校の児童は、全国学力テストの結果を分析した結果から、文章を書く力に課題があることがわかっている。そこで、昨年度から、「よみうり KODOMO 新聞」を児童費で購入し、高学年全員による新聞の購読を始めた。そしてさらに、朝のモジュールタイムに、新聞を活用した「かくかくタイム」を計画し、実施した。「かくかくタイム」については、以下の表に詳しく記述する。

	内容・方法
5年	・記事をノートに貼り、記事の内容や記事に対する自分の考え・感想をノートにまとめる。 ※記事は、教師が指定する場合と自由に選ぶ場合とがある。

6年

- ・金曜日に指定された記事をノートに貼り、紙面に目を通す。
 - ・月曜日に記事の内容を要約する。
- ※提示したキーワードを含めて要約する。

3. 5年「かくかくタイム」の実際

(1) 新聞への興味づけと習慣形成

新聞の購読を続けて、最も印象に残ったのは、新聞そのもののもつ力である。毎週学校に届いた子ども新聞を配布すると、多くの児童が食い入るように紙面を広げて読んでいた。子ども新聞には、子どもの関心を惹きつけるようなクイズやファッションの記事があるので、そこにばかり目がいくのかと心配していたが、政治や国際関係に関する記事も興味をもって読んでいた。テレビやインターネットで、「トランプ大統領」の名前を聞いていたが、どんなことをしたのかは詳しく知らなかった多くの児童が、新聞を通じて、社会の事を知れることに喜びを感じていた。

また、毎週新聞を読む習慣が身につくにつれ、国語や社会科の授業で大人向けの一般紙を配布したときにも、抵抗なく紙面から必要な情報を探ることができていた。このような、学校での地道な取り組みが、新聞を活用できる社会人を育てることにつながると感じた。

(2) 文型を示す

「かくかくタイム」を始めたばかりの頃は、何を書けばいいのかわからず困惑する児童が少なからずいた。そこで、文型を提示して、書き方に自信がない児童は文型を使い、慣れてきたら自分で自由に書くように指導した。

【文型】

◆記事の内容をまとめる

「私がこの記事を読んでわかったことは～ということです。」

「私はこの記事から～～ということがわかりま

した。」

◆記事に対する自分の考えや感想を書く

「また、記事を読んで思ったことは、～～ということです。」

「～～と、私は思いました。」

「～～と、私は考えました。」

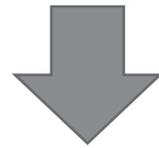
はじめは、文型を与えても、文章が書けない児童も少なからずいたが、少しずつ添削指導を続けていくにつれて、文章を書く力も高まってきた。しかし、課題としては、5年生も6年生も、大幅な添削指導が必要な児童が多く、毎週「かくかくタイム」を実施することは、担任にとって大きな負担となった。児童にとって、意義のある活動だと感じている分、現実的に考えて、どのようにすれば、指導を継続していけるのか、今後も改善が必要である。

4. さいごに

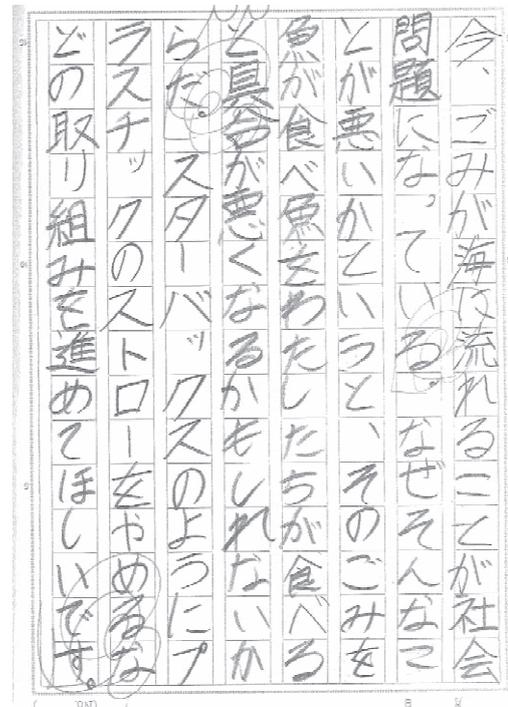
今年度、新聞を活用した「かくかくタイム」に年間を通して取り組み、新聞がもつ高い教育効果を感じた。1つ1つの記事がもつ魅力と様々な記事が並んでいる一覧性によって、本校の児童は新聞によって、多くの知識や情報に触れて、世の中の出来事への感度を高める事ができた。そして、新聞記事の内容をまとめる活動を通して、知識を得るだけでなく、書く力を高めることができた。新聞に載っている記事は、今現在の自分たちが暮らしている社会のリアルな情報なので、子どもたちも自然と興味をもつことができた。子ども新聞を通して、新聞に興味をもった児童は、大人向けの一般紙にも少しずつ興味を向けていた。

情報化社会が進むにつれて、テレビやインターネットによる映像や短い言葉による情報ばかりに触れる児童が増えている。しかし、児童が大人へと成長したときに、社会の動静に関心を持ち、自分の考えをもつためには、新聞などの活字による情報に多く触れることが重要である。今後も改善を重ねながら、NIE教育を実践していきたい。

〈初めの頃〉



〈書き慣れてくると・・・〉



「新聞制作学習を通して知識を深め、思考力を高める」

教諭 田中健二

1. はじめに

本校の児童は、「新聞を読んでいますか」という設問に対して、全体の61%が「ほとんど、または、全く読まない」に回答をしている。そして、「月に1～3回程度読んでいる」に回答した児童は、全体の19%であり、全体の80%が新聞を読んでいる現状が分かった。(全国学力・学習状況調査質問紙より)

また、多くの児童は、インターネットやテレビを利用して情報を得ている。つまり、情報を得るためのツールとしてインターネットやテレビを積極的に活用しており、児童の生活の中に新聞はあまり浸透していないと言える。その理由として、インターネットやテレビの方が新聞よりも素早く容易に情報を得ることができるからだと考えられる。

そこで、NIEの学習を通して、情報提供という面だけでなく、言語力の醸成という新聞がもつ魅力の部分に着目させたい。そして、表現力や思考力の向上につなげて、より豊かな言語力を身に付けたいと考える。

2. 新聞制作学習を取り入れた学習について

今回は、前述した通り、新聞を普段から読むことがあまりない児童に、どのようにして新聞を活用しながら学習を展開していくかが、何よりも難点であった。

新聞は単に情報を提供するだけでなく、情報を正確かつ迅速に伝えたり、新聞社独自の考えを分かりやすく表現したりするために、様々な工夫をしている。そうした記事を読むことで、児童が表現の多様さを知り、自分の考えをより深められるのではないかと仮説を立てた。

そこで、児童の表現力と思考力をより高めるために、今回は社会科の歴史学習のまとめとして、新聞制作学習を次のように取り入れることを考えた。

単元名「時代にもぐりこんで、号外新聞を書こう」

	学習内容
1	新聞にして伝えたい事件を選ぶ。
2	インターネットや本を利用して、その事件について詳しく調べるとともに、同じ時代に流行していたものを記録しておく。
3	新聞を読んで、表現の工夫を見つける。 表現の工夫について話し合う。
4	号外新聞を書く。
5	交流する。

このように計画して、大きく5つの活動に分けて指導を行った。

1の「事件を選ぶ」では、例えば「本能寺の変」などの歴史の分岐点となるものや、「豊臣秀吉天下統一」などの流れのある出来事でも良いとした。児童は、「応仁の乱」や「聖武天皇の東大寺建立」など興味のあるものを選択していた。

2の「調べ学習」では、その事件の全容を捉えるために、出来事の流れを調べるだけでなく、事件に関わった人物の人柄や、社会の情勢（国内外に問わず）など、焦点化して深く調べることを目標に設定し、活動を進めた。

3の「表現の工夫を見つける」では、新聞の記事の表現の工夫について考えるため今まで児童自身が作成した新聞の書きぶりとは比べながら、調べる時間を設定した。見出しや一文目の書き方などに注目することで、表現の工夫をたくさん見つけることができた。



4の「新聞を書く」では、前時で見つけた工夫を活用しながら書いた。「事件のその日に配られた新聞」という設定で書くことを条件としたことで、児童は時系列や当時の状況をよく考えて執筆していくことができた。実際に新聞に載っているような広告なども空いたスペースに書かせることで、当時の

時代の背景を学ぶ機会を設けた。

5の「交流」では、自作の新聞を持って、お互いに記事の内容や工夫したところを伝え交流する場を設けた。見出しは既習事項であるはずなのに、文章の内容は、知らない知識が多く、児童は、その奥の深い新聞を興味津々に読み、互いにその良さを確認した。



3. さいごに

情報化社会が進むにつれて、紙面で新聞を読むことが生活の中から消えつつある。そのため、新聞のもつ良さを活かすためにも、新聞を読む機会を設定して仕組んでいく必要があると感じた。児童の活字離れは間違いなく進んでいるものの、活字嫌いは少ないように感じる。児童が継続して新聞を読むことで、「他の新聞も読みたい。調べたい。」という声を数多く聞くことができたことは、担任としても喜ばしいことであった。児童の言語力と思考力の向上のために、これからも積極的に新聞を読む機会を設定していきたい。



新聞をつかった表現力の育成について

～相手を意識して読む・書く・話す～

加古川市立川西小学校 校長 稲岡昇太
職名 直井宏輔

1. はじめに

本校は、兵庫県加古川市の西部に位置し、各学年2クラスの小規模校である。校訓「みんなでみんなを」をもとに、児童の育成に努めている。本年度は、食育研究指定校を受け、食育に力を入れて研究してきた。学習の中で、食べ物の教材を取り入れながら、学習目標の達成を目指していった。しかし、考えたことを自分の言葉で表現できる児童が少なく、活発な意見交流を中心としたアクティブラーニングの形には至ってなかった。「児童がより良く自分の考えを表現することができないか」と考え、今回このNIE活動への参加を申し込んだ。担当した6年1組での取り組みを中心に活動報告を行う。

2. 推進委員会の設立及び実践計画

今回の実践では、管理職、担当者、担当学年教員でNIE推進委員会を組織した。主な活動は担当者による活動状況の報告、実践報告書の検討を行った。第1回の推進委員会では、1年間の活動計画を決定した。

第1学期

- ・記事の読み方講座（担任）
- ・おすすめの記事の掲示・発表
- ・修学旅行新聞の作成
- ・新聞感想文コンクールへの参加

第2学期

- ・おすすめの記事の掲示・紹介
- ・新聞社設立

- ・卒業新聞に向けての計画
- ・記事について読み比べよう
- ・朝日新聞社による新聞の授業

第3学期

- ・おすすめの記事の掲示・紹介
- ・未来新聞の作成
- ・卒業新聞の制作

3. 実践内容について

○新聞の置き場と読み方

本学級では、新聞を気軽に読みやすくするために教室の一定の場所に新聞を設置した。新聞は、さかのぼって1週間は保存し、ボックスの中に入れておいた。読む時間は主に朝の学習の時間や課題が終わった時などで、時間が空いているときに自由に読ませるようにした。しかし、置くだけでは読むことに対して受動的になってしまうので、教師自身も新聞を読んで、気になった記事を紹介した。そうすることで、新聞に興味を持たせ自主的に読む習慣を育てた。新聞を読むことに抵抗のない児童には、気になった記事をたくさん切り抜かせて掲示した。1週間たてば、児童に新聞を入れ替えさせた。



(新聞の保存の様子)

○記事の選び方

新聞記事を読んでいると、中には犯罪や人を傷つける内容が書かれてあるものもある。児童の興味のあるものを読ませていたが、自分の生き方の参考や、相手に紹介したいという思いを持たせたかったので、楽しみや驚きのあるものを選ぶようにさせた。記事を選ぶことに苦勞する児童には、担任が選んだ記事を渡して考えさせるようにした。

○記事の読み方

読むことを習慣づけていながら、読んだ記事を発表する活動を行った。1人月に1回程度、前に出て自分の選んだ記事を紹介させた。その際に以下の点について指導した。



(新聞記事を発表する様子)

- ① 記事のポイントとなるところに線を引く。
- ② 記事の内容を要約して伝える。
- ③ 記事を読んで感じたことを話す。

①は、文の大事などところを見つけ中心となる箇所を意識させる。続いて②で内容を要約し、相手に伝えたい内容を絞らせて話させる。最後に、自分を振り返らせて生き方につなげさせる。このようにして新聞記事を読ませ、発表する機会を設定した。

最初は要約することが難しく、記事のほとんどを話す児童が多かったが、5W1Hを意識させることで、伝えたい内容を絞ることが

できた。これは、朝日新聞社の方による新聞の授業で教えていただいたことだが、新聞自体が5W1Hで書かれてあると知り、情報を発信するのに有効な文章であることがわかった。新聞の書き方を知ることによって、相手に伝わりやすい効果的な文章の書き方にも気付くことができた。



(児童が選んだ記事)

○新聞コンクールへの参加

夏休みの課題として、新聞を読む力を見るためにコンクールに参加した。新聞を取っていない家庭にも過去のものを配って全員参加した。



(新聞感想文コンクールの作品)

○新聞社設立

意欲的に活動を進めていくために、新聞社を作った。目標は卒業新聞の制作に向けて、グループごとに記事を仕上げている。作った部署は以下の通りである。

写真部…教室にあるカメラを使って楽しい瞬間を撮る。

編集部…原稿を考えて文章を作る。時にはインタビューも行って情報を集める。

入力部…できあがった原稿をパソコンで入力していく。

レイアウト部…原稿や写真をレイアウトして、新聞を作っていく。

会社を作り、擬似体験をしていくことで楽しみながら学ぶ姿勢が見られた。また、より新聞について学んでいこうと意欲も見られた。全体の動きを把握するために、活動の前には全体で会議を行った。見通しを持たせるために、今、自分たちがしなければならないことを交流していった。会議の中で決めていったことは、新聞名、記事の内容の決定、記事以外で紙面に乗せるもの、新聞の大きさなどだった。

○朝日新聞社による出前授業

書くというこれからの課題が見えたところで、朝日新聞社姫路支局から支局長に来ていただき、「新聞の書き方」について授業していただいた。まずは、写真を見て写真のタイトルを考えた。人によって感じ方が違うことを知り、自分なりの言葉で相手に伝わりやすい記事を書いていくことの大切さを学んだ。次にインタビューの仕方について学んだ。インタビューは、その人がどんな人間なのかを知るための重要な作業で、児童の内面にせまっていく技術を見せていただいた。この授業では、キャリア教育の面でも、児童にとって関心の高まるものであった。



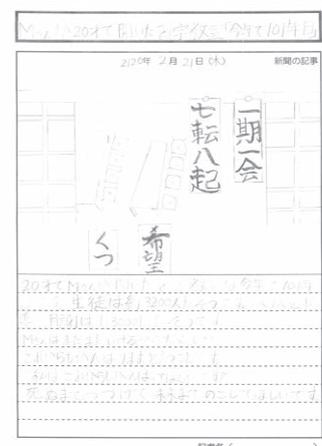
(授業の様子)



(活動の様子の記事)

○未来新聞

卒業前の最後の新聞発表は、自分の未来を考えて記事にして紹介する活動を行った。新聞記事は絵で描いて、写真の代わりとした。今までの自分を見つめ直し、将来どんな人になりたいかを新聞という媒体で表現した。



Let's do it together! Let's start!

～全校で取り組んだ English Marathon～

養父市立建屋小学校 校長 米田 規子
主幹教諭 坂本 和宏

1 はじめに

兵庫県北部。四方を山に囲まれ、自然豊かな立地条件にある本校は、旧三谷小学校と旧建屋小学校が14年前に統合して誕生した。校区は谷に沿って長く伸び、その長さは12キロに及ぶ。当初は122名であった児童数も、平成30年現在はその半数以下の45名と大きく減少している。平成30年度より「小規模特認校」としてのスタートを切り、「仲間・地域・世界とつながる児童の育成」という研究主題のもと、学校と地域が協働し、グローバル&ローカルな教育を展開しようとする様々な取り組みをすすめている。わたしたちは本研究を本校教育推進の重要な柱として位置づけ、兵庫NIE事務局の協力も仰ぎながらEnglish Marathonを計画立案し、推進した。以下にその詳細を述べる。

2 English Marathon の概要

(1) 日時：平成30年11月15日 10:40～12:15

(2) 場所：建屋小学校 各教室等

(3) ねらい

- ・児童が英字新聞を活用したさまざまな課題に取り組むことにより、英語に対する興味関心を深める。
- ・異年齢集団が協力して課題を解決することにより、信頼関係を深め、よりよい学校生活を築こうとする主体的な意欲を養う。

(4) 方法：ポイントラリー形式、縦割り班でブースをまわっていく。

- ①縦割り班のリーダーは、チェックシートを持って各ブースのポイント等を記入していく。
- ②全員がスタンプカードを持ち、回ったブースが分かるように（記念になるように）する。
- ③各ブースでは、必ず英語であいさつをする。
- ④ブースは8つ設定し、時間内に6つ以上のブースをクリアできるようにする。
- ⑤その他：PTA と1・2・3GO!のみなさんおよび教職員でブースを担当する。
- ⑥当日のスケジュール（全体の流れ）

10:00 保護者集合、準備

10:35 児童体育館に集合、縦割り班で並ぶ

10:40 開会式

ア) はじめの言葉（児童会長）

イ) イングリッシュマラソンの説明、諸注意

10:50 Marathon start

各縦割り班は、事前にリーダーが決めた順番に準じてブースを回る。

ブースは以下の8つである。(6つ以上回れるようにする)

- ・ Guess Who? (理科室)
- ・ 神経衰弱 (会議室)
- ・ 英語の言葉をきりぬいて作ろう (図工室)
- ・ What shape do you like? (PC 教室)
- ・ アルファベットを探せ (図書室)
- ・ フルーツ・クラブクラブ (音楽室)
- ・ 今夜のメニュー (家庭科室)
- ・ 英字新聞マンになろう (多目的ホール)

12:00 体育館集合、縦割り班で並ぶ

閉会式

感想発表 各縦割り班リーダー

保護者、1・2・3 GO!の方

12:15 閉会

3 各ブースの内容検討にあたって

8月1日の校内研修において、「縦割り班で、全校生が生き生きと活動できる『英語マラソン』の計画を立てよう！」というテーマを設定し、兵庫NIE推進協議会事務局の方々をお招きして演習を行った。その概要を紹介する。

(1) ファシリテーターによる進行 (兵庫 NIE 推進協議会会長 秋田久子氏)

(2) 提案者による内容のアイデア紹介



(3) 演習 (実際に各ブースの内容をグループごとに考えていく)

(4) 発表

このようにして出された案は、校内研修会で精査され、具体的な各ブースの内容となっていた。

準備にあたっては、PTAの有志および、地域住民の英語教室「1・2・3 GO!」の参加者の協力を得た。各ブースで使用する道具や掲示物などを作成していただき、大変助かった。(さらにこの方々には、当日のブース担当もしていただいた)



4 当日の様子（各ブースの説明と写真で紹介する。）

しんけいすいじやく **かいきしつ**
神経衰弱 (会議室)

アルファベットカードをめくる。
5セット同じ文字がそろえばOK。
あっているかわからないときは、
「Is This OK?」とたずねる。
あっていれば、「OK!」「Yes!」
などとこたえる。



A a

フルーツ・クラブクラブ

おんがくしつ
(音楽室)



フルーツの絵を首にかけ、輪になり、手を2回たたき、ほかのフルーツの名前をいう。チームで10回続けていえたらOK。



アルファベットをさがせ

としよしつ
(図書室)

新聞のなかに 決められたアルファベットをさがして○でかこむ。
全員が1つ以上みつけれたらOK。



Q

かたち **す**
どの形が好き?

きょうしつ
(PC教室)

好きな形の新聞をとり
「I like ○○!」と全員でこたえたらOK。
Circle Triangle Square Star など



○ △ □ ☆

Guess Who?

りかしつ
(理科室)

3つのヒントから 有名な人をあてる。
正解できたらOK。




えいじしんぶん
英字新聞マンになろう

たもくてき
(多目的ホール)

代表がくしをひき、かかっていること(丸める、投げる、やぶる、長く切る・・・など)を全員でする。
みんなで参加できたらOK。



えいご **ことば** **つく**
英語の言葉をきりぬいて作ろう

まこうしつ
(図工室)

英語を新聞からみつけてきりぬく。
見本どおりにならべたらOK。




こんや
今夜のメニュー

かていかしつ
(家庭科室)



英語のレシピを聞いて、どの料理の説明かをあてる。なんとなくでも料理がわかればOK。
「この料理は好きですか?」と英語できかれたら「YesかNo」を全員でいう。



6年生で事前に打ち合わせをしたとおり、どのメンバーも出番を与えられ、やりがいを持ちながらブースを回った。8つあるブースのうち、制限時間内に6つを回ればクリアというルールであった。ほとんどの班は全てのブースを回ることが出来ていた。

地域の方の協力は大きな力となった。同時に、共に行事を運営出来たという達成感を共有することが出来た。学校、家庭、地域が一体となる、大変有意義な時間を過ごせた。

5 その他の英字新聞を活用した取り組み

(1) English Newspaper Time

授業の始めに英字新聞の一面を見せ、その見出しを紹介する。そしてその見出しについて、その意味などを発表し合う。次に、本文の一部を ALT が読み、その内容について分かったことを発表し合う。

(2) abc search

アルファベットを1つ指定し、1分以内にこの新聞の1面にいくつその文字があるのかをチェックする。

写真と見出しの効果について、また、文字に着目していく取り組みとして、(1)(2)とも大変効果的であったと実感している。abc search の発展として、「th」「ch」という出題の仕方を行った。今後さらに工夫の余地がある取り組みである。



6 終わりに

本研究により、児童に大きな変容が見られた。具体的には以下のとおりである。

- ・英語に慣れ親しむ児童が増え、日常的に英語が身の回りにある環境を楽しむ様子が見られるようになった。「もう一度、English Marathon をやりたい!」という児童の声をよく聞く。
- ・主体的に話を聴く児童が増えた。自分の意見をもって話を聴き、その場で質問や感想を述べることのできる児童が多くなってきた。
- ・新聞から情報を得ると共に、情報を取捨選択して表現を行う(新聞づくり、プレゼン等)ことを意欲的に行えるようになってきた。

一方で、研究の更なるステップアップのための課題も明らかになってきた。

- ・外国語教育の中に、English Newspaper があることで果たす役割・価値を明確にしておくこと。
- ・English Newspaper や、そのほかの新聞の活用の度合いの学年間の格差を少なくしていくこと。
- ・発達段階に応じた系統的な活用。それによって培われていく力の検討・整理。
- ・教職員の研修の充実

本研究は、児童の変容に大きく寄与した。また、地域と共にある学校づくりにもまた、大きく寄与したと考える。小規模特認校である本校の1年目の大きな柱としての役割は、十分に果たせたのではないだろうか。

MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing.

【 中 学 校 】

“今”を知って伝えよう！

猪名川町立猪名川中学校 校長 北上 玲子
教諭 義則 奈々

1. はじめに

本校は、猪名川町南部に位置し、生徒数約 850 名の中学校である。まわりは新興住宅地となっており、町外から引っ越してきた家庭が多い。通塾率は高く、PTA 活動も盛んであり、教育熱心な家庭が多い。

昨年度より、NIE 実践指定校として NIE の推進に取り組んでいる。今年度は、『“今”を知って伝えよう！』をテーマに、新聞記事の紹介、新聞要約、記者派遣などの取組をおこなった。平成が終わろうとする“今”に焦点を当てて、“今”起きている事を新聞から知り、まわりに伝えていくことを目的としている。

私が担当する理科の授業内でも、理科に関する新聞記事の紹介や新聞要約をおこなっている。今回は、私が担当している中学 1 年生を対象にした新聞要約の取組などを紹介する。

2. 実践の内容

(1) 事前アンケート

生徒の現状を知るために、左の事前アンケートを 1 年生約 160 名におこなった。数値や () 内の言葉はアンケートの結果である。

結果から、新聞を購入している家庭は約半数であり、新聞に親しむ機会が少ないのが現状であるといえる。また、世の中の情報はスマホやパソコン、テレビなどのツールを通して得ている生徒が多かった。得た情報を積極的に伝えている生徒は全体の 4 分の 1 程度である。理科に関するニュースについては、とても知りたいという生徒が全体の 4 % しかいないことがわかった。

情報を映像で取り入れている生徒が多いことから、文章読解力や語彙力の低下が懸念される。また、理科に関しての興味関心の低さが目立った。

そこで、新聞要約などを通して幅広い知識を身につけ、興味関心の向上や、言語活動に取り組むことを考えた。

N I E 事前アンケート

1. 家庭で新聞を購入していますか。
①購入している。 →56% ②購入していない。 →44%
2. 普段、新聞を読んでいますか。
①毎日読んでいる。 →1% ②時々読んでいる。 →25%
③全く読んでいない。 →73%
3. 世の中の情報は何から得ていますか。
①インターネット →32% ②テレビ →64% ③ラジオ →0%
④新聞 →2% ⑤その他 →3% (親、塾、友だち)
4. 得た情報は誰かに伝えていますか。
①よく伝えている。 →26% ②ときどき伝えている。 →65%
③全く伝えていない。 →9%
5. 理科に関するニュースについて知りたいですか。
①とても知りたい。興味がある。 →4%
②知る機会があれば知りたい。 →50%
③特に知りたいと思わない。 →46%
6. 理科の中で興味のある分野は何ですか。具体的に書いてください。

(2) NIE コーナーの設置

新聞に興味をもってもらうため、学校に取り寄せた新聞に誰でも自由に目を通すことができるよう、生徒玄関前に置いた。その横に掲示板を設置し、平成ならではの新聞記事を中心に、生徒が興味を惹くような記事を選び、掲示した。



(3) 新聞記者派遣事業

新聞から見る“平成”という時代について学ぶため、朝日新聞社川西支局より太田記者に来ていただき「平成のニュースを振り返る」をテーマに講演していただいた。

世論調査で「平成」という時代のイメージについて調べた結果、「暗い」というワードが多かったことや、高齢化社会、人口減少についても話していただいた。また、太田記者が実際に取材された地下鉄サリン事件や阪神・淡路大震災での様子もさまざまな視点から話していただいた。

<生徒の感想>

- ・世論のイメージで生まれた時代が「暗い時代」ということにショック。次の時代は明るくしたい。
- ・日本人は「功績・利益」を追うだけではなく、「もっと良い時代(国)」にするにはどうしたらいいかを考えていかないといけない。
- ・平成の自然災害は平成が終わっても忘れてはいけないと思った。



(4) 新聞記事の紹介

新聞に触れる機会を増やすため、授業の初めに興味のある新聞記事を紹介した。1年生の理科では、教師から話題となっている理科に関する新聞記事を紹介した。3年生の社会科では生徒から一人ずつ発表し、入試に向けての時事問題対策もかねておこなった。

身近な話題が多く、記事紹介に対して質問する生徒もいた。紹介することで記事の内容から話がさらに広がるため、学びが深まったと感じる。



(5) 新聞要約

文章を「読む」、「まとめる」、「考える」、「書く」力を伸ばすため、新聞要約を行った。
1年生は理科、2年生は国語科の授業内で取り組みを行った。

<方法>

- ① 関心のある記事を選びワークシートに貼り付け、①その記事を選んだ理由、②記事の解説、③読んだ感想をワークシートに書く。

ー以下はワークシートに記載している書き方の工夫である。ー

①記事を選んだ理由を書きましょう。

②記事を読み、中学生を相手に記事の内容を伝えられるように工夫をして、自分なりの言葉で解説しましょう。その際に以下のことを意識しましょう。

一、いつ(時間)、どこで(場所)、だれが(人・団体など)、何をした(出来事)、なぜ(原因・背景)、どのように(手段・方法)を正確に述べる。

二、上の六つのポイントを自分の伝えたい順に文章を組み立てる。

三、誰かの発言内容や、記事の言葉を引用する場合は〈 〉でくくる。

③記事を読んで自分が感じたことや考えたことを書きましょう。意見を書くのが苦手だと思う人は、以下のことを参考に書いてみましょう。

④六つのポイントのうち、この記事の中で重大な意味があると思うことについて書く。

(例) なぜ起こったのか…おそらく(自分の意見)だろう。

こうしたことから、今後(自分の考え)と思われる。

②自分の選んだ記事を班の中で発表し、自分の感想や考えを述べるとともに、記事について班内で話し合う。発表するときは、新聞記事を見せながら行う。

③班代表を選び、クラスの中で全員に向かって発表する。発表するときは、書画カメラを用いて新聞記事をスクリーンに映しながら行う。

<取り組みのようす>



(6) 事後アンケート

この取り組みを通して、理科の幅広い知識を身につけられたのか、興味関心の向上につながったのか、言語活動を育むことができたのかを検証するために事後アンケートを行った。

項目3の結果から、理科に関する知識を身につけられた生徒は約8割であることがわかった。項目4では約6割の生徒が理科に対して関心を示したことがわかり、取り組みを通して約1割の生徒が理科に興味をもったといえる。また、言語活動に関しては項目1の結果から、約8割の生徒が情報を相手に伝えることができたと答えた。

項目2からは、新聞に対する意識

の変化がみられる。取り組み前は約3割の生徒しか新聞を読んでいなかったが、取り組み後には約6割の生徒が新聞を読みたいと答えた。

NIE 事後アンケート

1. 新聞から得た情報を、相手に上手く伝えられましたか。
①上手く伝えられた。 →15% ②まあまあ伝えられた。 →67%
③上手く伝えられなかった。 →19%
2. 新聞に対して、前よりも読みたいと思いましたか。
①とても読んでみたいと思った。 →9%
②機会があれば読みたいと思った。 →53%
③特に読みたいと思わなかった。 →37%
3. この取り組みを通して、理科に関する知識は知れましたか。
①とても知れた。 →13% ②少し知れた。 →63%
③特に知れなかった。 →24%
4. 理科に関するニュースについて、前よりも知りたいと思いましたか。
①とても知りたいと思った。 →5%
②知る機会があれば知りたいと思った。 →59%
③特に知りたいと思わなかった。 →36%
5. 今後、新聞を使ったことや理科に関することでやってみたい取

3. おわりに

この取り組みを通して、わずかではあるが理科や新聞に対する関心が高まったといえる。今回は各クラス1回しか行っていなかったため、今後授業で取り入れていくことができれば、理科や他教科への興味関心がさらに高まると考えられる。また、記事を読んで解説を考えたり、それを友だちに伝えたりする作業は、文章読解力や語彙力の向上につながり、大変有効な言語活動だと考える。新聞を見て記事を選んでいるだけでも、生徒の口からは、「○○新聞は絵や写真が多いけど、○○新聞は字ばかりやなー。」や「このニュース、前にテレビで見たけどよくわからなかったし、詳しく知りたかったんや。」などの会話が聞こえてきた。また、事後アンケートには、『今日みたいに新聞を使って記事を書いてみたい。』や『新聞には色々な記事が載っていておもしろかった。』、『身近なところに理科がたくさん関わっていることがわかった。』という感想が書かれていた。

自分の好きなことや気になることだけを見られるインターネットに対して、新聞は様々な事柄が載っているため、幅広い知識が身につけられるツールであるといえる。“今”起きている事をしっかり知り、まわりに伝えていくためにも新聞は有効であると考えられる。今回の取り組みで終わるのではなく、今後継続して授業でも新聞を取り入れた学習を進めていきたい。

新聞活用を通じた生徒の言葉の育成

神戸市立山田中学校

校長 増田 和幸

教諭 荒木 浩輔

1. 実践の概要、研究テーマ、NIE 学習計画案

本校は NIE 実践指定校に認定される以前から、職員室前に新聞を閲覧できるスペースの設置、教諭個人の実践として、新聞を活用した授業の取り組みなどをしてきた。しかし、生徒がどれほど閲覧スペースを利用しているのか、生徒の新聞への興味関心の度合い、教員同士での授業実践の共有などはできていない状態であった。今年度、実践指定校に認定されたことによって、新たに多くの新聞を購読することが可能となり、生徒一人ひとりの新聞活用を考えるきっかけとなった。

今年度実践を始めるにあたり、まずは本校中学3年生の生徒、各家庭の新聞購読率を調査した。その結果、学年総数95名のうち、49名が新聞購読をしている結果となった。これは割合でいうと約5割。実に半分の家庭で、新聞を日常的に読まないということがわかった。また、購読している家庭でも、生徒自身が新聞を読んでいる人数はもっと少なくなり、学年全体の1割にも満たなかった。そこで、本校での実践は「新聞を身近なものとして感じてもらう」ことに重きを置くこととした。しかし、インターネットやテレビの影響もあり、世の中の大きなニュースは知っている生徒は多く、時事的内容を授業で扱っても反応は良いことは先に述べておく。

また、新聞の活用とは別に、次期学習指導要領では「主体的・対話的な深い学び」が提唱されている。私は社会科教諭として、どのように授業へこの理念を取り入れていくのかを考えていた。今年度 NIE 実践指定校に認定されたことで、これについても新聞を活用して取り組む方向で考えた。

具体的な実践は「3. 実践の内容」に記すが、現在、世の中には多くの情報があふれており、スマートフォンや、パソコンで自由に情報を入手できる。しかし、そこに載っている情報は限定的であり、テレビのニュースやワイドショーでも、同じ内容の事件、事故などが取り上げられる。しかし、新聞には地域の情報、社説、テレビなどでは取り上げられない細かな情報まで余すことなく記されている。そこに注目した実践を行った。社会科では、自身の興味が持てる内容をピックアップし、意見を言葉でまとめる作業をした。また、興味のある記事だけで終わるのではなく、他のクラスメイトが選んだ記事を回し読みし、仲間の意見・感想を共有するという課題に取り組んだ。英語の授業では、英字新聞を用いて、英語の音声を流しながらのシャドーイングを行った。先ほども記したように、新聞は読まないまでも、テレビなどの影響で世情には詳しい生徒も多い。知っている内容を英語で聞くので、生徒にとっても取り組みやすかったようである。

全校朝集では、校長が時事的な内容を取り上げて紹介するというような場面も以前から度々あった。3月11日の集会では東日本大震災で被災された方の冥福をお祈りし、現在も行方不明の方がいらっしゃること、現地ではまだ復興が進んでいないことなどを新聞の記事を提示して紹介した。

教師の方から新聞に触れさせる機会、場面を意図的につくっていった1年間であった。



2. 新聞の置き場と整理の方法

先程も記したように、本校には新聞を閲覧できるスペースが設置されている。右の写真のように、毎日管理員さんが新聞を入れ替え、閲覧しやすい状態となっている。昼休みなどの長めの休み時間に読む生徒もいる。読み終わったものは、写真の○で示した箇所にまとめて一定期間保管しておく。先ほど記した授業実践でも、新聞を購読している家庭は家から持参するように指示したが、購読していない生徒は、学校に保管された新聞を配布して授業に臨んだ。



3. 実践の内容

<授業で取り組んだプリント>

新聞記事から「自分の意見」を育てよう
()組 ()番 名前()

1 記事添付欄

I

糖尿病 筋肉減の仕組み解明

糖尿病患者の筋肉減少のメカニズム

糖尿病では、高血糖による酸化ストレスが、筋肉の分解を促進し、筋肉量を減少させる。このメカニズムは、WWP1とKLF15が関与していることが明らかになった。WWP1は、筋肉の分解を促進するタンパク質であり、KLF15は、筋肉の分解を抑制するタンパク質である。高血糖により、WWP1の発現が増加し、KLF15の発現が抑制されることで、筋肉の分解が促進される。このメカニズムを抑制することで、筋肉量の減少を防ぐことが期待される。

「治療薬開発につながる」

このメカニズムを抑制する薬の開発が進められている。WWP1阻害剤やKLF15誘導剤の開発が進められている。これらの薬は、糖尿病による筋肉量の減少を防ぐことが期待される。また、筋肉量の減少を防ぐための運動療法や栄養療法も重要である。

2 気になった理由・感想

II

今まで、世界中でも分かっていなかった糖尿病による筋肉減少の仕組みが解明されたことにより、糖尿病も「治る病気」になる可能性があるという事に驚いた。治療薬が開発されれば、高齢者も糖尿病患者も筋肉の減少をくい止められることが、大きな体を保つことにつながると思うので、ここからの研究の進展に期待したい。

3 班のメンバーからのコメント

<p>A さん</p> <p>難しい事だったけどよくわからなかったけどがんばりたい。</p>	<p>B さん</p> <p>タンパク質がかわらなくて。</p>
<p>C さん</p> <p>まず「神大大学」という名前が「神大」に聞こえなかった。糖尿病にならないためには予防したいけど、難しいです。運動して筋肉を増やしたいです。</p>	<p>D さん</p> <p>糖尿病は自分で予防できる病気です。運動や食事療法で予防できる。糖尿病は怖い病気ですが、予防すれば大丈夫です。</p>

新聞を活用した授業は2時間かけて行った。まず1時間目は、前半に各自が持ち寄った新聞記事を取り上げ、新聞記事の構成の仕方、見方、読み方など、知識的なことを中心に講義した。後半は、自身の興味ある（自分なりの意見を持つことができる）記事を探し出し、上記配布プリントのIの欄に添付。IIの欄に自分なりの意見、その記事を選んだ理由、感想を書き込んだ。

まず生徒が戸惑ったのは、記事がどこからどこまでなのかわからないということ。普段から読み慣れていないので、



読み進めることに時間がかかった様子であった。生徒の取り組みを見ていて、1つ予想外であったことがある。上述のように、普段から新聞は読まないまでも、テレビやインターネットで世の中の大きな情報は知っている生徒も多い。なので、選ばれる記事もある程度偏るものかとも思われたが、実際に選ばれた記事は医学、政治、企業の新商品の紹介、スポーツ選手の影響による株価の動向に至るまで多岐に渡った。

自分で選んだ記事なので、意見、感想等も普段の感想文よりも多く、内容も濃いものであったと思う。以下、一部記事の感想、意見を紹介する。

<沖縄基地 辺野古移設問題 住民投票について>

自分が住んでいる県のことに関して重要なことなのに投票率が52%と低いのがとても気になった。投票している人の中でも「どちらでもない」という人がいて賛成か反対かを示した上で投票するべきだと思った。投票で自分の意見を示すことの大切さが改めてわかる記事だと思う。

<ナイキの靴壊れ バスケ選手ケガ 株価急落 について>

選手のプレーをサポートする役割であるはずのシューズが壊れ、ケガをさせてしまったことに衝撃を受けました。普段、私もナイキのシューズをはいているので少し不安です。また、大手企業ということもあり、株価急落で約1621億円という数字から、この企業の影響力、注目度が高いんだと思いました。

<奨学金支払い義務「半額」 返還中の保証人に伝えず について>

奨学金には返還しなければならないものと、しなくても良いものの2つの種類があるが、返還型の奨学金の返済のためにアルバイトをしている学生も少なくない。この状態では本来すべきことである学業に対する認識が甘くなっている学生が多くなり、現在危惧されている大学の「職業訓練校化」が免れないことは自明の理である。本来、学生は将来の日本を支えるという点に置いて「公益」であり、これを政府が支えないということは将来の国の存亡に関わる重要なものであると考える。国・政府主導で返還の義務がない奨学金を受け取れる人の数を拡大し、貧困層でも優秀な人間の大学進学を支えるべきではないだろうか。

上記で紹介したように、記事の内容を踏まえ、自身の意見を盛り込んで書く生徒は多かった。1時間目はここまでで終了とした。

2時間目は、プリントを各班で回し読みし、クラスメイトの記事、意見を讀んだうえでの自身の意見を新たに書き加えた。

(2枚目のⅢ参照) 授業で取り扱う教材は、普段であれば教師が提示したものとなるのが普通であるが、今回は同級生が選び、同級生が書いた意見、感想であるためか、共感できる部分や、興味をそそられる部分も多かった様子で、どのクラスも集中して取り組んでいた。最終的にプリントは手元に返却され、自分のプリントにクラスメイトから多くの意見、感想が書かれているのを見て、嬉しそうな生徒の様子であった。

授業の最後にまとめとして、新聞の情報量の多さ(テレビやイン



回し読みの様子

ターネットでは限られた情報に偏りやすい) や、多くの情報をインプットして初めて、意見としてアウトプットできるということ。勉強をするからこそ、自分なりの意見を述べることができるということで授業をまとめた。この2時間で少なくとも5つの記事を読んだということは、普段あまり新聞を読んだことのない生徒にとっても新鮮だったようで、授業後生徒からは「(活字ばかりで) 頭をたくさん使った。」「新聞にこんなにたくさんのかことを書いていると知らなかった」というような声も聞かれた。

4. 成果と今後の課題

生徒が同一の教科書等で学習するのは違い、新聞という、ツールは一緒だが中身が異なる教材を使っの授業は初めてだったように思う。上記にも述べたように、自分自身で選んだ記事だからこそ、自身の言葉で表出しやすかったのだと思う。クラスメイトの言葉だからこそ、興味を持って読んだのだと思う。そういう意味で、子どもの言葉を表出させることには成功したと思う。しかし、社会に出て、意見を求められるのは必ずしも自分に興味のあるものとは限らない。どのような出来事にも自分自身の意見を述べられる社会人となってほしいと切に願う。

また、全員が上記で紹介したような「感想・意見」としてまとめられたかと言えばそうではない。「すごいと思った」「これはダメだと思う」など、抽象的な表現の生徒もいた。そういう意味で、今回のような授業を単なる「イベント的」なもので終わらせるのではなく、文章表現の学習を教えたり、良い感想を取り上げクラスで紹介したり、定期的に、何度も繰り返す必要性も感じた。そのためは、文章表現の技法を学ぶために国語科と連携をとるなど、他教科との連携の必要性も感じた。

また今回、学校行事の関係で実施はできなかったが、新聞記事の時事ニュースを取り上げ、さまざまな立場に立って物事を考える道徳も構想していた。具体的には、福岡県で行われたプリンセス駅伝での四つん這いで200mたすきをつないだニュースを題材に、選手、監督、観客、チームメイトの立場になり、心情を考える授業であった。今回の報告レポートには間に合わなかったが、また機会があれば、別の時事ニュースを取り上げ、実施したいと思う。

新聞はその日の出来事、情報をリアルタイムで発信しているものである。文部科学省から発行されている道徳教材も意義あるものだと思うが、生徒にとって見聞きしたことのあるニュースを題材に他人の心情をはかることも、リアルで当事者意識を持ちやすい教材であると思う。新聞記事＝社会(社会科)ではなく、道徳や特別活動などでも積極的に取り上げていくことで、生徒にとっても新聞を身近なものとして感じることはできるのではないだろうか。

今後も、新聞を通じて生徒の学力向上はもちろん、言葉での表現・育成に力を入れていきたいと思う。

新聞に親しみ、「学力」向上を目指す

尼崎市立大庄北中学校 校長 中 俊弘
主幹教諭 中嶋 勝

1、はじめに

本校2年生の生徒の家庭における新聞購読率は次のとおりである。(回答数 137名)

とっている 33%

とっていない 67%

クラスのほぼ7割近くが購読していない。嘘のような話だが、「初めて新聞を読みました」「これが新聞か!」と、1回目のNIEの授業後の感想に書かれていた。授業に新聞を使い始めた十数年前は7割以上の家庭が購読していたように記憶しているから、隔世の感がある。

スマートフォンやインターネットの急速な普及に伴い、新聞購読している家庭は年々減少している。それに伴い、中学生が新聞を読むのも、今後ますます減り続け、「新聞を毎日読んでいます」という生徒は、ほんのひとにぎりになってしまうのではないだろうか。

あらためて言うまでもないが、ネットとは違い、新聞は記者が取材を重ねて記事にする信頼の高いものであり、そのジャンルも多様である。しかも紙面をめくるごとに今まで知らなかった新しい世界と出会い自分を広げる。また、対立する意見に触れることもできる貴重な「教材」である。

つまり、新聞を用いた授業(NIE)は、生徒の学習意欲や社会への関心を高めることができる。読む・書く・表現する力という「生きる力」を身につけるために大変有効なものである。新聞を読むことで世界や地域、社会への興味関心を持つ。活字に親しむことで、語彙を増やし、自分の考えを持ち、表現する力も育つ。

そんな生きた教材を使わない理由はないのだが、残念ながら生徒が手に取れるだけの十分な新聞が揃わない。だから、実践指定校で



ある。実践指定を受けると、新聞6社から4ヶ月にわたり無償で朝夕刊を提供していただける。新聞を購読してい

ない生徒も、実際に新聞紙を自由に読むことができる。これは大変魅力的である。

以上の理由から、「新聞に親しみ、『学力』向上を目指す」という目標を掲げ、実践指定校に手を挙げた。それは、NIEを通じていわゆる「思考力・判断力・表現力」を身につけ「生きる力」を育てたいという願いを込めたものである。本年度は以下のように4つの実践計画を立てた。

- 1 国語科を中心に NIE 活動に取り組む
- 2 掲示物を用いて関心を高める
- 3 コンクールに応募する
- 4 新聞記者派遣事業を受ける

2、今年度の実践内容

まず、秋田久子兵庫県 NIE 推進協議会会長を本校にお招きし、5月29日にNIE職員研修を行った。NIE活動の目的と、新聞を有効に活用する具体的な方法の説明を受け、NIEの有用性を確認した。

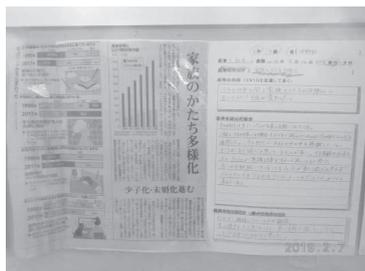
以下、生徒の感想を交えながら、本校1、2年国語科の実践例を報告させていただく。

①NIEへの導入。新聞の基礎を学ぶ



紙面の名称や構成、見出しの特徴、5W1H、逆三角形の書き方など基礎知識を学んだ。

②新聞記事紹介と新聞スピーチ



実際に一人一部、新聞を手にとって、1面から最終面までざっと目を通し、興味を引いた記事やクラスメートに知ってほしい記事などを一つ切り抜き、ワークシートに記事の内容をまとめ、その感想を書く。

その記事内容と感想をもとに、2分以内でクラスメートに紹介をする。スピーチ後は廊下に貼り、他のクラスの生徒達の目にも触れるようにする。できるだけ目を引くように、ワークシートにイラストを描き、色付けをして完成とする。時間に余裕があれば班内で回し読みをする

新聞記事紹介のいい点は、記事を紹介するためにじっくりと記事を読むことである。語句の確認もしなければならない。また、時間内にスピーチするために、記事の要旨と感想を上手くまとめる構成力もつく。生徒によっては、家でインターネットを使って、記事の内容を広げてくる生徒もいる。



生徒感想「僕の家は新聞をとっていいことだなと改めて感じたようである。

出来上がった作品は廊下に掲示した。

生徒感想「まわしよみ新聞づくりをした時は、私の全然知らないことがたくさんあって授業をして分かりました。また、みんなで一つのものを作るのは楽しいなと思いました」

きました」

③はがき新聞づくり

分かりやすく、簡潔に、5W1Hを意識しながら文章を書く必要があり、書く力を育てるために効果的である。

1マス4mmサイズのものを使用して、行事の後に振り返りをさせた。1年生では自己紹介新聞、2年生では台風21号、トライやるウィーク新聞を作った。6人班で批評し合って、優秀賞を選ぶという評価活動も行った。また、はがき新聞賞に応募し5名が入選した。

生徒感想「はがき新聞作成で、様々な出来事を短くわかりやすく書くのは難しかったけれど、省略の仕方が分かってきて、徐々に書けるようになったのは嬉しかった」「読み手に分かりやすく作らないといけないので文章力の向上に繋がると思う」

④まわしよみ新聞

興味関心を持った記事を数枚切り取り、一枚一枚班で紹介し合う。選んだ人は、なぜその記事を選んだのか。どんな内容なのか説明し、班員はその記事につ



いて知っていることなどを話すという時間を取る。その後、画用紙に1人1枚の記事を貼り付け、短いコメントを添えて新聞を完成する。作業を通じて班員同士が話し合う機会が生まれ、友人たちと交流するというのは楽し



いことだなと改めて感じたようである。

出来上がった作品は廊下に掲示した。

生徒感想「まわしよみ新聞づくりをした時は、私の全然知らないことがたくさんあって授業をして分かりました。また、みんなで一つのものを作るのは楽しいなと思いました」

⑤広告の分析

新聞紙面に掲載されている広告についてのどのような工夫がされているのか。その広告のテーマは何かを分析した。初めに、最も関心を引いた広告を選び、色使い、レイアウト、キャッチコピーなどがどのような印象を与えるのかを個人で分析する。続けて4人1組の班で、分析した結果を発表し合い、班の中から広告の一つを選ぶ。その選んだ広告についてもう一度、班で知恵を出し合ってさらに深く分析し。続けて発表を行うためのシナリオ作りをした。役割分担をして広告をプレゼンし、優秀な広告を選ぶ。また、どの班が丹念に分析していたかを批評し合う評価活動につなげた。新聞には魅力的な広告がたくさん使われていることやキャッチコピーが読者に強い印象を与えていることも確認することができた。

生徒感想「広告を分析することで 相手をどうしたら引き込めるかを知った。色々な工夫がされていることも分かった」

⑥新聞記者派遣事業



2019年1月23日、毎日新聞社阪神支局高尾具成記者をお招きし「記者のおもいーヒロシマ」と題して講演していただいた。

修学旅行で訪れる「ヒロシマ」を軸にしながら、取材の様子や、記事に込めた思い。そして、新聞記者として大切にしていることなどを講演していただいた。そして、後日、高尾記者が紹介された、語り部の沼田鈴子さんを描いた「アオギリにたくして」という映画の鑑賞も行った。**生徒の感想**「平和の大切さを伝えていけるように、広島で学んできたい」

⑦投書

教科書にある、書く単元の「意見文を書く」を扱った後、新聞投書欄へ投稿した。まず、各新聞に掲載された投書を読み、どのような工夫がされているかを学習した。短冊を用いて文章の構成を考え、下書きし、推敲、清書。下書きから清書までは授業時間の関係で宿題とした。投書前に6人1組の班に分かれて回し読みをし、わかりやすい投書はどれかを選ぶ選考会も開いた。

新聞投書は、語彙を増やし文章の構成を考える上で有効な活動である。実際に新聞に掲載された生徒は、文章を書くことへの抵抗感がなくなり、意欲的になった。そして、周りの生徒達も以前よりも前向きに取り組むようになった。

生徒感想「新聞は文字がいっぱいあって、大人が読むものと決めつけていたけど、自分たちに関係のある話や、同い年の人が考えた投書も載っていたりして面白かった」

⑧NIEタイム

2年生2学期からは、1週間に一度、無理のないペースで、朝の学習タイムをNIEタイムとした。社会で活躍している人たちや、志を持って社会に貢献している人たちの記事を載せたワークシートを配布し、担任が記事を読み上げる。生徒は時間内に記事の感想を書く。鋭い視点で書いたものや豊かな表現で書かれた感想を集めて印刷し、国語の時間に振り返らせた。

生徒感想「NIEタイムでは、あまり新聞を読まない私に、先生がピックアップをした記事が、社会の状況やいろんな人の考え方を伝えてくれるので、色々な考えや感情が引き出されました」「新聞記事の感想を書くとき、短い時間でどれくらい書けるのか、文字を書くスピードも上がるのでいいと思った」

⑨コラム写し

各新聞社のコラム欄を写し、見出しを考えて、感想をまとめるのは、語彙を増やすのに効果的であった。裏面には難しい語句を調べる欄を設けた。鋭い感想は印刷して国語の授業で読んだ。廊下に拡大コピーを掲示し、学年全体で共有した。教室前には辞書を置いて休み時間でも調べられるようにした。

⑩いっしょに読もう新聞コンクール

夏休みの宿題とすることで、生徒はじっくりと記事を探ることができる。8月には平和に関する内容も多く掲載されるので、平和学習の一環としても取り組んだ。自分たちの活動が学校奨励賞に選ばれたことは生徒の励みとなった。また、回収した作品から優秀な作品を選び、見出しをつけて廊下に掲示した。

生徒感想「色々な記事に目を通して日本や世界でどのようなことが起きているのかを知ることができました。考えをまとめる時に使う語彙も増えました。来年もNIEの授業が楽しみです」「家族と新聞の内容を話題にして話すようになった。新聞をじっくりと時間をかけて読めるようになった」

⑪トライやるウィークで本社見学

トライやるウィーク期間中、事業所が休日となる生徒を集めて、朝日新聞大阪本社を見学した。記者の働く姿を見ることができ、新聞記者という仕事に関心を持つことができた。

⑫新聞掲示の方法

職員室前廊下に新聞掲示板を設けて各新聞社の1面を掲示した。新聞社に掲載された投稿原稿も拡大して掲示した。

その下に新聞棚を作り、各新聞ごと、日付順に分けて保管しておき、職員や生徒が使いやすいように整理した。棚の上には、神戸新聞のまなび一、読売中高生新聞、朝日中高生新聞、毎日新聞社の「Newsがわかる」を置き、いつでも手に取れるようにしている。

NIEへの生徒感想



「最初のうちは、なんでこんなせなあかんの。めんどくさ」と思っていました。でも回数を重ね

ていくうちに、テレビでやっていなかったことや自分が共感を持てる記事などがいっぱいあって、新聞って面白いなあ。もっと自分に合った記事がないかな。などと思うようになってきました。NIEで文章を読む力がつきました」

「NIEの授業を実際に受けて、最近感じていることは、文章力が前より確実に上がっているということと、読解力も上がっているということです。理由は、どんなに小さな内容や出来事でも必ず5行以上書けるようになったからです。読むスピードも速くなりました。普段、スマートフォンばかりに目を向けているので、少しはニュースなどを見て、学生としての知識をもっと得るべきだと思いました」

成果と課題

生徒が感想で述べているように、NIEに取り組むこと



で、新聞に親しむことができた。また、具体的に新聞作りをすることで文章を練ること、語彙を増やすこともできたと考えられる。文章を書くことへの抵抗感もなくなってきたことが分かる。

大きな課題は時間の確保である。授業内で新聞を活用するのが一番望ましいが、授業準備や授業時間数の関係で、提供していただいた新聞を十分に活用できたとは言えない。日常的で積極的に、生徒が新聞に触れる環境を作るように今後も工夫していきたい。

NIEノートから世界を考える。

西宮市立平木中学校

校長 池田 巨

教諭 渋谷 仁崇

○実践の概要と内容

1、「NIEノート」

本校では、生徒たち、1人1人が「NIEノート」を作成している。その中で社会全体や、世界の動きを通し、社会科への関心、興味を高め、世界や日本社会全体の動きを考えるねらいがある。NIEノートは、授業がある前に、各自が新聞やインターネットの記事の中で、興味を持ったものをスクラップし、重要な箇所に線を引き、ノートに貼り、感想を書く。

授業の最初に、各班の代表が、書画カメラを使って、発表をする。お互いに発表者の内容をメモにとる。毎回、それぞれ個性的な記事や、大きな動きの記事など、発表している。社会の動きなど、興味関心をさらに高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って、自分の意見やアイデアを発揮できる人になってほしい。

★NIE (Newspaper in Education)

【毎授業 最初5分程度】

最近の新聞から、記事を切り取り、ノートに貼り、自分なりにまとめたものを発表。

→定期テストに時事問題として出題。

新聞をとっていない人は、テレビのニュースを聞いたり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

★NIEノート

- 確認
- 1、どれぐらいの頻度で記事をまとめているか。週に1回が基準。
 - 2、新聞を、きれいに切り取り、貼ること。
 - 3、「日付」、記事の「まとめ」、自分の「感想（15文字以上）」をしっかりと書いているかどうか。



授業で書画カメラを使って発表。



発表を聞いて、各自ノ
ートに要点や感想を
メモする。

○「NIE発表について」

●『社会的思考力・表現力を伸ばす』

- ・正しい日本語を読む力。
- ・記事の内容を理解し（記事の起承転結）、まとめる力。
- ・自分の感想を表現する力。
- ・発表を聞き、要点を絞りメモを取る力。
- ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。

○「NIEの取り組み評価」 個人賞

毎学期の学年集会で、学年内で、NIE

ノートに最も取り組んだ生徒を表彰する。

30年度の第3学年の生徒では、1200記事以上(10冊以上)集める生徒もいた。全体の平均は100記事。

<NIEノート> (記事：読売新聞)



2、N I Eコーナー（新聞の置き場）

職員室前や廊下などに新聞記事を掲示している。



職員室前での新聞置き場。（各紙別に）

●新聞の読み比べ

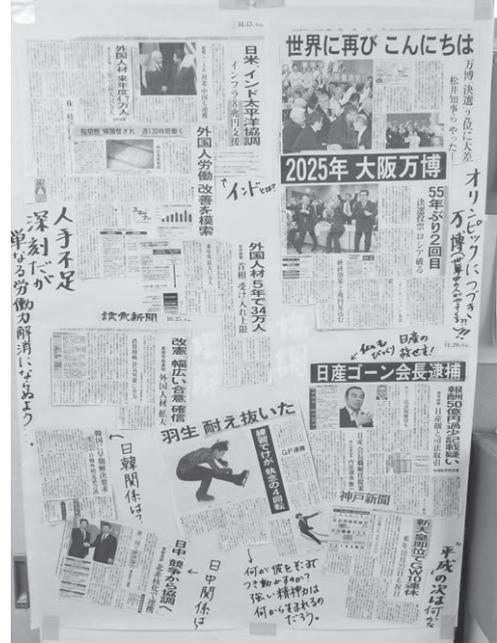
新聞を置いたり、気になったニュースをテーマ別に集めたり、いつでも読めるようにしている。



（新聞がそのまま入るクリアファイルを学校の多くの場所に設置し、定期的に新聞記事を更新）

●教師作成の記事の掲示

定期的に、教頭先生が新聞のスクラップ記事から、生徒たちが興味を持ちそうな内容のものをまとめている。



3、「いっしょに読もう！

新聞コンクール」

学校奨励賞 受賞

日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」に取り組んだ。長期休暇の課題として、家族や友達と記事を読み、感想や意見を全校生で応募した。

本校では、学校奨励賞を受賞した。



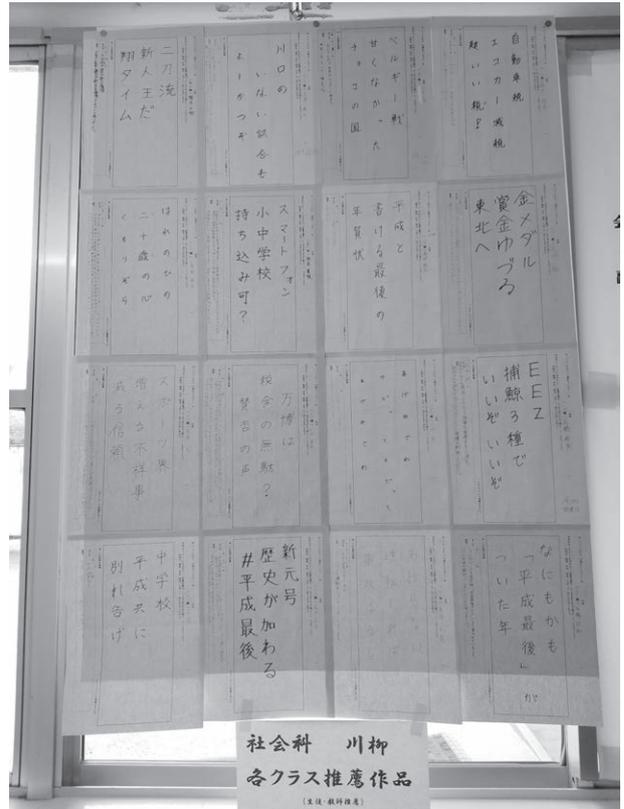
4、N I E川柳

N I Eノートから、1年間で自分の気になるニュースを選び、5・7・5の川柳にした。

テーマは、政治・経済・国際・スポーツなど。授業の中で、作品の発表交流会を行い、各クラスの優秀作品を投票で選んだ。

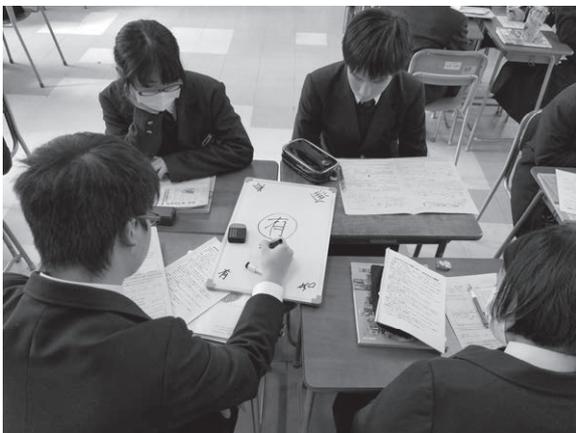
生徒作品（冬季課題）

<p>はれのひの 二十歳の心 くもり空</p>	<p>自動車税 エコカー減税 超いい税！</p>
<p>川口の いない試合も よしかつぞ</p>	<p>ベルギー戦 甘くなかった チヨコの国</p>



5、COP平木・模擬裁判。

新聞記事から、2018年、ポーランドで行われたCOP24（気候変動枠組条約第24回締約国会議）に関するものを集め、3年生の学級単位で、先進国、途上国、島国など、立場に分かれてディベートを行った。また、三匹の子豚を題材に、模擬裁判を行い、4人班で評決を考えた。



MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.

【 中 学 校 高 等 学 校 】

「新聞で教室は社会とつながったのか？」

神戸山手女子中学校高等学校 校長 平井 敬員
教諭 近藤 隆郎

1. はじめに

昨年度、N I E実践指定校としての取り組みをはじめるとにあたり、「新聞で教室を社会とつなげよう！」をテーマとすることを決めた。それは、新聞を単に情報や知識を獲得するための手段とするだけでなく、考えたり判断したり表現したりする力を養うための手掛かりとして用いることで、個々の生徒の主体的な行動へと帰結することを期待してのことだ。また、学習指導要領で新聞活用が明確に位置付けられているにもかかわらず、その認識さえおぼつかない現場の認識をあらため、日々の教育活動のなかに当り前に新聞があるという状況を作り出すことも企図した。

2. 実践テーマ

「新聞で教室を社会とつなげよう！」

3. 実践の概要

①年間購読と閲覧コーナーの設置

一年目に同じく、一般紙のほかに英字紙と経済紙を入れ、英語科や社会科（公民科）の専門的な利用に供することを目指した。また、地元紙を入れることで自らが報じられる機会に活用されることを期待することとした。

新聞立てを食堂内に設置し、自由に閲覧出来るようにした。

購読紙	購読月
朝日新聞	5・6・7・8月
産経新聞	5・6・7・8月
Japan News	5・7・9・11月
毎日新聞	9・10・11・12月
日本経済新聞	9・10・11・12月
神戸新聞	12・1・2・3月

②授業内の取り組み

社会科を中心に、各教員が記事を授業で取り上げるなどしたほか、夏休みの課題の自由研究、コンクールへの応募、定期考査への紙面からの出題などで新聞活用を進めた。高校の現代社会や時事研究では、これまで同様『ニュース時事能力検定公

式テキスト』を用いて新聞をより深く読む授業実践を続けた。あわせて、NIE をテーマに掲げて研究授業を実施した。

③入試への出題

高校入試の国語で、初めて新聞記事から出題した。

④コンクールへの応募

下記のコンクールへの応募を高校の現代社会の選択課題の一つとした。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）

「ひょうご新聞感想文コンクール」（神戸新聞社主催）

なお、「ひょうご新聞感想文コンクール」に高校 2 年生の生徒が入選している。

⑤取材を受けた紙面の授業等での活用

高校 3 年生の選択科目・時事研究で取り組んでいる「テーブル・フォー・ツー」や同じくキャリア教育で取り組んでいる「神戸メロンパンご当地フード化計画」は、新聞をはじめとする各種メディアでたびたび取り上げていただいております。掲載紙面を用いて授業を行っている。自らが学んだり取り組んだりしたことが他者の目にどの様に映っているのかを知ることが出来るのは、非常に有益であると感じている。

⑥記者派遣事業

高校 3 年生の選択科目・現代社会演習に、神戸新聞社の N I E 推進室室長・西田達男様をお迎えし（9 月 20 日）、「フェイクニュース批判に向き合う」「新聞（オールメディア）離れを検証する」の二つのテーマについて講演と質疑応答をしていただいた。

⑦N I E 実践報告会

兵庫県 N I E 推進協議会 20 周年記念となる実践発表会（2 月 1 日）で、「高校生によるシンポジウム」に登壇する機会をいただいた。

以下、当日の発表原稿および発言よりご紹介したい。

「N I E 体験を伝える ～私版 N I E の意味～」

神戸山手女子高等学校 普通科 3 年 佐藤 亜優

I. NIE の取り組みや授業について

「新聞で教室を社会とつなげよう！」をテーマに掲げて、社会科を中心に紙面を用いた授業が行われたり、「いっしょに読もう！新聞コンクール」や「ひょうご新聞感想文コンクール」に応募したりしています。

私が受講している現代社会や時事研究では、『ニュース検定公式テキスト』が使われていて、私自身、検定の 2 級に合格することもできました。

また、時事研究で取り組んでいる開発途上国への給食支援活動「テーブル・フ

オー・ツー」は、たびたび紙面に掲載していただいております、授業の教材としても使われています。自分たちが教材になるのは少し照れくさい感じもしますが、勉強に身が入りますし、活動の励みにもなります。

9月には、神戸新聞より西田室長にお越しいただいて、「情報メディアの多様化・フェイクニュース批判に向き合う」と題してお話いただきました。新聞の情報源としての重要性や信頼性について図表を用いてわかりやすく読み解き、もたらされる情報そのものの問題点がネットに如何に多いのかということなどについて丁寧に解説して下さいました。

また、こうして学んだことをもとに、私たち生徒が生徒に“授業”をする形で近々「主権者教育」を実施しようと準備しているところです。

II. 2年間の NIE を通して思うこと

さて、2年間の取り組みを通して私自身が気づかされたことの一部をお話ししようと思います。

私は当初、政治や社会への無関心が新聞離れを引き起こしているのだと思っていたのですが、むしろ、社会全体が「内向き」、「自分向き」になっていることこそがその原因なのではないかということです。

自分や自分の周りのごく狭い範囲、特に利害関係のあることには強い関心を持つ人が多いのに対し、直接自分と関わりのないことや難しいこと、直ぐに答えの出ないことなどには、お金も時間も気持ちも使いたくないという人が増えているのではないのでしょうか。だから、ペーパーではなくネットで知りたいニュースだけ検索するのでしょうし、CDを買うのではなく好きな曲だけをダウンロードして聴くのだと思います。

また、格差社会が定着し、子どもを含め余裕のない人、つまりお金や時間や気持ちを他人や社会に対して向ける余裕のない人が増えていることもこうした傾向に拍車をかけているように思います。

こんなふうにして狭い世界の中でだけ生きる人が増えてしまえば、世の中で何が起きているのかがわからない人だらけになるでしょうし、それをいいことに勝手なことをする人たちも出てくるかもしれません。これでは、人口が少なく投票率も低い若者ではなく、数が多くて投票率も高い高齢者層の意見を取り入れた方がいいという「シルバー民主主義」と同じようなことになってしまうのではないのでしょうか。

新聞が読まれなくなって、社会的弱者のために声をあげたり力になろうとする人がいなくなる世の中なんて、想像したくもありません。社会に知らせ、社会を守り、社会をつくる新聞の役割について理解できるようになった2年間でした。

⑧主権者教育

N I Eの一環としての主権者教育（2月13日）を実施した。

右：神戸新聞 2019年2月14日朝刊
下：産経新聞 2019年2月14日朝刊

教育現場で新聞を活用するN I Eの実践校に指定さ



広がるN I E

選挙の仕組み生徒が解説 神戸山手女子高で特別授業



同級生を前に選挙制度や投票方法などについて解説する谷根優花さん（壇上左から2人目）ら—神戸市中央区

れている神戸山手女子高校（神戸市中央区）で13日、市民と政治との関わりを教える「主権者教育」の特別授業が行われた。同校の3年生が選挙制度などを解説し、同級生ら約1000人が真剣な表情で聞き入っ

た。同校は昨年度からN I Eの実践校に指定され、現代社会や国語の授業で新聞を活用。さらに、選挙権年齢が18歳に引き下げられたことから、主権者教育にも力を入れている。

特別授業では、新聞記事を題材に討論などを行う科目「時事研究」を受講している谷根優花さん（18）と小野真帆さん（18）が、選挙制度や投票方法などを紹介。平成29年10月に行われた衆院選で、18歳投票率が兵庫が全国で最も低かったことを挙げ、「若者の意見を行政に届けるためにも、積極的に投票に行くことが大切」と呼びかけた。

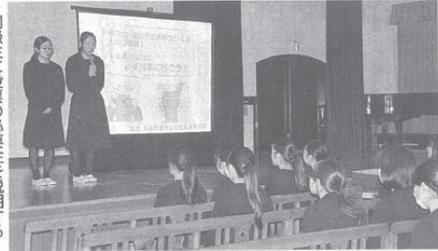
谷根さんは「今日をきっかけに、一人でも多くの人に選挙への関心を持ってほしい」と話していた。

神戸山手女子高で主権者教育

「18歳選挙権」の導入など選挙への関心を深めてもらおうと、神戸山手女子高校（神戸市中央区）で13日、3年生を対象にした主権者教育の授業があった。生徒2人が講師役を務め、同級生に向けて制度や課題などを解説した。（太中麻美）

18歳選挙権 課題を議論

同級生に投票の必要性を説明する谷根優花さん（左）と小野真帆さん（右）—神戸市中央区諏訪山町



N I E（教育に新聞を）活動の一環で、授業はともに18歳の谷根優花さん、小野真帆さんが担当した。2人は兵庫県選挙管理事務局の資料を基

生徒が講師役、一票の重み考え

に、クイズを交えて投票方法や選挙運動の仕組みを説明。18歳選挙権の現状について「2016年の参院選では、兵庫県の18歳の投票率は49.32%で全国19位。だが17年の衆院選だと全国最下位の37.88%だった」と報告した。

討論では生徒から、高齢者向け施策が重視されるシムバ1民主義などの問題点が指摘され「若い人が選挙に行かないと、意見が反映されない」との声が上がった。

昨年の高砂市議選で投票したという谷根さんは「一票を投じなくても自分が力になれた感じがした」と振り返った。小野さんは「若い世代が投票することで意見が反映され、子育てしやすい環境になれば」と力を込めた。

授業を受けた佐藤亜優さん（18）は「同じ年の人から教わることで、問題をより身近に感じた。今年は選挙イヤーなので、責任を持って投票したい」と話した。

教育に新聞を
N I E

4. 二年目を終えて

新聞離れをテーマに授業を行う際に、NHK放送文化研究所の調査データを利用した。それによると、若年層ほど新聞離れが進んでいて、なかでも10代・20代は男女ともに新聞を読む人の割合が一桁で、20代女性で土曜日に新聞を読んでいる人の割合は何と0%だという。

ゼロ。これを知ったときの衝撃は、未だに忘れられない。

確かに、新聞を読まない人に読ませることの難しさは言うまでもない。そしてその人たちに主権者教育をすることの難しさも。

しかしながら、忙しいから、もったいないから、興味がないから、と皆がそっぽを向くようなことになれば、社会は間違いなくおかしな方向を向いて進んでいくことになるだろう。

実践指定校からはひとまず外れることになるが、今後とも息長く地道に取り組んでいきたいと思う。ともあれ、N I E（教育に新聞を）活動の本質について、気付かされた2年間であった。

MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.

【 高 等 学 校 】

未来を創造する力を育むN I E活動

兵庫県立兵庫高等学校 校長 富田 哲浩
教諭 阪本 和人

1. はじめに

兵庫県立兵庫高等学校は神戸市長田区に位置する普通科高校であり、普通科 7 クラスと創造科学科 1 クラスを設置している。本校は平成 27 年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定され、「“課題先進国” 日本を担い世界へはばたく『未来の創造者』の育成」を目指し、科学的思考力、複眼的思考力、社会創造力、自律的活動力の 4 つの力を育むことを目標に教育活動を行っている。

創造科学科オリジナル教科として、1 年生では「RRE」「創造基礎」、2・3 年生では「創造応用」などの科目を設置している。「RRE」(Research and Report in English) では、グローバルな社会課題を英語で学習し、海外留学生と交流活動を行っている。「創造基礎」は「創造基礎 A」と「創造基礎 B」を置き、「創造基礎 A」では現代社会の問題についてディスカッションやプレゼンテーション、「創造基礎 B」では社会科学・自然科学分野の問題について探求学習に取り組んでいる。2 年生の「創造応用」では文系は国際問題、理系は自然科学分野の研究に取り組み、3 年生ではそれまでの研究をもとに論文を完成させている。また、普通科の生徒にも「グローバルリサーチ」を設定し、グループ単位で課題研究に励んでいる。

2. 実践概要

本校は平成 29 年度より NIE 実践指定校となり、今年が取り組み 2 年目であった。1 年目の NIE 実践活動では、SGH 事業における教育活動と関連させ、「社会問題に対して主体的に思考し、未来を創造する力を育むN I E活動」というテーマを設定した。2 年目の NIE 実践活動では国際社会にも視野を広げ、「社会問題・国際問題に対して主体的に思考し、未来を創造する力を育むN I E活動」というテーマに発展させた。特に平成 30 年は国際社会において、米朝首脳会談、北方領土の返還交渉、日露の中距離核戦力 (INF) 全廃条約の履行停止などに見られるように、国際社会の枠組みが揺れ動いた 1 年間であった。それらの国際社会に関する新聞記事を活用して、授業での NIE 実践活動を行った。

NIE 実践活動は掲示物と授業において実施した。掲示物では、5～6 月、9～10 月に 6 社の新聞を購読し、毎日 6 紙の一面記事を生徒昇降口に掲示した。普通科の授業では、1 年生の現代社会、2 年生の日本史 B において、新聞を活用した授業を行った。また、SGH に関する授業では、創造科学科の「創造基礎 A」において新聞ノートの作成、グローバルリサーチにおいて新聞記事の切り抜き活動を行った。

3. 実践内容

I N I E 新聞記者派遣事業 「世論形成のために新聞はどのような役割を担うのか？」

現代社会の授業の一環として、朝日新聞報道局編集委員堀江浩氏に「世論形成のために新聞はどのような役割を担うのか？」という題で1年生を対象に講義をいただいた。



講義の前半では、世論調査の時代による変化、世論調査を活用する際の注意点についてお話しいただいた。堀江氏は、例として2020年東京オリンピック期間におけるサマータイム導入の是非を問う世論調査を取り上げられた。

朝日新聞の世論調査において、導入案が公表された8月の世論調査では賛成5割反対3割であったが、その翌月の世論調査では賛成3割、反対5割と数字が逆転したという。このように世論は、時期により変化することがあり、その変化が何によるものなのかを考えなくてはならないと話されていた。

講義の後半では、世論調査の話を踏まえ、新聞は世論形成のためにどのような役割を担うのか、国民はメディアとどのように向き合うべきかについてお話しいただいた。SNSの発展により情報が多き時代であるからこそ、複数の調査やデータを横断的に見る必要があるとあり、「フェイクニュース」に騙されないメディア・リテラシーを養わなければならないと生徒たちに語りかけてくださった。講義終了後に生徒が感想を書いたが、生徒の感想文の中にはLINEで世論調査をできるのではないかという意見もあった。以下にそのいくつかを紹介する。

<生徒の感想>

① 「新聞が果たす世論形成の役割について、あなたが考えたことを書こう。」

- ・インターネットや SNS がメディアの中心となってきているが、最も正しい情報を受け取ることができるメディアは新聞であると考えます。新聞には情報をより早く伝える即時性はないが、その分情報を正しく、深く伝えることができるのではないかと思います。
- ・新聞を取る人が少なくなっているが、じっくりと新聞を読むことは、自分の意見をまとめることに役立つと思う。各記事にあまり興味がなくとも見出しを目に入れるだけで、ある程度の情報が分かり、広い視野を得ることができるので、自分の考えを深めていくことができる。
- ・新聞が世論調査をすることによって、内閣や国会議員が投票によらずに民意を知ることができるので、政治を行っていくうえで便利なのではないかと考えた。また、政治家だけでなく、私たちのような一般人も国民の大部分がどのように考えているのかということを知れるので、大事だと考えた。
- ・やはり新聞を読まない人がたくさんいると思うので、SNS などの方がいいのではないかと思います。SNSの方が、幅広い世代の考え方について情報を得ることができる。

② 「メディアの情報をどのような意味として受け取り、活用するのかを考えよう。」

- ・インターネットが普及しているが、世間には信憑性のない無責任な情報が溢れている。すべてを正しい情報と思うのではなく、自分の力で信用できる情報を取捨選択することが大切だと考える。

- ・私は自分の考えを信じるのが大切であると思う。ただ、自分の意見を正当化してしまうのではなく、多くの情報に触れ、正しい情報・知識を蓄えたうえで意見を形成したいと考える。そのための手段として、メディアを活用していきたい。メディアの情報だけでなく、それを見聞きしたうえで自分が疑問に感じたことや興味を持ったことにも着手しようと思う。何が正しいのか、情報量が多い分判断は難しくなると思うが、自分たちが社会で生きていく中でそのような能力は必然的に必要とされるので、今からでも磨いていきたいと思う。

Ⅱ 中距離核戦力 (INF) 全廃条約から探る「冷戦の終結」の授業

日本史の授業において、冷戦の終結と中距離核戦力 (INF) 全廃条約履行停止を関連させた授業を行った。INF 全廃条約をめぐるのは、2018年10月にトランプ大統領が、ロシアの新型巡航ミサイルが条約への違反に当たるとして離脱を表明し、2019年2月にはロシアのプーチン大統領も条約が禁じる中距離ミサイルの開発に踏み切ると宣言した。授業では冷戦におけるアメリカ、ソ連の対立を復習したうえで、INF 全廃条約についての複数の新聞記事を生徒に提示し、以下の問いにグループ単位で考えてもらった。複数の記事を参考にして次の①～③の問いを考えることで情報活用能力を養い、それぞれの国が置かれている立場を考えることで複眼的思考力を養うという意図を込めた。

<問い>

- ① どのような背景のもと INF 全廃条約は結ばれたのだろうか。
- ② なぜアメリカ、ロシアは条約からの離脱をはかったのだろうか。
- ③ アメリカ・ロシアが条約から離脱することで今後どのような影響が出るだろう。

Ⅲ 戦争とメディアを考える授業

日本史の授業において「メディアの戦争報道」にテーマを設定し、アメリカが戦った二つの戦争を学習した。二つの戦争とは、ベトナムの社会主義化を防ぐためにアメリカが介入したベトナム戦争とイラクのクウェート侵攻への軍事的制裁として多国籍軍が派遣された湾岸戦争である。その二つの戦争におけるアメリカ政府のメディア政策の違いを比較することで、メディアと戦争との関わりを生徒たちに考えさせた。

アメリカにとってベトナム戦争は、西側陣営による資本主義の平和を実現するための戦争であった。そのため、アメリカ政府はベトナム戦争を義戦と自負し、国民にもアメリカ軍の活躍についてメディアを通してありのまま伝えようとした。しかし、米軍は南ベトナム解放民族戦線のゲリラ戦に苦戦を強いられ、メディアの報道でもアメリカ軍の苦戦や残虐行為が報道されることになる。そのため、アメリカや日本ではベトナム戦争に対する反戦運動が起こり、アメリカ政府はパリ和平協定を結び、ベトナム戦争から離脱したのであった。

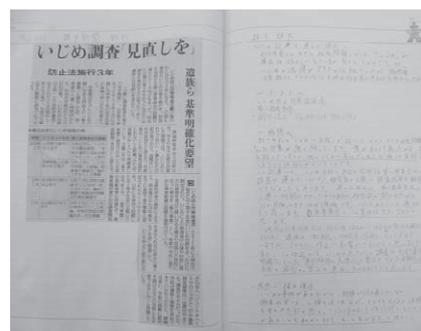
ベトナム戦争からアメリカ政府が得た教訓は、必ずしも戦争報道が国民の愛国心を煽るものではないというものであった。アメリカ政府はその反省を活かし、冷戦終結後に起こった湾岸戦争を戦った。つまり、アメリカ政府は戦争報道において規制を行ったのである。そのため、国民は戦争の残虐な部分を目にすることはなく、アメリカ軍のミサイルが軍事施設にピンポイントで命中する映像を目にするのみであった。アメリカ政府は「きれいな戦争」を演出し、湾岸戦争は「ニンテンドー・ウォー」と呼ばれることになった。

日本の太平洋戦争でも、各新聞社が「大本営発表」をそのまま報道していたように、メディアと戦争の繋がり是非常に深いといえる。メディアが戦争をどのように報道するかによって、国民に与える影響も変わってくる。今回の授業を通して、生徒からは「メディアが正しい報道をすることで、戦争・紛争の大規模化を防げるのではないか。」「メディアに翻弄されないために、誰が何のために発信した情報なのかを考え、メディアと関わっていきたい。」といった声が聞かれた。2年間のNIE実践活動では、「政治とメディア」「世論とメディア」をテーマにした授業を複数回行った。NIE実践を2年間受けた生徒は、来年度には選挙権を得る。メディアとの関わり方を考え、選挙権を行使してもらいたいと思う。

IV 「創造基礎 A」における「新聞ノート」

NIE実践校に指定される以前から、創造科学科の「創造基礎 A」において、新聞ノートに取り組んできた。交換ノートを用いて、以下のように実践した。

- ① 自分の気になる記事を切り抜き、その記事をノートにスクラップする。
- ② その記事を選んだ理由、感想を記述する。
- ③ そのノートを次の人に回し、次の人が前の人の記事及び感想について考えを述べる。



4. 成果と課題

「社会問題・国際問題に対して主体的に思考し、未来を創造する力を育むNIE活動」というテーマを設定し、特に複眼的思考力、社会創造力の育成を狙った授業実践を行った。授業実践では、多くの生徒が複数の記事から問題の背景・原因を探求することができるようになった。また、授業実践を重ねるごとに、問題の背景・原因について理解したうえで、自分たちや社会がとるべき行動を提案できる生徒も増えた。今後も複眼的思考力や社会創造力を身につけるため、SGH事業と関連づけたNIE実践を進めていきたいと考える。

日本史や現代社会の定期考査では、毎回記述問題を課してきたが、それに対する生徒の取り組み方にも変化が見られた。1年生の頃は、記述問題を空白で提出したり文章に句読点を打たなかったりした生徒が多くいたが、2年になると、正誤に関わらず自分の答案を作ることのできる生徒が増加した。新聞の活字を読むことにより、文章を読むこと、文章を書くことに対する生徒の苦手意識が改善したといえる。

来年度はNIE実践指定校からは外れるが、政治・経済の授業の導入などで新聞を活用していく予定である。また、高3生は受験勉強において活字を読むことや、自分で文章を書くことが増えるため、授業以外の場面でも新聞を活用していきたいと考える。

NIE 活動を授業改善、授業力向上に生かす

兵庫県立湊川高等学校 校長 片岡 正光
教諭 橋本 政好

1 はじめに

本校は神戸市にある1学年2クラスで、生徒数約120名の定時制高校です。昼間アルバイト等を行い家計を助けたり、中学校時代に不登校を経験した生徒が半数程度おり、基礎学力面で課題がある生徒も少なからずいます。

多くの生徒は新聞に馴染みがない状況ではありますが、平成29、30年度において、新聞を教育活動に用い、授業改善、授業力向上に活かし、学校全体で魅力ある授業づくりに重点的に取り組みました。

2 NIE コーナーの設置 新聞置き場と整理

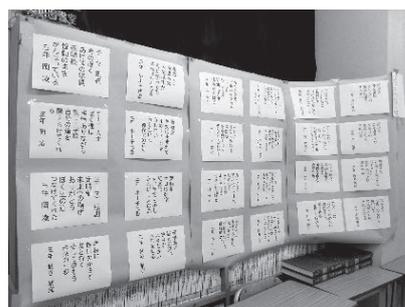
閲覧・利用への配慮から、生徒がよく通る職員室前の廊下にコーナーを設置。複数社の新聞を日付順に並べ閲覧できるようにし、新聞記事にコメントを付けて掲示するなど、社会の出来事に関心を持たせる取り組みをしました。



3 授業実践 ～教科等の取り組み

(1) 国語科

教科書の短歌と俳句の単元で、新聞の文芸欄の短歌、俳句、川柳の作品に触れ視野を広げるとともに、定時制高校での短歌指導経験の豊かな特別非常勤講師を招き、短歌作品を作成。文化祭における掲示や「前田純孝賞」学生短歌コンクール（新温泉町・神戸新聞社主催）等に応募しました。コラムや記事の読み、書き写し、問いかけを考えると等によって読解力の育成に努めました。



(2) 英語科

新聞は考えを広く伝える一つの方法です。同様に、英語圏などでは考えをまとめてポスターで表現する方法がよく使われます。今回は、テーマ「What country do you want to visit and why?」に沿って、情報を収集し、グループで話し合い、英語表現を考え、わかりやすく掲示物1枚にまとめて廊下に掲示しました。



(3) 理科

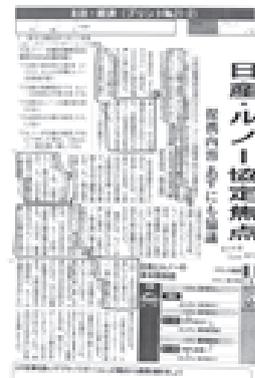
科学的なニュースや授業と関連する記事があった時に、生徒に興味・関心のある新聞記事をタイミングや内容を見極めて、随時授業で取り上げ、提示しました。

例として、地震、噴火、火星有人飛行、遺伝子組み換え食品の実態・表示方法・遺伝子の仕組み・遺伝子検査等の新聞記事を活用しました。

(4) 地歴・公民科

地歴科では、「世界史 A」において「新聞記事で歴史を学ぶ」をテーマとし、「戦争」について興味ある題材を新聞から見つけ、まとめ、発表する学習を行いました（「4 NIE 研究公開授業」参照）。

公民科では、「政治・経済」、「国際経済」において進むグローバル化について日産自動車とルノーの提携関係の記事（平成 30 年 11 月 28 日毎日新聞）を読ませて、グローバリゼーションの進展について考えさせる授業等行いました。



(5) 家庭科

様々な食についての新聞記事を読み、授業内で感想文を書きました。また、実習で実際にレシピをもとに生徒が調理しました。その写真とともに、壁新聞として文化祭で展示しました。



(6) 芸術科（書道）

ガラスのコップの表面を削り文字を刻むグラスリッチェンのため、広告の文字や言葉を新聞から探しました。また地元長田の豆屋さんの節分の新聞記事をみんなで読み、節分の行事の意味を理解したうえで升に入った福豆や鬼の絵に文字を書き、作品を作り相互評価をしました。新聞から得た話題を創作に繋げる授業を意識して行いました。

(7) 総合的な学習の時間（体験型のワークショップの授業を経験）

「ミッション M」では、新聞からの情報をもとに社会の出来事（時事問題）や湊川高校の歴史などの問題など、20～30 問のクイズに挑戦します。例えば昨年生まれた男の赤ちゃんの名前ベスト 1 は？ 大阪万博は何年に開かれるか？ など。お互いの答案を採点する時には生徒の新聞に対する関心も高まりました。

また、ワークショップ「ニュースペーパータワーめざせ 3 m 越え」では、限られた新聞の枚数でできるだけ高いタワーをつくることを目指しています。どのようなものを作ればよいか、思考力をはたらかせています。また作業を分担して行うため、チームワークも重要です。昔新聞は生活の一部となっていて、読んだ後は様々に利用されてい



ました。ものを包んだり、兜を折って被ったり、靴の中の湿気を取ったりなど、よく使いました。読むだけでなく、このような活用方法もあります。

4 NIE 研究指定校 公開授業（平成 30 年 11 月 29 日）

高校教員、中学校高等学校教員、中学校教員、特別支援学校教員、新聞社、NIE 事務局等、14 名の参加者のもと、NIE 公開授業を実施しました。2 時間目、3 年 1 組 21 名の世界史 A の授業において、大崎みずほ先生が授業者となって、「新聞記事で歴史を学ぶ」をテーマにした単元（「戦争」について、興味のある題材を新聞記事から見つけ、自分なりに、新聞にまとめ、発表する）6 時間の内の 6 時間目の授業を行いました。

今回の発表者は 6 名で一人約 5 分の発表の後、生徒全員がそれぞれの発表について、声の大きさ、時間配分、発表態度、聴衆の関心、わかりやすさ、表現の工夫、全体等の評価項目のある評価シートに記入。最後に、発表が良かった者の新聞に「赤」、新聞の出来栄が良い者の新聞に「青」のシールを貼る活動（投票）を行いました。新聞作成及び発表は、前回の授業と合わせて全員が行っており、最終回の今回の授業の最後に、発表部門、新聞作成部門の最優秀賞を投票で決めました。2 名の受賞者には感想を



述べさせ、まとめとして、大崎先生より、「新聞は社会とつながるための情報が得られ、思考力や判断力、表現力を培う学習のツールになる」との話がありました。

今回の発表者には、戦争経験者、東南アジア出身者もあり、発表内容から多様な考え方や経験を聞くことができ、全員の学びが深まる授業展開でした。また、他者の発表を評価する活動は、生徒の主体性を高めることに効果的です。多くの授業参観者が、後の意見交換会で同様のことを発言していました。

【振り返りより】（部分）

各自のテーマ選定の理由は、「もっと深く知りたかった」「勉強したことがないことを知りたかった」という意見のほか、「知っていることが真実かどうか調べたかった」「自分の知っている悲惨なことを少しでもみんなにわかってほしかった」「日本がしたことを振り返りたかった」というものもあった。今回の取り組みは、「自分で一から十までするのはすごく大変だった」「とても緊張した」が、「皆の興味の内容が完全に一緒のことはなく、様々な発表を聴き、勉強になった」「自分が調べたいものを調べられて、深く知ることができた」「新聞を読んだり、書く力が身についた」「知識が増やせた」との感想を持ったようだ。

世界史 A NIE 公開授業 学習指導案

指導者 大崎 みずほ

- 1 日時 平成 30 年 11 月 29 日（木）2 時間目
- 2 場所 3 年 1 組 ベーシック・ラーニングエリア 選択者 21 人
- 3 使用教材 各自が作成した「戦争」についての新聞形式の記事
- 4 単元の指導計画
 - 第 1 時 神戸新聞の戦争関連記事「子どもたちの戦争 上・中」の要約
 - 第 2 時 新聞記事作成用資料を収集
 - 第 3 時 新聞記事作成①
 - 第 4 時 新聞記事作成②（③ LHR も利用）
 - 第 5 時 作成した新聞記事を発表①
 - 第 6 時 作成した新聞記事を発表② 本時
- 5 単元の目標 「新聞記事で歴史を学ぶ」 新聞記事を手がかりとして歴史の深い学びを行う。
 - ①「戦争」について、興味のある題材を見つめ、自分なりにまとめ、考えをもつことができる。
 - ②複数の資料にあたり、比較し、批判的に考察することができる。
 - ③自分がまとめた記事を紹介し、自分の考えを伝えることができる。
→以上①～③ 思考力・判断力・表現力をはぐくむ
 - ④他人の発表を聞き、興味・関心を持ち、「戦争」についての理解を深めることができる。
- 6 本時の目標
 - ①新聞記事をクラス全員に紹介し、要旨・自分の意見を発表する。【言語活動】
 - ②クラスの生徒の発表を聞き、「戦争」について理解し、話し合うことができる。【言語活動】
- 7 本時の評価規準と評価計画

関心・意欲・態度	①他人の発表を聴く姿勢ができていないか。 ②自分がまとめた記事を丁寧に紹介しようとしているか。【言語活動】
思考・判断・表現	①興味がある題材の記事を作成し、自分の意見を持つことができるか。 ②自分がまとめた記事を紹介し、自分の考えを伝えることができる。
資料活用の技能	①興味がある題材を選び、まとめることができているか。 ②他人の新聞から工夫や考えを学ぶことができる。
知識・理解	他人の発表を聞き、「戦争」についての理解を深めることができる。

5 新聞記者派遣事業（平成 30 年 9 月 14 日）

神戸新聞報道部小林伸哉記者に、「命と人権」をテーマに、事件記者の取材を通して、記者の立場で感じた命や人権について、神奈川県で起こった飲酒ひき逃げ事件被害者とその家族の思いや行動等を主な内容として、ポスター、新聞記事プリント等をもとに話していただきました。小林記者には昨年も、防災教育に関連し、佐用町の水害の取材や CG ハザードマップ等について、命と人権の話をしていただき、2年続けての講演となりました。

生徒を代表して質問をしてくれた生徒会長、副会長からは、「記者をしていて印象に残った最近のニュース」や、「記者として一番つらかった記事」などの質問があり、記者からは、西日本豪雨、北海道地震での火力発電所稼働による環境問題、佐用町水害での被災家族、JR 脱線事故、そして今回の神奈川県の交通事故被害者、被害者家族の取材との回答がありました。



6 成果と今後の課題

(1) 生徒の状況

生徒は仲間と共に学びを楽しんだようです。生徒が新聞からの学び、教材を通して、一緒に新聞を読む、学びを共有する姿を見ることがありました。生徒自身の考えや思いを言葉にして表すことも体験しました。作品が完成すると、「やった！」とか、「そうなんだ」とか、思わず声に出す機会もありました。進路を意識した生徒は、社会で取り扱われていることを面接で尋ねられる機会もあり、「読まない」と新聞を手に取り読んでいました。

(2) N I E 活動について

初めは「N I E、新聞を使つての授業での取り組みって何だろう。どうすればいいのだろうか」と戸惑いがありました。先生方の創意と工夫、教科科目の特性が活かされて、生徒と一緒に実践されました。1年目よりは2年目と、理解が深まり、内容も充実しました。社会と関わる窓、思考のツールとして、進路指導とも重なり、新聞の存在が身近に感じられます。新聞を通して学びの広がりや深さ、社会と世代、地域が繋がる学びを実感しました。

(3) 実践者としての感想

大変な課題だなと思いました。しかし実際には、毎日、各社の新聞を読み比べることもでき、同じ事柄を扱っても、取り扱いや視点が違うので、生徒とともに読み比べて理解を深めました。記者の事件に迫る気概や各専門家の語る言葉の深さにも感心しました。記事の社会での意味づけを読んで考えました。今後とも社会と繋がる学びの機会を進めたいと思います。

N I E新聞を活用した、生徒が自ら学べる授業づくり

兵庫県立北須磨高等学校

校長

小松原 知子

教諭

楯川 瑞樹

1 はじめに

本校は、昭和 47 年、全日制普通科高等学校として開設され、平成 14 年、全日制普通科単位制高等学校に再編された。創立当初より優れた進学実績をあげるとともに、部活動も活発で学習との両立は本校の伝統となっている。普通科単位制に改編後も、この伝統は受け継がれ、現在に至る。

『自ら考え、自ら選び、自ら学ぶ』をモットーに、生徒一人ひとりが、自己を見つめ、仲間と共に進路実現に向けて、個性を大きく伸ばし、学力だけでなく、『生きる力』を育める環境にある。

2 実践にあたって

本校は平成 29 年度より、NIE の指定を受け、本年度は 2 年目の年となる。昨年度よりビジョン検討委員会を発足し、教員の学校評価やアンケートを集約し、今後の本校が目指す道筋（グランドデザイン）が提案された。

具体的には生徒につけさせたい力を①行動力②挑戦力③創造力④継続力⑤分析力⑥発信力⑦協働力の 7 項目に集約し、職員生徒共々、目標に向かって共通意識を持つようにした。そこでできたスローガンが『Breakthrough～史上最高の自分になる』である。

昨年は NIE の活動を教育課程に取り入れることからはじめたが、2 年目となる本年度は生徒が主体的に活用できること 7 つの力を伸ばすことをテーマに進めた。具体的な内容は以下のとおりである。

（1）3 年次の SHR での新聞記事の活用

3 年次の入試に小論文を必要とする生徒が多数いるため、本校では各年次で小論文指導を実施している。論文の構成や語彙力は年次を重ねるごとに身につけていくが、テーマに関する情報を収集する時間が足りていない。生徒は 3 年次の 2 学期以降になってから、新聞を読んだり、書籍を読んだりし始めるが、それでは手遅れになることがあった。

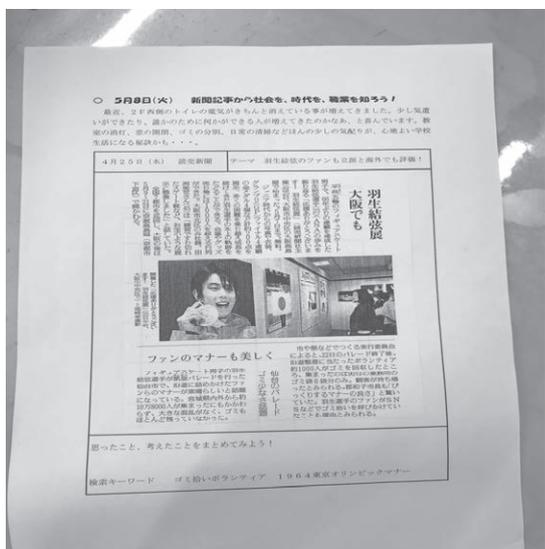
そのことから、進路指導の一環として SHR で、週 2、3 回程度、新聞記事を紹介するプリントを使って学習する時間を設けることにした。

新聞記事の選定は 3 年の学年団を中心とし、紹介したい記事を募り、常に世間のニュースに関心を持つように指導することにした。記事は文系理系に特化した内容から、時事関係や地域の記事まで様々な記事を紹介し、プリントの下には感想を書く欄を作り、自分の考えを述べられるようにした。

新聞の記事を利用し、データや事実を客観的にとらえ考察する分析力と、自分の考えを文字にすることにより発信力を養った。様々な記事を使用することによって、進路指導をきっかけとして、活字から情報を得ることの重要性を感じてもらい、新聞の重要性を感じ、興味を抱く一助になればよいと考えた。

当初は興味も薄かった生徒が意図を理解し、進路への意識が高まるにつれて、前向きに取り組む生徒も増えてきた。

新聞の活字離れがささやかれる中、活字より情報を得て、考えを発信する力を身に付けることは今後も授業やHRを通じて継続していきたい。



(2) 1年次回し読み新聞 シンポジウムでの発表

・目的

1. 新聞に親しむ機会を作り、新聞の特徴や意義を知る。
2. 自分の興味関心を他者に伝え、他者の考えを知る機会とする。
3. NIE 指定校、ユネスコスクールの取り組みの一環として実施する。

・実践方法

1. グループに分かれて、各班に、新聞 4 紙とマジック、模造紙を準備する。
2. 集める記事のテーマを各班で相談し、決定する。

- ①気候・気象・気候変動・地球温暖化 ②医療・看護・介護・高齢化
 ③戦争・紛争 ④教育・子ども ⑤政治(国際・国内)
 ⑥テクノロジー・技術革新 ⑦兵庫県・神戸市・地元
 ⑧文化・流行・高校生 ⑨歴史・地理・考古学 ⑩経済・経営・貿易
 ⑪健康・栄養・薬 ⑫地域社会・地域振興 ⑬その他

3. 自分の班のテーマに沿った記事を2～3つ選び、切り抜く。
4. 自分が選んだ記事の内容を簡単に紹介し、選んだ理由や感想を述べる。
5. 全員が選んだ記事を組み合わせ、1枚の用紙に貼り、壁新聞を作成する。
壁新聞のタイトル、記事の出典(新聞名・日付)、簡単なコメント、イラストを記入する。
6. リーダーが作成した壁新聞をクラスで簡単に説明する。
7. 教員による講評
8. グループで作成した壁新聞をもとに、各自で意見文(800字～1000字程度)を書く。

・成果と課題

普段新聞を読まないという生徒も様々な記事に目を通すことができ、グループ活動にすることでより活発に意見を交換することができた。班ごとにテーマを決めて発表することによって、自分たちが興味を持っている記事だけでなく、他のニュースにも関心を持つことができた。また、自分たちで回し読み新聞を作成し、クラスで発表することで、学んだことを発信するという経験にもなった。今後の課題としては、このような活動の時間だけでなく、日常的に生徒が世間のニュースに関心を持つことができるような工夫が必要である。



(3) スピーチ&ディスカッションでの活用

本校の学校設定科目であるスピーチ&ディスカッションの授業では、2学期に行ったディベートの授業で新聞を活用した。まず、ディベートのテーマになりうるものを新聞記事から探し出し、それについて、自分の意見を英語で発表した。その後、テーマを選択し、肯定側、否定側に分かれ英語でディベートを行った。相手の意見を聞いて、尋問したり、反駁したりするため、スピーキングとリスニングの両方の能力向上につながる効果的な活動であった。課題としては、授業数が少なく、情報を集める時間も足りなかったため、正確なデータを示すことができないことが多かった。次にディベートを行うときは、情報収集等の準備に時間をかけられるように指導したい。

(4) 世界史の授業での活用

・ 単元

第2部：地球社会と日本

第1章：現代社会の芽生えと世界大戦

第2節：第一次世界大戦がもたらしたもの

・ 授業の目標

パレスチナ問題の構造と歴史的な経緯を政治面・宗教面において理解する。
また、第一次世界大戦下のイギリスによる矛盾外交がこの問題の原因となっていることに気づく。

・ 新聞活用の目的

1. パレスチナ問題について理解したうえで新聞記事を読むことで、100年以上前の出来事が今でも社会に影響を与え続けていることに気づき、歴史を学ぶ意義を実感する。
2. 現代の世界に対する関心と課題意識を高め、歴史的な観点から探究し、21世紀の世界について考える。
3. 現代社会の問題について、歴史的な観点を踏まえて多角的に考察する。

・ 新聞活用の成果

普段使用していない教材を活用することで、生徒の理解を深め、授業内容を身近に感じさせることができた。また、歴史的な出来事と現代社会との関連を知ることで、世界史を学ぶ意義を生徒に気づかせることができた。

3 成果と課題

NIE新聞を導入して2年目であったが、授業やHRで活用する教員が1年目よりも多くなり、世間のニュースと関連付けて学習する機会が増えた。また、新聞を読んでその内容について意見を発表したり、回し読み新聞をつくってクラスで発表し掲示したりするなど、生徒が自分たちの考えを発信する機会をつくることもできた。

課題としては、休み時間や放課後など、生徒が常に世間に興味を持ち、自ら新聞を手にとって読んだり、ニュースを見たりする生徒がもっと増えるように、授業やHRで最近のニュースと関連付けて話をするなどの動機づけが必要であると感じた。

学びの質を深める NIE 活動

兵庫県立加古川北高等学校 校長 青山 哲也
教諭 岩本 麻衣子

1 はじめに

	教科	人数	内容
1	国語	3	現代文・国語表現
2	地公	4	現代社会・日本史・世界史
3	理科	3	物理・生物・化学

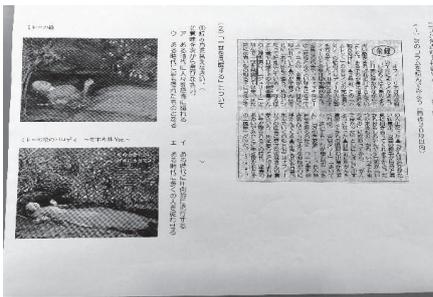
今年、昨年度の課題を踏まえ、10人の教諭でNIEに取り組んだ。図書人権部と連携し、図書室のマガジンラックに新聞6紙を置き、多くの職員・生徒が閲覧しやすく、いつでも貸出できる体制を整えた。



2 各教科の取り組み

(1) 国語 現代文 東影あさひ
「コラムを読む」

複数の新聞コラムから共通の話題を考えた。



(2) 国語表現 岩本麻衣子

「新聞の読み比べ」

新聞記事になった最近の出来事を班別に調査し、各社の記事の伝え方を比較し、発表した。神戸新聞社の方にも授業していただき、アドバイスをいただいた。



(3) 地歴・公民 田尻淳

①世界史A「人類の誕生と文明の発生」(4月)

英国に約1万年前に存在した人類の肌は黒かったことを紹介し、生徒の先入観の変革を促した。

②世界史A「ヒゲを剃る?蓄える?」(9月)

具体例 参照

③世界史A「宗教について考える」(10月)

イスラーム教徒の記事を読むことで、人間にとって宗教とは何なのか、考えた。

④世界史A「元号について考える」(10月)

新元号についての報道記事から日本の歴史について考えた。

(4) 現代社会 西畑敦史

「核兵器の廃絶と国際平和」

朝日、神戸、読売、産経の社説を検討し、核兵器禁止条約に日本は参加すべきか討議した。

(5) 理科 生物 佐藤真人

「CAR-T細胞」に関する記事の紹介

「バイオテクノロジー」 //

ゲノム編集技術の概要とその是非を新聞記事から考え、意見交換をした。



(6) 物理・化学 楠本順平・角野陽介
ノーベル化学賞と物理学賞の記事を紹介し、理科への興味につなげた。

(7) 進路指導部 田中麻千子

「小論文指導」

家庭欄・文化欄・社会欄を中心に情報を提供し、主体的に自らの意見を表現した。

3 成果 授業者の感想

(1) 現代文 東影あさひ

興味を持って取り組んでいる生徒が多かった。読むのに時間がかかったものの、新聞を使った授業を継続することで語彙力、速読力、読解力の育成につなげることができるのではないかと期待できる。

また、話題を提供することについてタイムリー性があったり、普遍性があったりするため、生徒の考察力や対話力の向上につながることを期待できる。

(2) 国語表現 岩本麻衣子

同じ事件であっても、新聞を何種類も読むことにより、見る立場や、事件の切り取り方が違ってくることが学んだ。

また、専門家の意見や現地取材を通し、事件そのものを論ずるだけでなく、時代背景や社会そのものに対する疑問にまで発展していった。

(3) 地歴・公民 田尻淳

①世界史A「人類の誕生と文明の発生」

・(生徒の授業評価)「新聞記事を取り上げた授業は、興味を引く、先入観・価値観が変わる内容でしたか?」に対する「そうだ」「大変そうだ」を合わせた回答率は、72.1%であった。
・(参観教師の感想)「新聞に記載されていることを全て信用するのではなく、『事実』と『意見(推論)』に分けて考えなければならないことが印象に残った」

②世界史A「ヒゲを剃る?蓄える?」

・(生徒の授業評価)先入観・価値観が変わる 87.3%

③世界史A「宗教について考える」

・(生徒の授業評価)先入観・価値観が変わる 90.5%
・(参観教師の感想)モスクの独特の雰囲気や、イスラームの多様性が感じられた。なぜあのような一体感ができるのか、宗教の力を改めて感じた。

④世界史A「元号について考える」

・(生徒の授業評価)同じ資料でも価値観によって得る情報が異なる 88.9%

・授業者の感想

新聞を主体的に読むことによって、眠っていた生徒の意識が活性化された。適切な意図と教材による授業に失敗はないと確信した。

(4) 現代社会 西畑敦史

「課題に応じて資料から情報を選択し、論理的に説明できるようになる」という目的に対して、記事から情報を読み取ることには時間がかかったが、各グループとも各社説の論点を適切に踏まえて議論・意見発表できていた。学校としての取り組みを継続することで、生徒の新しい学びの形が形成できると思う。

また、日本人は歴史的にヒゲを蓄えていたかどうか考え、日本史の図説の写真で確認した（江戸時代までは蓄え（中国等に倣う?）、江戸時代に剃り（蛮風排除で禁止）、明治以降再び蓄え（洋装の影響）、大正・昭和に入って再び剃る（「モボ」の流行等））。

③ ヒゲに対する拘りの差を知る

欧米や中国では、日本のように「ヒゲ」と一括りにせず、部位ごとに異なる名称で呼ぶこと（ヒゲに対する拘りが日本より強い）を、「口ヒゲ（髭）」・「ほおヒゲ（鬚）」・「あごヒゲ（髯）」を示す漢字を電子辞書で検索（資料右上）することをおして実感した（『三国志』の「美『髯』公：関羽」を例として紹介）。

④ ヒゲを剃るor蓄える理由を考える

ヒゲはある程度の年齢に達した男性には自然に生えてくるものであるが（だから世界的にも蓄えている地域が多い?）、自分は（男性が）ヒゲを蓄えることに対してどう思うか（OKかNOか）、またその理由を考えた（資料の「Q2」）。

その際、逆の意見を持つ人の理由についても考え、「価値観の違いで行為（習俗）は異なる」こと、「自分の判断（→行為・習俗）が絶対ではない」こと、「異文化は、受け入れられないとしても否定はしない姿勢が大切である」ことを理解した。

※ この授業を実施した2クラスとも、「ヒゲはNO」が男女とも大半を占めた。

理由は、「衛生上よくなさそう」が多く、「似合わない」等も。「OK」の理由としては、「似合う人なら良い」等があがった。

剃る理由として「戦いの際掴まれて不利」「剃刀や理容師の普及」、蓄える

理由として「生えているのが自然（髪の毛は僧侶等以外は剃らない）」「成人男性のシンボル（特徴・威厳）」「剃るのが大

変（剃刀が普及していないので毛抜き等で）」を紹介し、歴史学習において「現在と異なる当時の状況から考える」ことの重要性に気付かせた。

《生徒の評価》

2学期末の生徒による授業評価で、「異なる価値観から成る異文化（習俗など）の理解に役立つ内容でしたか？」に対する「そうだ」「大変そうだ」を合わせた回答率は、87.3%であった（他の選択肢は「あまりそうではない」「全くそうではない」）。9割弱の生徒が異文化理解に役立ったと解答している。

《実施者の感想》

- 「『文化は価値観により、地域・時代で異なる』こと、『現在の我々の文化（価値観）は絶対ではない』ことを実感させる」という目的は、達成できたのではないか。
- 現在は同じ「イスラーム文化」に属するエジプトとメソポタミアの、古代における（男性の習俗として）大きな相違点の1つを提示することで、以後行われるエジプト文明・メソポタミア文明の学習における両文明比較の足掛かりとなった。

4 全体を通して

本年度の実践は、生徒に批判的・客観的に自分の意見を持たせることを共通の課題として取り組んだ。新聞記事を授業に使うことによって大きな効果を得ることができた。今後とも生徒のクリティカルシンキングの伸長を目指し、工夫のある授業を心がけたい。

新聞を活用した国語科の授業実践例（２）

兵庫県立姫路東高等学校 校長 田磨 幸夫
教諭 池田 寛人

1、はじめに

本校はN I E実践校に指定されて2年目になる。昨年度は、稿者が単独で受け持つ授業時間の一部で、新聞を教材とした授業を実践した。その授業は、10月の初旬に「中秋の名月」取材した新聞記事を導入教材として活用し、「月」を素材にした和歌や漢詩を鑑賞する古典の授業であった。2年目になる今年度は、稿者が受け持つ学年（＝1年生）の現代文の授業時間の一部で新聞を活用した。その実践の概要を以下に報告する。

2、図表を含むテキストの読解

(1) 実践概要

新聞を活用した現代文の授業の試みとして、図表を含むテキストの読解力を伸ばすことを目的にした授業を行った。大学入試改革や学指改訂の中で、多様なテキストから情報を取り出したり、その取り出した情報を統合して推論したりする力の育成が目指されるようになったためである。新聞記事は文字テキストだけでなく、図表テキストを含むものが多い。そこで、図表テキストを含む新聞記事を教材として、図表との関係性を考えながらその記事を読む学習を行った。

本実践は11月の初旬に、1年生（＝1クラスあたり40人×7クラス）を対象に、「国語総合」の授業時間を用いて稿者ともう1人の担当教員がそれぞれのクラスで授業したものである。

(2) 実践内容

○単元と授業の流れ

使用している教科書に「空気を読む」（大修館書店『国語総合 現代文編』所収）という評論文教材があり、それには本文と関連のある図表も掲載されている。そこで、これを主教材として、図表との関連性を考えながら本文の読解を行い、そのパフォーマンス課題として新聞記事の読解を行う単元を構想した。

〈単元計画〉

第1次 「空気を読む」の読解

第1時 本文の前半を読解する。

第2時 本文の後半を読解する。

第3時 図表と本文を読み比べる。

第2次 新聞記事の読解

第4時 図表と本文の関連性を考えながらテキストを読解する。

※ 使用した新聞記事は後に掲載している

以下に、この単元における第4時の授業の大まかな流れを示す。

- I 本時の内容を伝え、新聞記事を配布する。
- II 新聞記事の本文の内容を、「Check!」を利用して確認させる。
- III 3つの図表がそれぞれ本文とどのように関わっているかを考えさせる。
- IV 扱う記事の図表が本文で述べられていることを裏付けたり補足したりする役割をしていることを確認させる。

○使用した新聞記事

「18歳の1票〈民泊〉」『読売新聞』（2018年8月4日（土）付朝刊）

18歳の1票 民泊

1 今を知る 2 背景を探る 3 類しあう

住宅の空き部屋などを利用して、有料で旅行者らを宿泊させる「民泊」が6月に解禁された。2020年東京五輪・パブリックに向けて訪日外国人の増加が期待される中、民泊は歓迎の受け皿として期待されている。

訪日客増加の受け皿

住宅の空き部屋を提供

「ホテルは高値を同じで値も高い。日本の生活に慣れてきた民泊を推した」

東京都品川区の民泊「アツリ」は、友人を訪れた中国人の王麗蘭（ワング）は笑顔で話した。東京タワーや銀座を観光し、ショッピングも予定している。民泊「アツリ」の住人栗山さん（仮名）は「アツリは分けて出してね」と説明する。

「ホテルは高値を同じで値も高い。日本の生活に慣れてきた民泊を推した」

栗山さん宅は住宅街にある一軒家だ。独立した高層の部屋を共有し、異文化交流を楽しむみたいと、民泊事業者に依頼した。宿泊客には近くの商店街の飲食店などを紹介し、地域経済の活性化にも役立つという。一家子が高層の民泊の受け皿に「ホームステイ」のようにならざるを得ない。

「アツリ」は、2017年の訪日外国人入籍者は過去最多の2869万人を記録した。観光客の増加は追いつかず、東京や大阪ではホテルの稼働率が8割を超えて予約を取れぬ状況が続く。政府は、東京五輪・パブリックに向けては、2020年の訪日客を4000万人とする目標を掲げ、達成に向けは、宿泊施設の確保が待たない。

2017年の訪日外国人入籍者は過去最多の2869万人を記録した。観光客の増加は追いつかず、東京や大阪ではホテルの稼働率が8割を超えて予約を取れぬ状況が続く。政府は、東京五輪・パブリックに向けては、2020年の訪日客を4000万人とする目標を掲げ、達成に向けは、宿泊施設の確保が待たない。

■宿泊施設不足

2017年の訪日外国人入籍者は過去最多の2869万人を記録した。観光客の増加は追いつかず、東京や大阪ではホテルの稼働率が8割を超えて予約を取れぬ状況が続く。政府は、東京五輪・パブリックに向けては、2020年の訪日客を4000万人とする目標を掲げ、達成に向けは、宿泊施設の確保が待たない。

■受け皿提供

日本国内ではこれまで旅館業法が十分でなく、旅館業法の許可を得ない「ヤミ民泊」が横行した。ゴミ出しや騒音などを巡る近隣住民からの苦情も後を絶たなかった。

こうした状況を正す住宅宿泊業法（民泊法）が6月1日に施行された。住環境を守るため、営業日数の上限を年180日とするなど規制も多い。観光庁によると、事業者の届け出は7月1日時点で18万7千件となっている。民泊仲介サイトへの掲載が今後、約5万件だったことを考えると低減だ。ルールに合った宿泊を認められれば、宿泊業者の働きになる。

（今月の民泊・木村盛）

なしの理選だ。注目されたのが住宅やマンションの空き部屋を提供する民泊だった。その土地の暮らしを体験できる宿泊スタイルとして、世界中で人気が高い。

■民泊の受け皿提供

日本国内ではこれまで旅館業法が十分でなく、旅館業法の許可を得ない「ヤミ民泊」が横行した。ゴミ出しや騒音などを巡る近隣住民からの苦情も後を絶たなかった。

こうした状況を正す住宅宿泊業法（民泊法）が6月1日に施行された。住環境を守るため、営業日数の上限を年180日とするなど規制も多い。観光庁によると、事業者の届け出は7月1日時点で18万7千件となっている。民泊仲介サイトへの掲載が今後、約5万件だったことを考えると低減だ。ルールに合った宿泊を認められれば、宿泊業者の働きになる。

（今月の民泊・木村盛）

「なせ民泊が注目されているのだろうか。」

「民泊の届け出件数が少ないのはどうしてだろう。」

外国人観光客15%利用

観光庁が2017年7～9月に日本を訪れた外国人を対象に行った調査によると、観光目的客の宿泊施設（複数回答）では、民泊の利用率が14.9%で、ホテル78.1%、旅館11.9%に続いて高かった。民泊利用率を国・地域別に見ると、シンガポール39.5%が最高で、フランス35.9%、インドネシア29.7%などが続いた。その他は米29.2%、韓国15.1%、中国14.3%などだった。

民泊を利用した外国人観光客に旅行中にしたことを複数回答で聞くと、「日本食を食べること」86.5%、「ショッピング」93.1%、「繁華街の街歩き」86.4%、「自然・風景地観光」77.0%が特に多かった。「日本の歴史・伝統文化体験」33.3%、「日常生活体験」27.0%、「ポップカルチャーを楽しむ」22.8%などは、民泊を利用しなかった観光客に比べて多いが目立つ。

訪日外国人旅行者数の推移

2869万1073人

民泊の届け出件数の推移

5867

5月11日 6月8日 7月15日 7月22日 7月29日 8月5日 8月11日

Check!

なせ民泊が注目されているのだろうか。

民泊の届け出件数が少ないのはどうしてだろう。

(3) 実践の振り返り

本実践は、図表と本文の関係性を考えることを学習課題とした授業だったが、授業者の

手応えはあまり良くなかった。その原因の一つは、学習内容が生徒たちの学習段階に合っ

ていなかったことだと考える。明示的な内容を考えることに慣れた生徒たちにとって、「関係性」という非明示的なものは考えにくかったのだろう。それまでの学習の中で、図表と本文の関係性以前に、文と文の関係性や段落と段落の関係性などについて考える経験を多くしていれば、生徒たちもその応用として今回の学習に進んで取り組めたのかもしれない。また、図表と本文の関係性といっても、そもそもどのような関係性が想定しうるのかを知識としてある程度身につけていけば、より取り組みやすかっただろう。つまり、図表と本文の関係性に限らず、文と文の関係性(=因果関係、具体と抽象の関係、対照的な関係など)についてある程度学習した上で、今回のような単元学習を行う方が効果的だっただろう。

3、文と文の関係性を考える考查問題として

(1) 実践概要

稿者が担当する1年生たちに、冬休みの宿題として『1日10分 言語力ドリル』(第一学習社)という教材に取り組みさせて、文章の「主張・理由・具体例」をつかむ練習をさせた。その応用問題として、冬休み明けの考查問題の中に、新聞記事の文章を素材にした問題を出題した。一般の人向けに作られる新聞記事の文章において、「主張・理由・具体例」をつかめるかどうかを試すことを目的にした実践である。

(2) 出題した問題

「(3) 実践の振り返り」の後に示す。

(3) 実践の振り返り

教科書に採録される文章と違い、実際的な話題であり、かつ抽象度があまり高くないので、新聞記事を活用し、先述したような問題を出題した。結果的に、手応えは良かった。そのように感じたのは、生徒たちがどの程度の文章であれば、文と文の関係性(=文章における論理)を自力で理解することができるのかを知る目安になったからである。また、文章そのものはそれほど難解なものではないが、論理的な思考を要するので、内容理解はできるが論理的思考力が高いわけではない生徒を確認することもできた。(もちろん、考查には時間制約があるため、読解する速度に課題があるなどといった可能性もある。)

今後も、さまざまなテキストを用いながら「主張・理由・具体例」といった文と文の関係性をつかむ練習をさせていきたい。

④ この文では、授業づくりの過程を振り返ることで、授業実践の改善に役立つ記事の活用が図る。この文では、単元の「田舎」(＝農村)から田舎の話題になる「農田」、農田を守る「農林業」(＝農業)、田舎の文化に関する話題「田舎」の話題で構成されている。①～③の話題で構成されている。①～③を並べると、①「田舎」に話題の起る、②「農田」に話題の起る、③「田舎」に話題の起る、となる。

⑤ 図は、授業づくりの過程を振り返ることで、授業実践の改善に役立つ記事の活用が図る。この文では、単元の「田舎」(＝農村)から田舎の話題になる「農田」、農田を守る「農林業」(＝農業)、田舎の文化に関する話題「田舎」の話題で構成されている。①～③の話題で構成されている。①～③を並べると、①「田舎」に話題の起る、②「農田」に話題の起る、③「田舎」に話題の起る、となる。

⑥ 図は、授業づくりの過程を振り返ることで、授業実践の改善に役立つ記事の活用が図る。この文では、単元の「田舎」(＝農村)から田舎の話題になる「農田」、農田を守る「農林業」(＝農業)、田舎の文化に関する話題「田舎」の話題で構成されている。①～③の話題で構成されている。①～③を並べると、①「田舎」に話題の起る、②「農田」に話題の起る、③「田舎」に話題の起る、となる。

⑦ この図は、授業づくりの過程を振り返ることで、授業実践の改善に役立つ記事の活用が図る。この文では、単元の「田舎」(＝農村)から田舎の話題になる「農田」、農田を守る「農林業」(＝農業)、田舎の文化に関する話題「田舎」の話題で構成されている。①～③の話題で構成されている。①～③を並べると、①「田舎」に話題の起る、②「農田」に話題の起る、③「田舎」に話題の起る、となる。

⑧ 図は、授業づくりの過程を振り返ることで、授業実践の改善に役立つ記事の活用が図る。この文では、単元の「田舎」(＝農村)から田舎の話題になる「農田」、農田を守る「農林業」(＝農業)、田舎の文化に関する話題「田舎」の話題で構成されている。①～③の話題で構成されている。①～③を並べると、①「田舎」に話題の起る、②「農田」に話題の起る、③「田舎」に話題の起る、となる。



【図】「田舎」(＝農村)から田舎の話題になる「農田」、農田を守る「農林業」(＝農業)、田舎の文化に関する話題「田舎」の話題で構成されている。

4、終わりに

今年度の実践を振り返ると、新聞に教材として活用する可能性は大いにあるように感じたが、授業づくりが新聞を用いることを目的としたものになっていた。結果的に、強引な形で授業を進めてしまったことが反省点の一つである。国語科の教員として、新聞記事に限らず様々なテキストに教材としての価値があるという心構えを持って、日々自らさまざまなテキストに触れておくことが重要だと思った。今後、教材に対して固定観念を持たず、授業づくりをしていきたい。

新聞を通して社会への関心を高め、社会の一員としての自覚を高める

兵庫県立武庫荘総合高等学校 校長 宗石 理
教諭 大畑 睦子

1. はじめに

本校は平成30年度、実践校指定をいただき、「まなび支援部」が窓口となってNIEの取り組みを始めた。本校独自の部である「まなび支援部」は、生徒の学ぶ意欲を刺激することを目標に、全校生に対する働きかけをしている。新聞を使った活動は、部が立ち上がった9年前から継続して行ってきた。今年度、介護福祉士の国家資格取得をめざす「福祉探求科」が開設されたこともあり、改めて新聞を使った活動を部の重点目標に据えて取り組んできた。

本校は教育方針の1つに、「自分を知り、社会を知り、自分と社会をつなぐ」を掲げてきた。新聞はそのためのツールとしては最適だと言えるが、新聞を購読している家庭は年々減少しており、1年次生では、学校の課題以外では新聞は全く読まないという生徒が7割近くを占める。NIEで提供いただいた新聞はまなび支援室に置き、何時でも読めるようにしていたが、残念ながら課題が出たとき以外はほとんど立ち寄る生徒はいない。その中で、推薦入試を控えた時期に3年次生が1名、毎日放課後に読みに来ていたのが、今後の働きかけのあり方を示唆してくれたように思う。

2. 実践報告

(1) 朝のSHRで短い記事を継続して読む～「Manabee morning(マabeeーモーニング)」～

全校生が取り組んでいる「Manabee morning」は、週2回の実施をめどに、入学後間もなくから3年次の卒業考査直前まで継続した。A5サイズ of 用紙におさまる短い記事を載せ、3年間で約130号を発行してい

る。年次ごとに内容は変えており、1年次には新聞に慣れて親しみを持つような記事を、3年次になると社会の動きや課題に気付けるような記事を念頭に置いて探している。各年次団の教員にも年に1つ以上の記事を選んでもらっている。このことで記事選びの視点が多様化することは大きなメリットである。進路決定の参考になる、自分を肯定する、人生の先輩たちの生き方に触れる等、新聞には授業ではなかなか取り上げられない内容をどんどん取り入れられる良さがあり、担任と生徒とのコミュニケーションの一助になることも期待している。

(2) 年3回、新聞課題に取り組む

①ゴールデンウィーク課題

関心のある新聞記事を切り抜いて課題用紙に貼り、感想を書いて提出

②夏休み課題

「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募

③冬休み課題

用意された記事の中から1つ選び、「選んだ理由や、気になったこと疑問に思ったことを書く」と、「選んだ記事に書かれている、訴えや疑問、新たな視点などの問いかけをどう感じ、どうすればいいと考えるか」に答える。

3度の課題はそれぞれに形態を変えている。初回となるゴールデンウィーク課題は、まずは新聞を手にとること、興味を持って読むことを目標としている。夏休みはコンクールへの応募である。この課題は身近な誰かから意見を聞いてまとめなければならず、コミュニケーションとその後の本人の思考の深化が問われるというものである。他者の意見に揺さ

ぶられた思いを素直に表現できる生徒と、伝聞調で終わってしまう生徒との差は大きいですが、全校生から集めて応募している。今年度は2年次生から1名、奨励賞受賞者が出た。本校も学校奨励賞をいただくことができた。

冬休みはある程度のボリュームで、なにがしかの問いかけをする記事をこちらで選んでいる。今年度の記事の見出しは以下の通り。

- A. 「iPS細胞 実用化への課題探る」
- B. 「大学進学のお機曾 男女で平等？ 性別で格差 違和感もって」
- C. 「尼崎城再建天守 観光の切り札か市の重荷か」
- D. 「土にかえる樹脂 食器に 編み出した加工法プラゴミ減へ」
- E. 「どう思っていますか eスポーツはスポーツなのか」
- F. 「自分で考えて動く 『スマホ顔』も社会も変わる」
- G. 「点字ブロック ここにあれば…」
- H. 「労働者ではなく『仲間』 移りきたる民と」

この形になると、3年次生によく考えられた作品が目立つようになる。例えば、「D」を選択した生徒の「Manabee morningでクジラが5トン以上のプラゴミを餌と間違えて食べて亡くなったという記事を見て悲しくなり、プラスチックごみの減らし方について考えていたら、この記事が目飛び込んできました」というような普段の活動と課題をつなぐことができた作品。また、記事をきっかけに自分の行動を振り返った次のような作品。「F」を選択した生徒の「私はこの記事を読んで、自分自身で考えることの大切さを改めて感じました。普段わからないことや気になったことがあっても、スマホさえあれば数秒で答えが見つかるので、自分自身で考える機曾はほぼありません。自分で考えず、スマホに頼ることが当たり前になった社会を想像すると、人生面白くなさそうだし、少し怖くもあります。

自分の考えや意見を失ってしまうのは嫌なので、まずは自分の頭で考えてみようと思いました。」その他、「B」の記事を読み、自分がかつて親から言われたことに改めて疑問を持った生徒がいたり、「E」の記事については、賛否両論、いずれも経験や学びに基づいており、読み応えがある作品が多かった。1年の最後の課題で、生徒が成長してきたということもあるが、やはり、記事を選ぶことが説得力のある作品を書くためには重要であると認識させられた。今後、生徒の記事選びについてなにがしかの働きかけを考えたい。

(3) LHRで「回し読み新聞」に挑戦

2月には、1年次全クラスがLHRの時間に「回し読み新聞」に取り組んだ。1年次担任の国語の先生からの提案で、まなび支援部も全面的に協力しての取り組みであった。



時間が短い中ではあったが、生徒たちは新聞に興味を持ち、クラスメイトが選んだ記事のプレゼンに聞き入り、楽しんで新聞を作り上げたようだった。作った新聞の中から、クラス代表作1つが中央階段に掲示された。感想をいくつか紹介する。

- ・友達が興味を持った新聞を見て、「こういうことに興味があるんだ」というような発見がありました。
- ・自分の中で思っていることはたくさんあるのに、一言コメントにしようとするとても難しかったです。
- ・いつもなら飛ばしてしまうような記事も、みんなの紹介で興味がわいた。

(4) 「MCニュース」(壁新聞)の作成

本校では1年次生に新聞委員を置いている。今年度は新聞委員による壁新聞作りに取り組んだ。タイトルは新聞委員会で話し合っ「MCニュース」に決まった。(MCは、Mukonosou Comprehensiveの略称)月ごとに担当クラスを決め、3名の新聞委員がみんなに読んで欲しい記事を選んで作成した。



できあがった壁新聞は、中央階段1階に掲示した。この経験をベースに、2月の学習発表会で展示発表する壁新聞を1月から2月にかけて作成した。今度は各クラスにテーマを設け、テーマに沿った記事を選び、3人で協力してコメントを付けるという活動である。

テーマは次の5つである。

- A. 「平成」を振り返る
- B. 国際社会・世界のいま
- C. 災害に備えよう
- D. 高校生は今
- E. 環境問題と私たち



まず、テーマに沿った記事をたくさん切り抜き、コメントをつける。この時、選んだ人だけでなく、ほかの2人もコメントすること

で、記事の内容を共有するようにした。次に選んだ記事から壁新聞に載せるものを選び、3人で協力してコメントを考えて作成していった。最後に、壁新聞とは別に選んだテーマについて、3人の考えなどをまとめた模造紙を作り、併せて展示するようにした。

この回の取り組みは、3人で協力することも重要なポイントとして指導した。事後アンケートで「協力度メーター」を書かせたところ、100%から20%とばらついたが、100%と答えた班は、班員の満足度も高く、出来上がった壁新聞も見やすかった。何度もコメントを書いたので、そのことが大変だったと答えた生徒もいたが、全体としては好評であり、新聞を読む機会を持ちたいと答えた生徒も多かった。「時間を忘れるくらい真剣に取り組めた」という感想もあり、1人だけで読むよりも、友人らと話しながら読むほうが、理解も深まり、興味を持って取り組んでいるように感じた。

(5) 記者派遣事業

10月17日、読売新聞大阪本社より、宣伝広報部の西村泰輔さんに来ていただき、「伝わる文章とは～新聞に学ぶ」と題した講演をしていただいた。対象は2年次生全員。「総合的な学習の時間」で取り組んでいる課題研究のまとめの時期が近づく中、論文を書く参考にとお願いした。新聞が文字だけだったらという架空の紙面から、見出しが付き、写真が入っていく工程がスクリーンに映し出され、見やすく、わかりやすくなっていく紙面に皆が驚いた。また、「現在・過去・未来」の時系列を意識して書くというアドバイスに生徒たちはうなずきながら聞き入った。

(6) 福祉探求科との活動

本校には今年度、新たに福祉探求科1クラスが開設された。介護福祉士をめざす生徒たちと、「現代社会」の時間を使って、NIEに

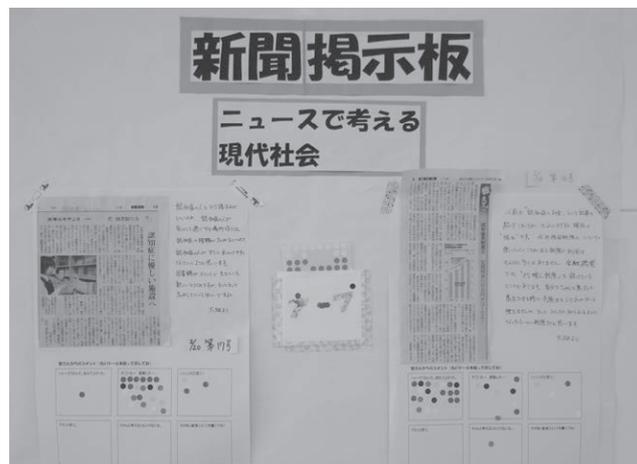
取り組んだ。

家で新聞をとっているという生徒は4割を切っている。そこでまず、6月に新聞について学んだ。クラス全員に、朝刊・夕刊1セットずつ配布し、まずはページをめくってどんなことが書いてあるかを確認。次に、見出し比べ。ある日付の朝刊を持っている生徒を前に並ばせ、トップ記事の見出しを比べた。ちょうど米朝会談の記事が出た時で、その日使った6紙がほぼ同じ見出しであることに感心していた。特に大きな事件がなかった別の日の一面では、同じニュースがトップになったり、2番手・3番手になったりと新聞社ごとの違いが分かるもので、生徒からは、「社によってニュースの重要度が違うことが分かった」「見出しの字の大きさや写真の大きさが違い、そんなことから伝えたい気持ちが分かった」という感想が出た。

後期に入ると、授業で福祉関係の新聞記事を紹介し、生徒たちがどう感じたかをあらかじめ用意したいくつかのコメント欄にシールを貼って表示するという取り組みを始めた。「ニュースで考える現代社会」と題し、教室の後ろに模造紙で掲示板を作った。高齢者をめぐる社会の動きを感じられるような記事を紹介しつつ、生徒たちが課題を考えられるような声掛けをしていった。生徒がシールを貼るコメント欄は、「へえ～そうなんだ。知れてよかった」「すごいな～感動した…」「いいことだと思う!」「アカンと思う」「ちゃんと考えないといけないな」「直接コメントを書く」の6つ。反応が大きかった記事のひとつ、「認知症とお金 1 預金を引き出せない」では、認知症の親の預金を子どもが代理で引き出すことができないというルールに驚き、財産をめぐる課題を認識するきっかけとなった。それは福祉の授業で学んだ成年後見制度の理解を助け、この制度が持つ問題点を考えることにもつながったようである。また、「高齢者ケア ペットに苦慮」に対しては、記事が問いか

ける課題（高齢者と動物の福祉）に、どう取り組んでいけばいいかクラスで考えた。

このクラスの生徒は、最初のアンケートで7割超が新聞をほとんど、あるいは全く読まないと答えたが、掲示した新聞へのコメントシールは7割以上が貼っていて、新聞への関心を持たせることはできたと感じる。



3. 今後の課題と展望

生徒たちの課題作品を読んでいると、着目点はとても良いのになかなか思考を深められず、ありきたりの結論になってしまうものをよく目にする。少し手を入れればもっと良くなると思うが、なにぶん、まなび支援部3人で全校生徒約1000人の作品を読んでいるので、それは容易ではない。生徒たちが書いたものは、新聞課題に限らず、まなび支援部で企画した行事の振り返りなども、よく書けているものをピックアップしてまなび支援部通信「Manabee(マナビー)」で紹介している。ほかの生徒が書いたものを読むことで関心を高め、また視野も広げてほしいし、同時に、よく書けているものを読んで書き方を学んでいってほしいという願いも込められている。テーマとして掲げた「社会への関心を高める」ために打った手は、一定の成果を上げていると思われる。だが、生徒たちが主体的に取り組むにはまだまだなので、今後とも教員を巻き込んでの働きかけを継続して行っていきたい。

社会とつながる NIE 実践

兵庫県立津名高等学校 校長 魚井 和彦
教諭 大石 昇平

1. 本校の概要

本校は、2020年に創立100周年を迎える普通科高校である。2018年度は1年生4クラス、2・3年生5クラスの構成となっており、各学年ともに総合科学コースが1クラス設置されている。生徒の進路希望は進学から就職まで多様であるが、「生徒の伸び率 No.1」をスローガンに掲げ、個々の進路実現を目指した手厚い指導を心がけている。

2. 実践の概要

津名高校の取り組みとしては、新聞を教育活動に取り入れることで、社会への関心を高め、主体的に社会に関わる生徒を育成すべく、次のような取り組みを実施した。①学年フロアでの新聞閲覧場所設置、②2年生の総合的な学習の時間「REBORN PROJECT」（後述）での新聞記事の活用、③週に1度の「朝のかわら版」タイムの3点である。

1点目の学年フロアでの閲覧については、1学期には2年生フロア、2学期には3年生フロア、3学期には1年生フロアへと新聞の閲覧ラックを移動させていった。

2点目には、週に1日（木曜または金曜）の「朝の10分間読書」の時間に、「朝のかわら版タイム」と題して新聞記事を全校生徒で講読する時間を設定した。

そして、3点目に、本校では2017年度から2年生文系生徒の「総合的な学習の時間」に「REBORN PROJECT」と称した地域課題解決学習を設定している。この取り組みの中で、地域課題を探る際に、新聞記事から情報を集める時間を設定した。

これらの取り組みを計画した背景には、生徒たちが新聞を読むことで、社会への関心を高め、積極的に社会とつながりを持とうとしてもらいたいという期待があった。NIE実践を開始した当初のアンケートでも、新聞を読む頻度が「毎日」と答えたのは約4%の生徒であり、「ときどき」でも約20%に過ぎなかった。そのような現状に対し、新聞に触れ、社会のことを知るきっかけになることを願っていた。

3. 提供を受けた新聞と閲覧スペース

本校では、2018年5月から2019年2月まで朝日・神戸・産経・日経・毎日・読売の6紙を提供していただき、生徒に閲覧できるように設置した。その際、学年のニーズに応じて、学期ごとに閲覧ラックを移動していった。1学期には2年生が総合的な学習の時間で活用しやすいように、2学期には3年生が推薦入試での時事ニュースに対策できるように、3学期には1年生が2年生へと進級した際に総合的な学習の時間で活用できるように、各学年へ配慮して設置した。

また、「朝のかわら版タイム」で取り上げられた記事が、教科を問わず、授業の材料や話題につながることも多くあった。授業以外でも、3年生の進路指導の際に、面接練習の話題に使われたり、導入教材として使われたりという効果もあった。

(2) 「REBORN PROJECT」

「REBORN PROJECT」は、2017年度から始まった、2年生文系生徒による「総合的な学習の時間」の授業である。1年を通して、自分たちで地域の課題を探し、解決策を考え、市役所をはじめとする地域の方々にプレゼンテーションしていこうという取り組みである。

この取り組みの中で、情報収集の時間として、4月に2時間の時間を設定し、地域課題を探す際に新聞を活用していった。具体的な方法としては、約135人の生徒が2人1組のペアになって、2018年1月から4月までの新聞から地域課題や地域活性化に関する取り組みを扱う記事を洗い出し、リストアップしていくという作業である。その後、エクセルファイルに「新聞名・日時・紙面・見出し」を入力してまとめたものを印刷し、生徒に配布した。生徒はそのリストを見て、自分の関心のある記事がどこに載っているのかを探し、情報収集していった。

資料3 新聞記事から洗い出した地域課題データベース（抜粋）

No	id	新聞名	月日	紙面	テーマ1	テーマ2	テーマ3	見出し
1	105	神戸新聞	112	25	IT	観光	街づくり	地域の味 写真で発信を
2	209	朝日新聞	107	2	it	国際		広がるit期待とリスク
3	113	神戸新聞	112	25	IT			地域の味 世界に発信を
5	117	神戸新聞	115	27	IT	教育	健康	ネット正しい利用法は
7	133	神戸新聞	1233	31上	IT			役所パソコン画面に「定時退庁を」
8	134	神戸新聞	1222	23上	IT	教育		災害対応 ロボットの連携で
9	136	朝日新聞	1221	27中	IT			ドラクエの堀井さん、洲本市の名誉市民に
10	136	朝日新聞	1221	30中	IT	国際		水中ロボットから生中継

この取り組みを通して、「初めて新聞を一面から終わりまで目を通した」という生徒もいた。普段の生活で、新聞を手にする生徒は非常に少なく、新聞をとっていない家庭も複数あることがアンケートからわかってきた。そのような生徒にとっては、地域課題だけではなく、新聞がどのような構成になっており、どんな情報を掲載しているのか知るきっかけになったと期待している。

資料4 11月28日 REBORN PROJECT 成果発表会



4. NIE 記者派遣事業

2019年3月7日、NIE 記者派遣事業の一環として、共同通信社神戸支局の儀間朝浩支局長にお越しいただき、「紛争地を取材する」と題してご講演いただいた。生徒が国際問題に触れて考えられるような講演内容を兵庫県 NIE 推進協議会に依頼したところ、この講演会が実現することとなった。

儀間支局長は 2003 年から始まったイラク戦争において、米軍の従軍記者として戦地を取材された経験をお話して下さった。紹介された現地の写真、戦地の実情や兵士の素顔など、自分たちの知らなかった世界に触れた生徒たちは儀間支局長のお話に聞き入っていた。また、1996 年から 97 年にかけて起こった、在ペルー日本大使公邸占拠事件の取材経験からは、記者としての報道のあり方を考えさせられたご経験も披露された。

講演会後の生徒アンケートによれば、今回のご講演は、遠い国の出来事であった国際問題や戦争が、よりリアルに感じられるようになる機会となったようである。また、生徒の感想には、命がけの取材を経て届けられた情報に対して、「新聞はたくさんの思いや考えが詰まったものだと感じた」といった感想も見受けられた。

資料5 NIE 記者派遣事業講演会



5. 成果と今後の課題

以上のような取り組みを経て、生徒と新聞、さらには社会問題への距離が近づいたのではないかと期待している。年度末にとったアンケートによると、NIE の実践活動を通じて、「社会への関心」が高まったと答える生徒が多くいた。冒頭でもお示しした通り、本校生徒の実態としては、普段から新聞に触れている生徒は少なかった。その点、新聞に触れ、週に一度でも新聞記事を読むことによって、社会問題への関心が高まったことに一定の成果を感じている。

今後は、さらに自発的に新聞を手に取り、自分で新聞から情報を得ようとする姿勢を育てていくことが課題である。自ら新聞を読む機会が増えて、習慣化していくには、まだ時間がかかりそうである。その点、新聞の閲覧コーナーの利用回数が増えるような取り組みが今後さらに必要である。

2019 年度も実践指定校として、新聞の活用を通じて、社会への関心を持ち、主体的に社会にかかわっていく生徒が増えるよう尽力していきたい。

MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.

【特別支援学校】

神戸聴覚 NIE 希望の風にのって

～主体的、対話的に考え、そして深い学びへ～

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校 校長 森村 美佐
教諭 津守 温子

1、はじめに

本校は、神戸市垂水区に位置し、1、2歳児を対象とした保育相談部から幼稚部、小学部、中学部、高等部まで聴覚に障害のある幼児、児童、生徒たちが在籍している。

聴覚に障害がある子どもは、耳から入る情報が制限されるため抽象的な言葉が習得しにくい傾向にある。自ら進んで文字に触れる手だてはとても重要で、さまざまな情報や文章を正確に視覚から確認できる「新聞」はとても魅力的な教材の一つである。

本年度、本校は兵庫県下の特別支援学校において初のNIE実践指定校となった。

子どもたちが社会で自立するために必要な「ことばの獲得」、「世の中を知る力」、「判断する力」を養うために、新聞を活用した「深い学び」につながるNIEの取り組みがスタートした。

2、新聞の置き場と整理方法

本校では、全校を対象とした新聞の置き場を、学校内の中央にあたる職員室前廊下に開設した。



【上の新聞台は本校職員の手造りの力作】

新聞台の上に当日分の新聞を置いている。一目で見やすく、またそのまま閲覧できるように天板は傾斜と滑り止めが施されている。壁面に前日の新聞を掲示し、一カ月分は中央の棚に重ねバックナンバーも取り出しやすいように工夫した。一カ月を過ぎたものは、可動式になっている棚の下にある引き出しに保管するようにした。分からない語句があった時のために辞書を常設した。



この場所に設置したのは、全校生、職員が利用する頻度が高いという理由からであるが各学部のHR教室棟は距離があるため、小学生新聞など各学部に関連する新聞は、新たに各教室棟の廊下に設置場所を設け児童生徒が活用しやすいように工夫した。



3、実践内容

小学部、中学部、高等部から各2名、専門部から1名の教員が中心となってNIEチームを組織し、各学部の見童、生徒の実態に合わせてNIEに取り組んだ。

小学部

- ① 新聞に親しもう ② 新聞で伝えよう
③ 新聞を読もう ④ 新聞を作ろう

の4点を活動のポイントとした。

① 「新聞に親しもう」

主に低学年や重複児を中心とした実践は古新聞を使用しバッグを作ったり、新聞の写真の色ごとに集める等、新聞に触れあう事を目的とした。



《新聞エコバッグ》



《色集め 赤》



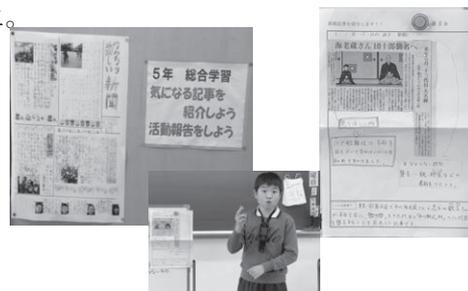
② 「新聞で伝えよう」

中学年では理科の観察で気付いたこと、社会見学や町探検で分かったことなどを新聞の様式にまとめた。自立活動では、「自分の聞こえ」「小学校との違い」について話し合ったことをまとめた。



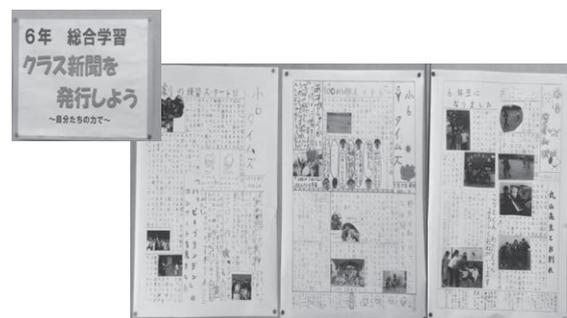
③ 「新聞を読もう」

5年生は曜日ごとに担当を決め、興味のある記事を選び、気になるニュースを紹介した。

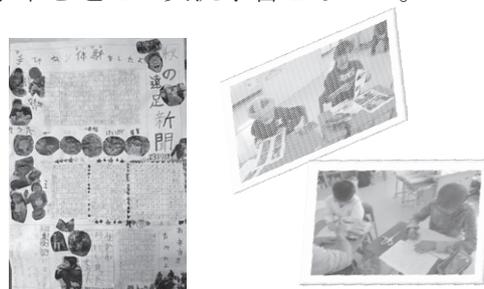


④ 「新聞を作ろう」

6年生はクラス新聞を作り発行を行った。その際、見出し、インタビュー、編集後記をポイントに作成を行った。



また遠足などの学校行事の事後学習として、1年生から6年生の縦割り班で、新聞を作成し発表した。新聞作りを通して学年を超えた交流学习となった。



中学部

《 N I E公開授業 》

平成30年12月7日

中学部3年の社会科公民で公開授業を行った。「世論とマスメディア」という単元で新聞を題材にして新聞の是非について考え、ディベート形式で行った。



初めに生徒たちは自分の意見を発表し意見交換を重ねていくうちに、友達の見解を知り自分の意見を「変える」か「変えない」か、どうすべきかを深く考えることができた。

《 授業指導演案 》

社会科学習指導略案

兵庫県立神戸東灘特別支援学校
授業者 喜田 裕介

- 1 日時 平成30年12月7日(金) 2校時
- 2 場所 中学部3C教室
- 3 対象生徒 中学部3年(男子4名、女子1名、計5名)
- 4 単元名 「世論とマスメディア」
- 5 本時の目標
「マスメディアは世論に影響を与えており、世論と風俗を相互に影響を与えていることを理解する。」
- 6 本時の展開

	生徒の学習活動	配慮事項	録音、取材等
(事前)		・客席にモニターを配置し、使用する映像を待機中に選しておく。	半響付をDVD「忘れレタス」
導入 (15分)	□「手話ディベートをしよう」 ・テーマ「新聞は必要?or不要?」	・討論の際のルールを最初 に再確認する。 ・お互いの意見を言う機会 が均等になるように配慮 する。 ・お互いの意見が見やすい 位置に移動させる。	スライド 司会セット
展開 (30分)	□「手話演のふりかえり」 ・手話演「忘れレタス」で新聞が使われている場面を見る。 □「『号外』のなごみは何だろう?」 ・真中で配られた号外記事内容を想像して、各自で号外の見出しと記事を書いて発表する。 □「エピソード新聞を作ろう」 ・この物語のあと、新聞を作るとしたらどんな内容になるか、各自で見出しと記事を書く。 □「新聞と玉塚の関係とは?」 ・なぜ真中で玉塚の行為が新聞として発行されたのか、その理由を考える。 ・各生徒に配布された新聞の中から「今日の総理の発言」が書かれた記事を探し、内容を確認する。 ・マスメディアと内閣の対立関係が際立つことを確認し、対立の上下により風俗が左右されるため、マスメディアは行政が国民の対立を導いているのかを振り返る役目もあることを確認する。	・動画には半響をつけ、必要ポイントで短くまとめ ておく。 ・「号外」の意味を確認し、 これまで発行されてきた 号外の例を見る。 ・見出しと記事を入力でき る。真中半響付をプリント を配布。 ・「もし新聞が発行されな かったら?」「もし発表内容 と違うことを玉がしてい たら?」と問いかける。 ・見つけにくい生徒に對し ては、ヒントとして風俗面 を指し示す。 ・「世論」の意味と読み方を 確認する。	半響付をDVD 新聞の号外 新聞作りビデオ
まとめ (5分)	□本時のまとめを行う。	・本時のまとめをまとめたプ リントをノートに貼らせ る。	まとめプリント

7 評価の観点
マスメディアは世論に影響を与えており、世論と風俗を相互に影響を与えていることを理解できたか。

実はこの公開授業の前月に本校の文化祭があり、中学部は、本時の授業者が作成した手話劇を発表している。劇中で「号外」が登場する場面が設定されていた。



この場面が本公開授業の新聞の意義につながる仕掛けであったことが分かった時、生徒たちは大いに興味をもって学習に取り組むことができた。

そしてこの劇中の「号外」にはどのようなことが書かれていたか、見出しや記事を想像させ、それぞれの考えをワークシートに記入し発表を行った。この活動により、生徒たちは端的に簡潔に他者に伝える表現方法を考えるきっかけとなった。

また実際に街頭で配布された号外を紹介することも行った。実物を提示することによりさらに関心が深まった。



本学習を通して、生徒たちは学習と実社会の繋がりを再認識し、主体的で対話的な授業を展開することができた。



高等部

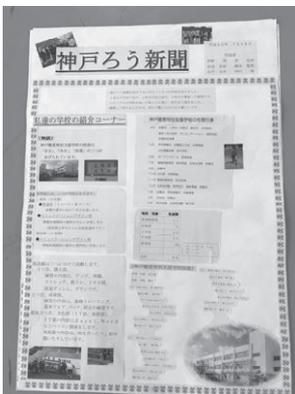
《NIE 交流 in 長崎ろう学校》

本校と同様に聴覚特別支援学校でNIE指定校がないものか他の都道府県を調べてみた。その結果、長崎県立長崎ろう学校が指定を受けていることがわかった。本校高等部2年生が修学旅行に行く予定であった長崎県にあり、思い切って連絡を取ったことから両校の交流がスタートした。

自分たちが作成した新聞を互いに送り合いながら情報交換を行った。

12月の修学旅行では、長崎ろう学校へ実際に訪問させていただき直接対面しての交流が実現した。学校内も見学させていただき、長崎校で行われているNIEの様々な取り組みや工夫がわかった。特に、被爆地である長崎において毎年夏に掲載される平和に関する特集記事を用いての平和学習に感銘を受けた。本校の生徒たちは、同じ時期に自分たちの地元で掲載される戦争の新聞記事との量の違いと内容の深さに驚き、深い興味をもって熱心に読むことができた。

互いのNIEの取り組み、そして新聞を通して生徒同士も打ち解け、大変有意義な交流を行うことができ素晴らしい経験となった。



記者派遣事業

《出前授業&速攻新聞》

神戸新聞社の廣畑記者に來校いただき記者の仕事について教えていただいた。

その後、生徒達が新聞記者になりきり廣畑記者に30分の擬似インタビューを行った。その取材をもとに班ごとにまとめとレイアウトを相談して30分で即興新聞を作るという活動に挑戦した。

なんとか完成し発表することはできたが、人の意見を聞き、まとめ、他者に分かりやすく伝えることの難しさを改めて児童・生徒達は痛感することができた。



《疑似インタビューの様子》

4、成果と今後の課題

新聞を活用することにより子どもたちの世界が広がり社会への関心が高まったことを実感している。児童、生徒が生き生きと主体的に考え、思考力、判断力、表現力を伸ばしていくために、今年の実践をもとに、さらに発展したものにしていきたいと考えている。

【2018年度兵庫県 NIE 実践指定校】

通常枠 20 校（◆は継続校 ◇は新規校）

〈通常枠〉小学校 7 校

◆西宮市立春風小学校	西宮市上甲子園
◆伊丹市立池尻小学校	伊丹市池尻
◆三木市立豊地小学校	三木市細川町
◆たつの市立揖西東小学校	たつの市揖西町
◇神戸市立向洋小学校	神戸市東灘区向洋中
◇加古川市立川西小学校	加古川市米田町
◇養父市立建屋小学校	養父市建屋

〈通常枠〉中学校 4 校

◆猪名川町立猪名川中学校	猪名川町白金
◇神戸市立山田中学校	神戸市北区山田町
◇尼崎市立大庄北中学校	尼崎市大庄北
◇西宮市立平木中学校	西宮市平木町

〈通常枠〉中学高等学校 1 校

◆神戸山手女子中学校高等学校	神戸市中央区諏訪山町
----------------	------------

〈通常枠〉高等学校 7 校

◆兵庫県立兵庫高等学校	神戸市長田区寺池町
◆兵庫県立湊川高等学校	神戸市長田区寺池町
◆兵庫県立北須磨高等学校	神戸市須磨区友が丘
◆兵庫県立加古川北高等学校	加古川市野口町
◆兵庫県立姫路東高等学校	姫路市本町
◇兵庫県立武庫荘総合高等学校	尼崎市武庫之荘
◇兵庫県立津名高等学校	淡路市志筑

〈通常枠〉特別支援学校 1 校

◇兵庫県立神戸聴覚特別支援学校	神戸市垂水区福田
-----------------	----------

MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing.



News paper in Education

◇教育に新聞を◇

2018（平成30）年度
『兵庫県N I E実践報告書』

－2019（令和元）年5月発行－

兵庫県N I E推進協議会 編

〒650－8571

神戸市中央区東川崎町1－5－7

神戸新聞社読者本部内

電話 078(362)7054 ファクス 078(362)7424

E-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

HP <http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/>

「教育に新聞を」実践 中学校編

- ◇ “今” を知って伝えよう！ (猪名川町立猪名川中学校)
- ◇ 新聞活用を通じた生徒の言葉の育成 (神戸市立山田中学校)
- ◇ 新聞に親しみ、「学力」向上を目指す (尼崎市立大庄北中学校)
- ◇ N I E ノートから世界を考える。 (西宮市立平木中学校)

「教育に新聞を」実践 小学校編

- ◇ 新聞を見てみよう！ 応募してみよう！ (西宮市立春風小学校)
- ◇ 主体的に生き生きと学び合う子どもの育成 (伊丹市立池尻小学校)
- ◇ 新聞に親しもうⅡ～論理的思考力の育成のために～ (三木市立豊地小学校)
- ◇ わたしたちの生きる社会に学ぼう
～子どもの学びと社会をつなげるN I E～
(たつの市立揖西東小学校)
- ◇ 新聞を読み、内容や感想をまとめる活動を通して、書く力を高める
(神戸市立向洋小学校)
- ◇ 新聞をつかった表現力の育成について
～相手を意識して読む・書く・話す～ (加古川市立川西小学校)
- ◇ Let's do it together! Let's start!
～全校で取り組んだ English Marathon～
(養父市立建屋小学校)

「教育に新聞を」実践 特別支援学校編

- ◇ 神戸聴覚N I E 希望の風にのって
～主体的、対話的に考え、そして深い学びへ～
(兵庫県立神戸聴覚特別支援学校)